

川越田遺跡Ⅲ

場外車券場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

本庄市教育委員会



遺跡遠景（南西から）



遺跡遠景（北西から）

序

本庄市はかつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一誕生の地として広く知られているところです。そうした豊かな歴史的背景と文化的風土をもつ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書に報告する川越田遺跡は、大規模な河川跡に沿って展開する古墳時代の集落遺跡です。川越田遺跡の河川跡は現在の女堀川にあたると考えられますが、この旧女堀川沿いには、川越田遺跡と隣り合うようにして後張遺跡、今井川越田遺跡など県内を代表する古墳時代集落の分布が知られており、これまでに発見されている古墳時代の住居跡の数は、川越田遺跡を含め、実に350棟以上にのぼります。また、付近には県内最古の古墳とされる鷲山古墳や飯玉東遺跡の方形周溝墓群が所在するなど、当時のヤマト政権といち早く結び付いた首長層の存在も想定されており、川越田遺跡の周辺が古代児玉地域の中心地としての役割を果たしていたことが窺われます。今回の川越田遺跡の調査においても、古代児玉地方の歴史を解明するうえで重要な資料を積み重ねることができました。

今日に残された貴重な文化遺産をこの後も長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、埋もれていた歴史を明らかにすることは、よりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財保護の普及・啓発として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、川越田遺跡の記録保存に格別のご理解を賜り、現地調査から資料整理、本書の刊行に至るまで多大なご協力をいただきました株式会社サテライトこだまには、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、事業の全般にわたってご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた地元各位、直接発掘調査の労にあられた皆様にご心よりの御礼を申し上げます。

平成20年3月

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町高関字北田下ノ老丁141番1ほかに所在する川越田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は株式会社サテライトこだまが計画する場外車券場の建設にともない、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査、整理調査および報告書作成に要した経費は、株式会社サテライトこだまからの委託金であり、平成18年度および平成19年度川越田遺跡発掘地調査受託事業として実施した。
4. 発掘調査面積は、本庄市川越田遺跡のうち約1,380㎡を対象とした。
5. 発掘調査期間は以下のとおりである。

自 平成18年7月3日
至 平成18年10月31日
6. 川越田遺跡は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和56年～57年にかけて発掘調査を実施したA地点について『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』が、児玉町遺跡調査会が平成4年～5年にかけて発掘調査を実施したB・C地点について『川越田遺跡Ⅱ』が刊行されている。今回のE・F・G地点の報告書は、『川越田遺跡Ⅱ』に次ぐ刊行となるため、『川越田遺跡Ⅲ』とした。
7. 発掘調査担当は本庄市教育委員会文化財保護課恋河内昭彦・松本 完・的野善行があたり、有限会社毛野考古学研究所有山径世が現地調査員として専従した。
8. 発掘調査に関する航空写真撮影、航空測量は、有限会社協同測地開発に委託して実施した。
9. 整理調査期間は以下のとおりである。

・平成18年度
自 平成18年10月1日
至 平成19年3月15日
・平成19年度
自 平成19年10月26日
至 平成20年3月25日
10. 整理および報告書刊行にかかる業務は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
11. 本書の執筆は、Ⅰを本庄市教育委員会文化財保護課が、Ⅱ～Ⅴを有山が担当した。
12. 本書の編集は、本庄市教育委員会文化財保護課の指導に基づき、有山が担当した。
13. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関連する資料は、本庄市教育委員会において保管している。
14. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)
坂本和俊 中村正芳 田村 誠 金子彰男 中沢良一 丸山 修 外尾常人 田中広明
埼玉県埋蔵文化財調査事業団

15. 川越田遺跡の発掘調査、整理調査及び報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・平成18年度 発掘調査、整理調査

教 育 長 茂木孝彦

<本庄市教育委員会事務局>

事 務 局 長 丸山 茂

文化財保護課

課 長 前川由雄

課 長 補 佐 鈴木徳雄

埋蔵文化財係

係 長 鈴木徳雄

太田博之

恋河内昭彦

松澤浩一

松本 完

的野善行

・平成19年度 整理調査、報告書刊行

教 育 長 茂木孝彦

<本庄市教育委員会事務局>

事 務 局 長 丸山 茂

文化財保護課

課 長 備田英夫

課 長 補 佐 鈴木徳雄

埋蔵文化財係

係 長 太田博之

恋河内昭彦

大熊季広

松澤浩一

松本 完

的野善行

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は世界測地系に基づく。各遺構図における方位針は座標北をさす。
2. 本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真中の遺構名称も同一の記号を用いた。
SI…住居跡 SD…溝 SK…土坑 P…ピット
3. 本書に掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。

【遺構図】

遺構全測図…1/400 SI…1/30、1/60 SD…1/60、1/80、1/100、1/120
SK…1/60、河川跡…1/50、1/200

【遺物実測図】

土師器・須恵器…1/4、土製品・石製品・鉄製品…1/1、1/2

4. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
5. 遺構図・遺物実測図中のトーンを示す内容は以下のとおりである。

遺構図



●…土器出土位置 ▲…石製品・石出土位置

遺物実測図



6. 本書中に使用したAs-Bとは、1108（天仁元）年に降下した浅間山噴出B軽石である。
7. 本調査における遺構の土層断面図及び遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を使用して観察した。
8. 遺物観察中の単位は、法量はcm、重さはgである。（ ）内の数値は推定値を示す。
9. 本書掲載の地形図は、国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」、位置図は本庄市都市計画図（16・17・21・22）1/2,500に加筆したものをを用いた。

目 次

巻頭写真図版

序

例言

凡例

目次

挿図目次

挿表目次

写真図版目次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の環境	2
	1 地理的環境	2
	2 歴史的環境	2
III	調査の方法と経過	5
	1 調査の方法	5
	2 調査の経過	5
IV	調査の成果	7
	1 遺跡の概要	7
	2 検出された遺構と遺物	11
	(1) 住居跡	11
	(2) 溝跡	24
	(3) 土坑	30
	(4) ビット	33
	(5) 河川跡	34
	3 遺構外出土遺物	57
V	自然科学分析	60
VI	まとめ	73

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図1 埼玉県の地形	2	図30 SD-06	28
図2 川越田遺跡の位置と周辺の遺跡	4	図31 SD-06出土遺物	28
図3 調査区域図	6	図32 SD-05・07	29
図4 基本層序模式図	7	図33 SD-07出土遺物	30
図5 遺跡全体図(1)	8	図34 SK-02出土遺物	30
図6 遺跡全体図(2)	9	図35 SK-01~SK-03	31
図7 川越田遺跡A~C・E~G地点全体図	10	図36 SK-01出土遺物	32
図8 SI-01カマド	11	図37 E地点1・2号河川跡	35
図9 SI-01・02・06(1)	12	図38 1号河川跡(1)	36
図10 SI-01・02・06(2)	13	図39 1号河川跡(2)	37
図11 SI-01出土遺物	14	図40 E地点2号河川跡(1)	38
図12 SI-02出土遺物	15	図41 E地点2号河川跡(2)	39
図13 SI-03	16	図42 E地点2号河川跡(3)	40
図14 SI-03出土遺物	16	図43 F地点2号河川跡(1)	40
図15 SI-04出土遺物	17	図44 F地点2号河川跡(2)	41
図16 SI-04・05	18	図45 F地点2号河川跡(3)	42
図17 SI-07	19	図46 1号河川跡上層出土遺物(1)	43
図18 SI-07出土遺物	20	図47 1号河川跡上層出土遺物(2)	44
図19 SI-08出土遺物	20	図48 1号河川跡下層出土遺物(1)	46
図20 SI-08	21	図49 1号河川跡下層出土遺物(2)	47
図21 SI-09出土遺物	22	図50 E地点2号河川跡上層出土遺物	49
図22 SI-09・10	23	図51 E地点2号河川跡下層出土遺物	52
図23 SI-10出土遺物	24	図52 E地点2号河川跡内土坑出土遺物	54
図24 SD-01出土遺物	24	図53 F地点2号河川跡上層出土遺物	56
図25 SD-01	25	図54 F地点2号河川跡下層出土遺物	56
図26 SD-02	26	図55 遺構外出土遺物	58
図27 SD-02出土遺物	27	図56 各地点の地積物中の珪礫化石分布図	66
図28 SD-03・04	27	図57 河川跡の主要花粉化石分布図	70
図29 SD-03出土遺物	28		

挿 表 目 次

表1 SI-01 出土遺物観察表	14	表7 SI-08 出土遺物観察表	21
表2 SI-02 出土遺物観察表(1)	15	表8 SI-09 出土遺物観察表	22
表3 SI-02 出土遺物観察表(2)	16	表9 SI-10 出土遺物観察表	24
表4 SI-03 出土遺物観察表	17	表10 SD-01 出土遺物観察表	26
表5 SI-04 出土遺物観察表	17	表11 SD-02 出土遺物観察表	27
表6 SI-07 出土遺物観察表	20	表12 SD-03 出土遺物観察表	28

表 13	SD-06 出土遺物観察表	30	表 27	E 地点 2 号河川跡下層出土遺物観察表 (2)	53
表 14	SD-07 出土遺物観察表	30	表 28	E 地点 2 号河川跡内土坑出土遺物観察表 (1)	53
表 15	SK-01 出土遺物観察表	32	表 29	E 地点 2 号河川跡内土坑出土遺物観察表 (2)	54
表 16	SK-02 出土遺物観察表	33	表 30	E 地点 2 号河川跡内土坑出土遺物観察表 (3)	55
表 17	ピット計測表	33	表 31	F 地点 2 号河川跡上層出土遺物観察表	55
表 18	1 号河川跡上層出土遺物観察表 (1)	42	表 32	F 地点 2 号河川跡下層出土遺物観察表 (1)	56
表 19	1 号河川跡上層出土遺物観察表 (2)	44	表 33	F 地点 2 号河川跡下層出土遺物観察表 (2)	57
表 20	1 号河川跡上層出土遺物観察表 (3)	45	表 34	遺構外出土遺物観察表	59
表 21	1 号河川跡下層出土遺物観察表 (1)	45	表 35	分析した遺構および地点と堆積物の特徴	60
表 22	1 号河川跡下層出土遺物観察表 (2)	48	表 36	各地点堆積物とその堆積環境	62
表 23	1 号河川跡下層出土遺物観察表 (3)	49	表 37	珪藻化石産出表	64
表 24	E 地点 2 号河川跡上層出土遺物観察表 (1)	50	表 38	珪藻化石産出表	65
表 25	E 地点 2 号河川跡上層出土遺物観察表 (2)	51	表 39	産出花粉化石一覽表	69
表 26	E 地点 2 号河川跡下層出土遺物観察表 (1)	51			

写真図版目次

写真図版 1	遺跡の位置と周辺の地形	写真図版 12	E 地点 2 号河川跡内土坑遺物出土状況
写真図版 2	遺跡全景、E 地点全景、SI-01～06 全景		F 地点 2 号河川跡土層断面
写真図版 3	SI-01 全景、SI-01 カマド全景、 SI-01 遺物出土状況		F 地点 2 号河川跡遺物出土状況近景
写真図版 4	SI-02・06 全景、SI-02 遺物出土状況、 SI-02 P3 柱痕確認状況	写真図版 13	F 地点 2 号河川跡遺物出土状況近景
写真図版 5	SI-03 遺物出土状況、SI-04・05 全景、 SI-07 全景		F 地点 2 号河川跡遺物出土状況近景
写真図版 6	SD-01 全景、SD-02 全景、SD-05 全景		F 地点全景
写真図版 7	SK-01 全景、SK-01 土層断面、 SK-02・03 全景	写真図版 14	SI-08 全景、G 地点全景(左)・SD-07 全景(右)
写真図版 8	1・2 号河川跡全景 1 号河川跡全景 1 号河川跡土層断面		SI-09・10 全景
写真図版 9	1 号河川跡土層断面 1 号河川跡遺物出土状況 1 号河川跡遺物出土状況近景	写真図版 15	SI-09・10 遺物出土状況 SI-09 遺物出土状況近景 SI-09 遺物出土状況近景
写真図版 10	1 号河川跡遺物出土状況近景 1 号河川跡遺物出土状況近景 1 号河川跡遺物出土状況近景	写真図版 16	SI-01・02 出土遺物
写真図版 11	1 号河川跡遺物出土状況近景 E 地点 2 号河川跡全景 E 地点 2 号河川跡遺物出土状況	写真図版 17	SI-03・04・07～10 出土遺物
		写真図版 18	SD-01・02・03・06・07、SK-02 出土遺物
		写真図版 19	SK-01、1 号河川跡出土遺物 (1)
		写真図版 20	1 号河川跡出土遺物 (2)
		写真図版 21	1 号河川跡出土遺物 (3)
		写真図版 22	1 号河川跡出土遺物 (4)
		写真図版 23	E 地点 2 号河川跡出土遺物 (1)
		写真図版 24	E 地点 2 号河川跡出土遺物 (2)
		写真図版 25	E 地点 2 号河川跡出土遺物 (3)
		写真図版 26	F 地点 2 号河川跡出土遺物 (1)
			F 地点 2 号河川跡出土遺物 (2)
			遺構外出土遺物

I 調査に至る経過

本報告にかかる本庄市川越田遺跡E・F・G地点の発掘調査は、競輪の場外車券場建設計画に伴って失われる埋蔵文化財の記録保存のために実施されたものであり、発掘調査に至る経緯の概要は、以下のとおりである。

埼玉県児玉郡児玉町大字高関（現本庄市児玉町高関）字北田下ノ菘丁141番1外13筆の約2,000㎡において競輪の場外車券場の建設計画が起り、この建設計画に基づく開発予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会が児玉町教育委員会にあったのは平成15年12月であった。児玉町教育委員会では、この開発予定地内の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地（№54-275）川越田遺跡に相当することとともに、これら埋蔵文化財は現状で保存することが望ましい旨の説明をおこなった。なお、平成16年2月株式会社サテライトこだま代表取締役齊藤國雄から開発予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会文書が児玉町教育委員会に提出されたので、周知の埋蔵文化財包蔵地である旨の回答を行うとともに、埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するよう調整を行った。

その後、事業計画等が紆余曲折を経る過程で、平成18年1月児玉町と本庄市が合併し、新「本庄市」となった。本庄市教育委員会は、児玉町教育委員会と株式会社サテライトこだまとの協議事項を継承し埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行い、埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するよう調整を行うとともに、その取り扱いについて埼玉県生涯学習文化財課と調整を進めた。数次にわたる協議・調整を行ったが、場外車券場建設計画による埋蔵文化財への影響は避けがたく、この工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる約1,400㎡の区域についての発掘調査を実施する必要が生じた。以上の協議を踏まえて、株式会社サテライトこだまから本庄市に発掘調査の依頼があったので、調査を実施する区域を川越田遺跡E・F・G地点とし、平成18年度川越田遺跡発掘調査受託事業として本庄市と株式会社サテライトこだまの間で遺跡発掘調査託契約を締結することで、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘の実施にあたっては、株式会社サテライトこだま代表取締役齊藤國雄より、平成18年2月28日に、文化財保護法第93条第1項同法第184条第1項及び文化財保護法施行令第5条第2項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が本庄市教育委員会に提出されたので、同日付け本教文保第28号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この発掘の届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、本庄市教育委員会教育長に、株式会社サテライトこだま代表取締役齊藤國雄宛の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知が平成18年3月10日付け教生文第3-1025号であったので、本庄市教育委員会教育長は、平成18年3月17日付け本教文保第54号で株式会社サテライトこだま代表取締役齊藤國雄あてに送付した。

発掘調査の実施については、本庄市教育委員会教育長茂木孝彦から、平成18年7月24日付け本教文保第158号で、文化財保護法第99条の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を埼玉県教育委員会教育長に提出した。なお、現地の発掘調査は、平成18年7月3日に開始され、平成18年10月31日に終了した。

（本庄市教育委員会文化財保護課）

II 遺跡の環境

1 地理的環境

川越田遺跡が所在する本庄市は埼玉県北西部に位置する。現本庄市は2006（平成18）年に、児玉町と本庄市との合併が実施された。旧市町村名では児玉町の北部にあたる。本遺跡周辺の地形は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の扇中央部東端にあたり、女堀川や金鑽川の開析による比較的広い沖積低地が河川の両側に開けている。沖積低地の西側には児玉丘陵下から広がる低台地の本庄台地が、東側には児玉丘陵から河川の開析作用によって分断された生野山・鷲山・大久保山の残丘が列状に存在している。この沖積低地は、中央を流れる女堀川を中心にして、西側を本庄台地に、東側を残丘列によって画されるように帯状に展開しており、地形的に一つの小地域を形成している。本遺跡は女堀川右岸の標高69mの自然堤防上に立地している。女堀川水系の中流域にあたり、古代より女堀川流域における農業生産の中心的基盤として発展した地域である。ほ場整備前までは低地部内に一町四方の条里形地割りが広範囲に残存していた。

2 歴史的環境

川越田遺跡E・F・G地点では、古墳時代の集落跡や河川跡、条里制の坪線と一致する溝跡等が確認された。以下、古墳時代を中心に周辺の遺跡を概観していく。

弥生時代の遺跡は現在のところ少ない。前期～中期では、低地内の今井条里遺跡（25）や大久保山残丘上の大久保山遺跡（42）で中期中葉頃の土坑が検出されている。集落は小山川・志戸川流域に位置する村後遺跡（60）がある。中期中葉頃になって低地内への本格的な進出が一部に見られるが、そ

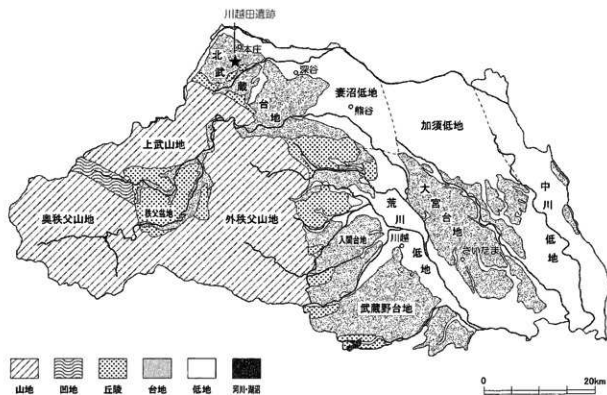


図1 埼玉県の地形

の後長期間にわたり継続的に営まれた集落はなく、単発的な進出傾向が窺える。後期の集落は、樽式土器を主体とする山根遺跡(39)や飯玉東遺跡(43)、吉ヶ谷式土器を主体とする大久保山遺跡や生野山遺跡(57)、二軒屋式土器が出土した塚本山遺跡(45)等がある。これらは大久保山や生野山の残丘上や、その下に広がる狭小な台地上に立地しており、近くの小支谷の湧水を利用した小規模な水稲耕作を基盤にしていたものと推測される。

古墳時代前期になると、女堀川沖積低地の本格的な開発が開始され、遺跡数が増加する。前期中葉段階には、本遺跡や社具路遺跡(28)のように低地内への進出が認められる。後葉～終末段階には後張遺跡(4)のような大規模集落を中心として、周辺に小規模集落が展開する。これらの遺跡では、東海西部・畿内・北陸・南関東地方等の影響を強く受けたいわゆる「外来系土器」が主体をなし、新しくなるに連れて東海西部系の土器が顕著になる。低地部では外来系土器を主体とする遺跡が当初から展開するが、弥生時代の生活基盤を継承する丘陵部の遺跡では、雷電下遺跡(44)のように、弥生時代後期の土器の系統を引く「在地系土器」の影響が残る傾向がある。また、弥生時代後期に集落が営まれていた生野山・鷺山・大久保山の残丘上には、一部小規模な集落が進出すると共に、方形周溝墓が築造され、墓域として意識されるようになる。これらの残丘上には、県内最古の古墳として有名な全長60mを測る前方後墳の鷺山古墳(G)や、北堀前山1号墳(B)が築造されている。

中期は、前期と同様に低地内およびその周辺に集落が展開する様相が見られる。後張遺跡・南街道遺跡(54)・社堂遺跡(55)のような大規模な拠点集落が複数出現し、それらを中心として自然堤防上や本庄台地東側縁辺部および丘陵部周辺に、多くの小規模集落が形成される。これらの集落では、中葉頃よりほとんどの住居にカマドが付設されるようになる。残丘上には、墳丘規模60～70mの県北部で最大級の円墳である金鏡神社古墳(H)や生野山將軍塚古墳(K)、公卿塚古墳(D)が築造されている。これらの三古墳は墳丘規模や形態が類似し、格子目叩きの埴輪を有するという特徴がある。相互に時期差異があまり認められず、比較的至近距離に位置している。

後期は、中期とほとんど大差はないが、個々の遺跡において遺構の密度が高い傾向が見られる。また、少数ではあるがこの時期より掘立柱建物跡を伴う集落も存在する。該期の集落の内、低地内の自然堤防上や微高地上に立地する集落は、終末期になっていずれも断絶し、その後本庄台地東側縁辺部や残丘縁辺の台地に移動する。これは当地域の低地内に条里形地割りを施工するための計画的な集落移動と推測されている。残丘上には、墳丘規模58mの生野山鈍子塚古墳(L)や生野山16号墳(J)の首長墓が築造されるが、これらの首長墓は中期の大形円墳に変わって前方後円墳を採用していることが注目される。また、後には塚本山古墳群(O)や生野山古墳群(P)のように群集墳が形成される。当地域の古墳群は、片岩を使用した模様積みの横穴式石室が一般的である。当地域と近距離にある利根川段丘上の旭・小島古墳群や塚合古墳群は、角閃石安山岩を使用した五目積みの横穴式石室が多く、石室構築技法に明確な差異が見られ、これらとは別系列の集団の墓域であることが考えられる。

7世紀中頃～後半になると、一部に東牧西分遺跡(5)や下田遺跡(38)等の低地内に立地する集落も見られるが、低地内のほとんどの集落は廃絶され、東側残丘斜面下の低台地上や西側の本庄台地縁辺部に移動する。東側の残丘周辺の集落群が10世紀以降も継続して営まれるものが多い。これに対し、西側の本庄台地縁辺部の集落群は9世紀後半になると衰退し始め、9世紀後半から10世紀にかけて、小規模な集落が低地内の自然堤防や微高地上に再び出現するようになる。



1. 川船田遺跡 2. 今井川越田遺跡 3. 梅沢遺跡 4. 後原遺跡 5. 軍牧稻分遺跡 6. 一丁田遺跡 7. 前田甲遺跡 8. 藤原遺跡 9. 堤向遺跡 10. 榑島遺跡
 11. 立口遺跡 12. 神籠塚東遺跡 13. 神籠塚西遺跡 14. 古井戸遺跡 15. 平塚遺跡 16. 今井原屋敷遺跡 17. 黒野大神南遺跡 18. 八幡大神南遺跡
 19. 立野南遺跡 20. 往來北遺跡 21. 久城前遺跡 22. 鎌野遺跡 23. 塚野遺跡 24. 地神遺跡 25. 今井桑丘遺跡 26. 四方田遺跡 27. 九反田遺跡
 28. 比呂路遺跡 29. 夏目遺跡 30. 南大通り殿内遺跡 31. 西富田本郷遺跡 32. 西富田・四方田桑丘遺跡 33. 峰塚遺跡 34. 三ヶ谷戸遺跡
 35. 久下東遺跡 36. 久下前遺跡 37. 七色塚遺跡 38. 下田遺跡 39. 山根遺跡 40. 根田遺跡 41. 浅見山遺跡 42. 大久保山遺跡 43. 殿玉東遺跡
 44. 雷電下遺跡 45. 塚本山遺跡 46. 雲山南遺跡 47. 浅見境北遺跡 48. 浅見境遺跡 49. 東田遺跡 50. 長和小学校校庭遺跡 51. 日延遺跡
 52. 城の内遺跡 53. 新屋敷遺跡 54. 南街道遺跡 55. 辻堂遺跡 56. 宮田遺跡 57. 壺野山遺跡 58. 宮ヶ谷戸遺跡 59. 堀之口遺跡 60. 村後遺跡
 A. 北堀前山2号墳 B. 北堀前山1号墳 C. 東谷古墳 D. 公野塚古墳 E. 雲山古墳 F. 四方田古墳 G. 雲山古墳 H. 金殿神社古墳
 I. 熊谷後1号墳 J. 生野山16号墳 K. 生野山御掣塚古墳 L. 生野山鏡子塚古墳 M. 物見塚古墳 N. 東富田古墳群 O. 塚本山古墳群
 P. 生野山古墳群

図2 川越田遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査範囲は試掘調査の成果等をもとに、E・F・G地点の3地点を設定した。グリッドは4m×4mで設定した。発掘調査は、試掘調査で確認されたAs-B層を第1確認面として、重機により表土掘削作業を開始した。並行して人力による遺構確認作業を行い、As-B層下面での調査を実施した。その後、古墳時代の遺構を確認するため、第2確認面として約50cm下の淡黄褐色土層（ローム土の二次堆積層）上面まで重機で再度掘削した。遺構の掘り下げにあたっては、土層観察用のベルトを設定し、埋没状態や構築状態を確認した。図面は手実測およびトータルステーションにより測量した。遺構図は縮尺1/20を基本とし、カマド等の微細図は1/10、全体図は1/200で作図した。写真撮影は、白黒35mm、カラーリバーサル35mm、白黒120mm、デジタルカメラを使用し、調査の進捗状況に応じて随時撮影を行った。空撮にはラジコンヘリコプターを用いた。

整理作業は、遺物の洗浄後、インクジェットプリンターによる注記を行った。遺跡の略号は54-275とし、注記の際にはこれを用いた。接合にはセメダインCを、復元にはエポキシ樹脂を使用した。遺物実測は原寸で行い、適宜拓本を用いた。遺物写真撮影には白黒120mmを使用した。遺構・遺物の実測図版は、ロットリングによる手作業のトレースを行った。図面作成・遺物写真撮影後、報告書の執筆・編集作業に入った。

2 調査の経過

発掘調査は平成18年7月3日から平成18年10月31日にかけて実施した。調査経過は以下のとおりである。

7月3日：現地にて調査区の設定および打ち合わせを行う。調査区設定後、E地点の第1確認面まで表土掘削作業を開始する。簡易トイレ搬入。発掘作業員は本日より就業。4日：安全対策を講じる。器材搬入、テント設営。プレハブ・駐車場予定地への土盛りおよび砕石敷き。5日：プレハブ設営。6～13日：表土掘削と並行して遺構確認作業を行う。調査区際に排水用の溝切りを行う。14日：第1確認面での調査を終え、第2確認面までの掘削作業を開始する。18～25日：雨天による調査区湧水のため、現場作業を中止。26～28日：第2確認面までの掘削と並行して、遺構確認作業を行う。結果、住居跡・溝跡・土坑・ピット・河川跡が検出された。E地点に基準杭・方眼杭を設置。31日：E地点の遺構調査（掘り下げ・写真撮影・測量・遺物取り上げ等、以下省略）に着手する。

8月1～4日：E地点の住居跡および溝跡の調査を行う。7・8日：住居跡の調査を行う。遺構埋没土は粘性が強く、乾燥すると硬くなるため、掘り下げには労力を要した。10・11日：住居跡・溝跡の調査を行う。18・21～25日：溝跡・土坑・ピットの調査を行う。28～31日：住居跡および溝跡の調査を行う。

9月1日：雨天のため現場作業を中止し、遺物洗浄を行う。4・5日：住居跡・溝跡・土坑の調査を行う。6日：遺物洗浄。7日：河川跡の調査に着手する。サブトレンチで埋没状況を確認した後、掘り下げを開始した。8日：河川跡は確認面から1m近く掘り下げられるため、周囲に安全対策を講じた。11日：住居跡および河川跡の調査を行う。12～14日：遺物洗浄。15・19～22・25・26日：住居跡

および河川跡の調査を行う。27日：遺物洗浄。28日：G地点の表土掘削を開始する。29日：G地点の遺構確認作業を行う。結果、住居跡および溝跡が検出された。

10月2日：遺物洗浄。3日：F地点の表土掘削を開始する。G地点に基準杭・方眼杭を設置し、溝跡・住居跡の調査を行う。4日：F地点は表土掘削と並行して遺構確認作業を行う。5・6日：遺物洗浄。10日：F地点は遺構確認作業の結果、住居跡およびE地点からの続きの河川跡が検出された。11～13日：E地点は河川跡、F地点は住居跡および河川跡、G地点は住居跡の調査を行う。16日：F地点に方眼杭を設置する。17日：全体清掃を行う。テント解体・搬出。18日：ラジコンヘリコプターによる空撮を行う。終了後、E地点河川跡の土壌サンプルを採取する。19日：E地点は河川跡の土壌サンプル採取を行う。FおよびG地点は住居跡の調査を行う。20日：F地点の河川跡は、調査区が狭く全体を掘り下げると危険なため、トレンチ調査に切り替えることとした。23日：F地点の住居跡および河川跡の調査を行う。24日：雨天のため現場作業を中止。25日：F地点河川跡の調査を行う。26日：FおよびG地点を清掃し、調査区全景写真撮影を行う。27日：F地点の測量を行う。30日：F地点河川跡の土壌サンプル採取を行う。31日：器材およびプレハブ・簡易トイレを撤収し、発掘調査を完了した。

整理調査は平成18年10月1日～平成19年3月15日および平成19年10月26日～平成20年3月7日にかけて実施し、平成20年3月25日付けで報告書を刊行した。

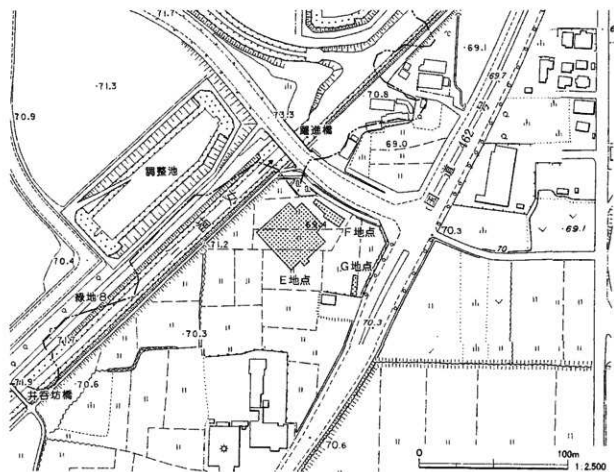


図3 調査区域図

IV 調査の成果

1 遺跡の概要

本遺跡は、女堀川右岸の標高69mを測る自然堤防上に立地する古墳時代の大規模集落跡である。同自然堤防上には、本遺跡の北東約350mに後張遺跡が、南約100mに梅沢遺跡があり、同一遺跡を構成すると考えられている。この大規模集落は古墳時代前期後半に出現し、集落の中心を移動しながら後期まで継続して営まれている。これまで、昭和56・57年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団によりA地点が、平成4・5年に児玉町遺跡調査会によりB・C地点が調査されており、古墳時代前期～後期の住居跡43軒、土壇40基、溝跡24条、井戸跡1基、性格不明遺構1基、河川跡、黒色土遺物包含層が検出されている。D地点は平成18年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団により調査が実施されている。今回はE・F・Gの3地点の調査であり、E・F地点はA～C地点の南西に隣接し、G地点は梅沢遺跡の北方約60mに位置する。検出された遺構は、住居跡10軒、溝跡7条、土坑3基、ピット26基、河川跡2条である。なおE・F地点の北側は、砂を大量に含む埋没河川（現女堀川の旧流路）によって遺構が壊されている。住居跡の時期は古墳時代前期1軒、中期3軒、後期5軒、不明1軒である。溝跡の時期は古墳時代3条、古代4条である。この内G地点のSD-07は、水田部に認められる条里形地割りの南北方向の坪線とほぼ一致しており、水田に引水するための溝と考えられる。女堀川両岸に広汎に施工される児玉条里の痕跡は、この溝跡以西では確認されておらず、埋没河川跡を避けて施工されたものと考えられる。土坑及びピットはE地点の南西側に集中して検出される。土坑の時期は古墳時代前期に比定される。ピットは埋没土から古墳時代に帰属すると考えられる。河川跡については、2号河川跡は古墳時代の埋没河川跡であり、B地点で検出された河川跡と同一流路である。1号河川跡はこれとほぼ直交して合流しており、人為的に開鑿された水路と考えられる。

基本層序は、E・F・G地点の3カ所で観察をした。古代の遺構確認はAs-Bを大量に含む層の下で行ったが、この層は全域には及ばず、E地点の中央より東側とG地点で確認されるのみである。古墳時代の遺構確認は、E・F地点がローム二次堆積層、G地点がローム層の上で行った。

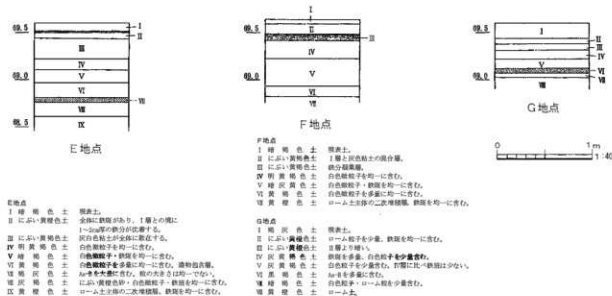


図4 基本層序模式図

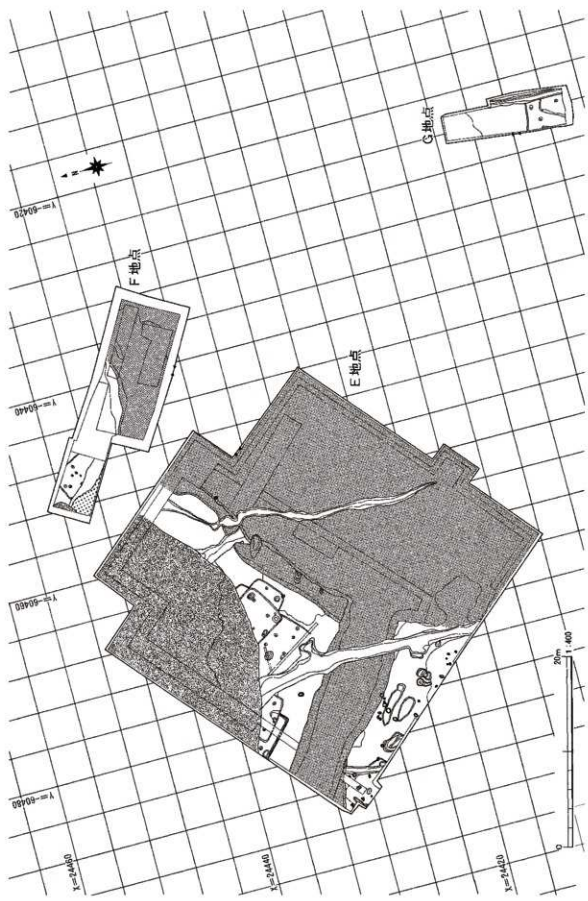


图5 遗址全体图(1)

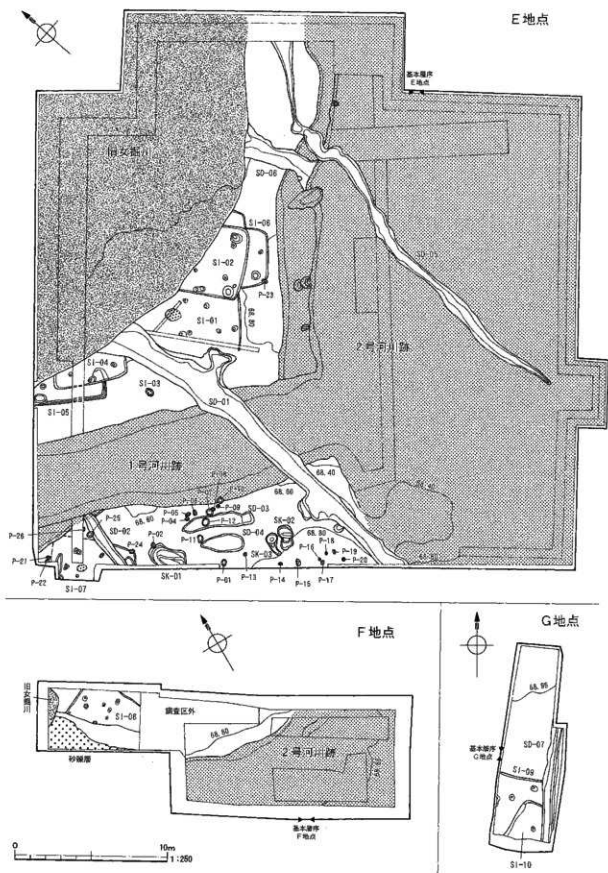


图6 遺跡全体図(2)

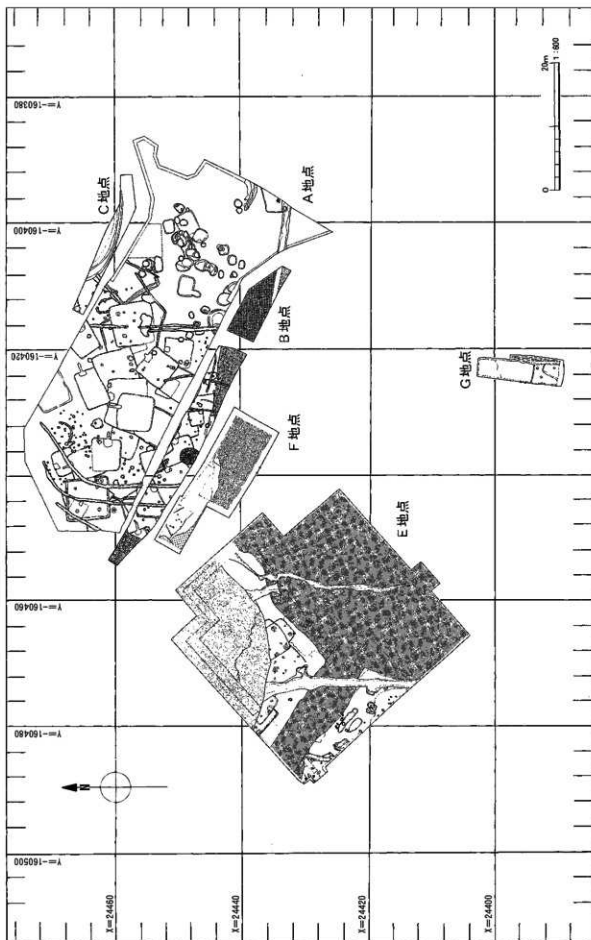


图7 川越田遺跡A~C・E~G地点全体図

2 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

SI-01 (図8～11、表1/写真図版2・3・16)

E地点の調査区中央から北西寄りに位置する。重複するSI-02に切られる。西側ではSD-01と近接する。平面形はおおむね方形と推察される。規模は、住居の立ち上がりを捉えられず不明であるが、カマド推定ラインの先端から南東壁際までは4.94mである。主軸方向はN-38°-Wをとる。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは8cmである。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。灰黄褐色土を埋め戻した貼床式だが、全体的に軟弱である。ピットは6ヵ所検出された。P1・2は主柱穴と考えられる。4本主柱穴構造と想定されるが、P1・2に対応する南東側の柱穴は確認できなかった。規模は、P1が32cm×28cm、深さ44cm、P2が51cm×推定40cm、深さ46cm、P3が40cm×35cm、深さ37cm、P4が28cm×26cm、深さ31cm、P5が29cm×25cm、深さ38cm、P6が44cm×31cm、深さ25cmである。貯蔵穴は確認されなかった。カマドは北西壁側に付設されている。規模は、全長推定104cm、推定最大幅88cmである。燃焼部底面の高さは住居床面とほぼ同じであり、良く焼けて赤色化している。燃焼部のほぼ中央には、自然礫の上に坯を伏せて被せた支脚が据えられている。袖は黄橙色砂とにぶい黄褐色粘質土の混合土で構築している。

出土遺物は、比較的少ないが、南東壁付近の床面直上より甕(2)が横倒しに潰れた状態で出土している。土器以外では、カマド左袖の上面から滑石製白玉(3)が、P1南西側の床面直上から石製紡錘車(4)が出土している。

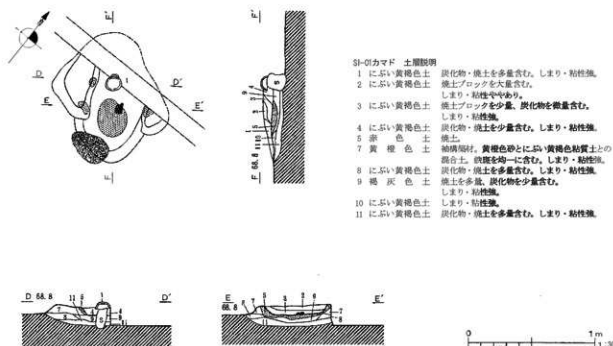
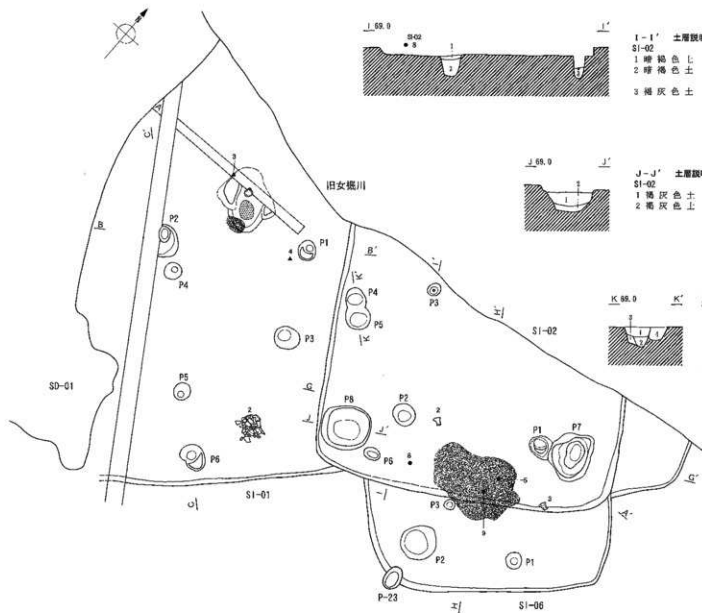
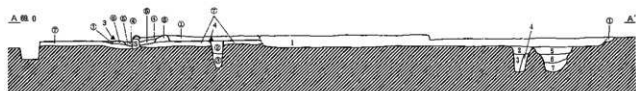


図8 SI-01カマド

9 S1-01・02・06 (1)



0 2m 100



A-A' 土層説明

SI-01

- ① 灰黄褐色土 粘土を微量含む。しまり・粘性強。
- ② にがい黄褐色土 炭化物を少量含む。しまり・粘性強。
- ③ 黒褐色土 炭化物を少量含む。しまり・粘性強。
- ④ にがい黄褐色土 カマド。炭化物・粘土を少量含む。しまり・粘性強。
- ⑤ 褐灰色土 カマド。粘土を多量。炭化物を少量含む。しまり・粘性強。
- ⑥ 黄褐色土 カマド焼磚基材。黄褐色砂とにがい黄褐色粘質土との混合土。しまり・粘性強。
- ⑦ 灰黄褐色土 掘り方。しまり・粘性強。

SI-02

- 1 灰黄褐色土 炭化物・粘土・鉄屑を多量含む。しまり・粘性強。
- 2 にがい黄褐色土 炭化物・粘土を少量含む。しまり・粘性強。
- 3 黒褐色土 炭化物・粘土を少量含む。しまり・粘性強。
- 4 黒褐色土 褐色ローム土を多量含む。しまり・粘性強。
- 5 にがい黄褐色土 炭化物・粘土を少量含む。しまり・粘性強。
- 6 暗褐色土 炭化物を少量含む。しまり・粘性強。
- 7 黒褐色土 炭化物を微量含む。しまり・粘性強。

SI-06

- ① にがい黄褐色土 炭化物を少量含む。しまり・粘性強。

図 10 SI-01・02・06 (2)



H-H' 土層説明

SI-02

- 1 灰黄褐色土 炭化物・粘土・鉄屑を多量含む。しまり・粘性強。
- 2 黒褐色土 炭化物・粘土を少量含む。
- 3 暗褐色土 粘土を少量含む。しまりあり。粘性強。
- 4 暗褐色土 しまり・粘性強。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量含む。しまり・粘性強。

SI-06

- ① にがい黄褐色土 炭化物を少量含む。しまり・粘性強。
- ② にがい黄褐色土 粘土・炭化物を少量含む。しまり・粘性強。



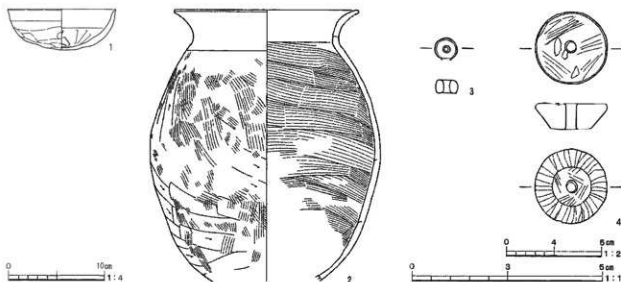


図 11 SI-01 出土遺物

表 1 SI-01 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 11.3 底径 — 器高 4.4	体部は膨らみを持ち、口縁部は短く外反する。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面縦ナデ。	片岩・角閃石・石英・チャート 内—にぶい黄褐色 外—にぶい黄褐色	ほぼ完形。 カマド支脚。外面に赤化した粘土付着。
2	甕	口径 19.5 底径 — 器高 残28.8	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は強く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面ケズリ・上位ナデの後ハケ、内面ナデの後ハケ。	片岩・チャート 内—灰褐色 外—にぶい黄褐色	底部欠失。 床面直上。
No.	種類	器種	法量 (cm・g)		備考	
3	石製品	白 玉	長径: 0.6、短径: 0.55、厚さ: 0.35、残重: 0.19、滑石。		一部欠損。 カマド上層。	
4	石製品	紡錘車	上面径: 3.9×3.9、下面径: 2.05×2.0、孔径: 0.6、厚さ: 1.4、重さ: 28.43。 蛇紋岩。上下面研磨、側面放射状のケズリ後研磨。		ほぼ完形。 床面直上。	
5	石	支 脚	長さ: 15.5、幅: 11.6、厚さ: 7.5、重さ: 1972.73。 輝石安山岩。二次焼成を受ける。写真のみ掲載。		完形。 カマド支脚。	

SI-02 (図 9・10・12、表 2・3 / 写真図版 2・4・16)

E 地点の調査区中央から北西寄りに位置する。重複する SI-01 と SI-06 を切っている。北側は旧女堀川に壊されている。平面形はおおむね方形と推察される。規模は、南西—北東方向 4.67 m、北東—南西方向は検出範囲内において 3.76 m である。長軸方向は N-31°-W をとる。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 12 cm である。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。南東壁際から壁外へかけて、約 140 cm × 108 cm の範囲に炭化物が検出された。床面から約 14 cm 上に堆積し、厚さは 6~9 cm である。遺物もこの周辺に集中している。ピットは 8 ヲ所検出された。P 1~3 が主柱穴と考えられ、P 3 からは柱痕が確認された。規模は、P 1 が 36 cm × 34 cm、深さ 42 cm、P 2 が 37 cm × 33 cm、深さ 37 cm、P 3 が 23 cm × 19 cm、深さ 36 cm、P 4 が短径 32 cm、深さ 21 cm、P 5 が 42 cm × 40 cm、深さ 31 cm、P 6 が 26 cm × 19 cm、深さ 10 cm、P

7が74cm×67cm、深さ45cmである。P8は78cm×70cm、深さ34cmで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模や形態から貯蔵穴に相当すると考えられるが、SI-01に伴う可能性もある。カマドは確認されなかった。

出土遺物は、南東壁際の炭化物検出範囲を中心に比較的多くの土器片が出土している。大半が床面より浮いた状態であるが、高坏脚部(3)は床面直上から、坏(1)はP3内から出土している。土器以外では、土鐘(8・9)が出土している。

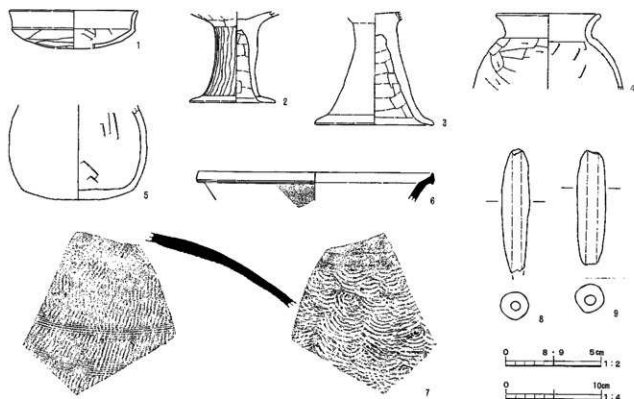


図12 SI-02 出土遺物

表2 SI-02 出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (13.6) 底径 — 器高 (4.1)	口縁部は体部との境に弱い稜を持ち、外反して立ち上がる。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面髷ナデ。	白色粒・赤褐色粒 内外一橙色	1/3, 内外面摩耗, P3内。
2	高坏	口径 — 底径 (9.1) 器高 残0.6	脚柱部は円筒状で、脚端部の広がりは短い。	脚柱部外面ミガキ、内面髷ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	白色粒・赤褐色粒 外一明赤褐色 内一にぶい褐色	脚部のみ。脚部外面に赤彩の痕跡。下履。
3	高坏	口径 — 底径 12.6 器高 残12.1	脚柱部は下方へ広がり、脚端部は彎曲気味に短く広がる。	脚柱部外面ナデ、内面髷ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	白色粒・赤褐色粒 内外一明赤褐色	脚部のみ。脚柱部外面摩耗。床面直上。
4	小形甕	口径 (11.2) 底径 — 器高 残8.0	胴部は膨らみを持ち、口縁部は強く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面髷ナデ。	角閃石・褐色粒 外一にぶい黄褐色 内一褐色	1/5。炭化物層中。
5	小形甕	口径 — 底径 (11.4) 器高 残10.1	胴部は中位にわずかな膨らみを持つ。底部は丸味を帯びる。	胴部～底部内面髷ナデ。	片岩・チャート・石英 内外一赤褐色	1/3。外面摩耗著しい。炭化物層中。

表3 SI-02 出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	須恵器 甕	口径 (24.8) 底径 — 器高 残3.0	ロクロ成形。口縁部は外反する。口唇部は平坦面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	口縁部外面摺曲状工具による波状文。口唇部下位に凹線が巡る。内面凹輪ナデ。	チャート 内外-灰色	口縁部片。下層。
7	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	胴部外面平行タタキの後カキメ。内面同心円の当て具痕。上方はナデ。	チャート 内外-灰色	胴部片。下層。2号河川跡上層と接合。
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
8	土製品	土 錘	残長: 6.5、最大幅: 1.5、孔径: 0.5、残重: 10.97。 胎土: チャート・黒色粒。色調: にぶい黄褐色。			端部欠損。炭化物層。
9	土製品	土 錘	長さ: 6.1、最大幅: 1.6、孔径: 0.6、重さ: 12.31。 胎土: チャート・黒色粒。色調: 褐色。			完形。炭化物層。

SI-03 (図13・14、表4/写真図版5・17)

E地点の調査区北西側に位置する。壁の立ち上がりや柱穴等を捉えることはできなかったが、炉およびその南東脇に遺物が検出されたため、住居跡と判断した。炉は床面を約3cm掘り窪めた地皿炉である。規模は103cm×80cmで、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物は、炉の南東脇に高坏および台付鉢が伏せられた状態で出土している。破損しているが5個体分確認された。全て坏部のみで、脚部は出土していない。

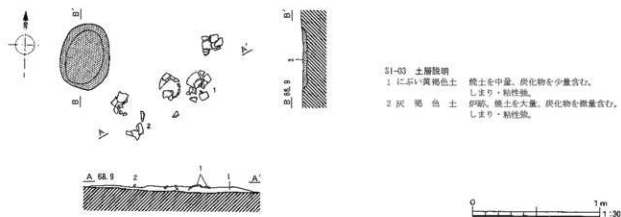


図13 SI-03



図14 SI-03 出土遺物

表4 SI-03 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高 坏	口径 17.1 底径 — 器高 残 7.4	口縁部は坏部との境に弱い稜を持ち、外反気味に開く。	口縁部内外面ヨコナデ。内外面ナデ。	白色粒・赤褐色粒 内外一橙色	脚部欠失。下層。
2	台付鉢	口径 (13.3) 底径 — 器高 残 9.5	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面匏ナデ。	角閃石・チャート・赤褐色粒 内外一橙色	1/2。外面摩耗著しい。下層。

SI-04 (図15・16、表5/写真図版2・5・17)

E地点の調査区北西端に位置する。重複するSI-05を切り、SD-01に切られる。北東側は旧女堀川に壊される。平面形はおおむね方形と推察される。規模は、北西-南東方向4.60m、北東-南西方向は検出範囲において2.23mである。長軸方向はN-52°-Wをとる。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmである。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。南西壁際に規模95cm×90cm、深さ12cmの窪みが検出された。ピットは2カ所検出され、支柱穴と想定される。規模は、P1が36cm×30cm、深さ40cm、P2が29cm×27cm、深さ43cmである。貯蔵穴およびカマドは確認されなかった。

出土遺物は、土器片がわずかに出土したのみである。小形甕(1)は東壁際から、床面よりやや浮いた状態で出土している。

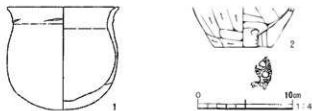


図15 SI-04 出土遺物

表5 SI-04 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形甕	口径 (11.8) 底径 — 器高 (10.9)	わずかな膨らみを持つ胴部から、口縁部は外反する。底部は丸底で器厚は厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。	チャート 内外一橙色	2/3。内外面摩耗著しい。床面直上。
2	甕	口径 — 底径 (6.1) 器高 残 4.2	底部は厚く、多孔を有する。孔径0.5~0.6。	胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。底部外面ケズリ。	角閃石・チャート 外一にふい褐色 内一黒色	底部片。上層。

SI-05 (図16/写真図版2・5)

E地点の調査区北西端に位置する。西側は調査区外となる。重複するSI-04に切られる。北東側は旧女堀川に壊される。平面形はおおむね方形と推察される。規模は検出範囲内において、北西-南東方向4.64m、北東-南西方向1.82mである。長軸方向はN-50°-Wをとる。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmである。壁溝は検出範囲内の各壁下で確認される。幅12cm~20cm、床面からの深さは6cmである。床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。ピットは3カ所検出された。P1・P2が支柱穴と想定される。規模は、P1が56cm×44cm、深さ43cm、P2が36cm×33cm、深さ57cmである。P3は貯蔵穴と考えられ、北西角に位置する。平面形は楕円形を呈し、南側に浅い段を有する。規模は83cm×66cm、深さは50cmである。カマドは確認されなかった。

出土遺物は、土器片がごくわずかに出土したのみである。

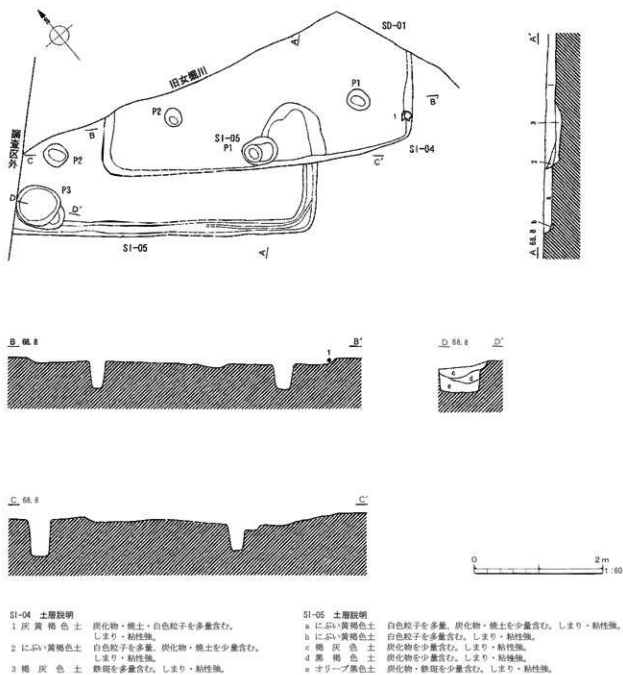
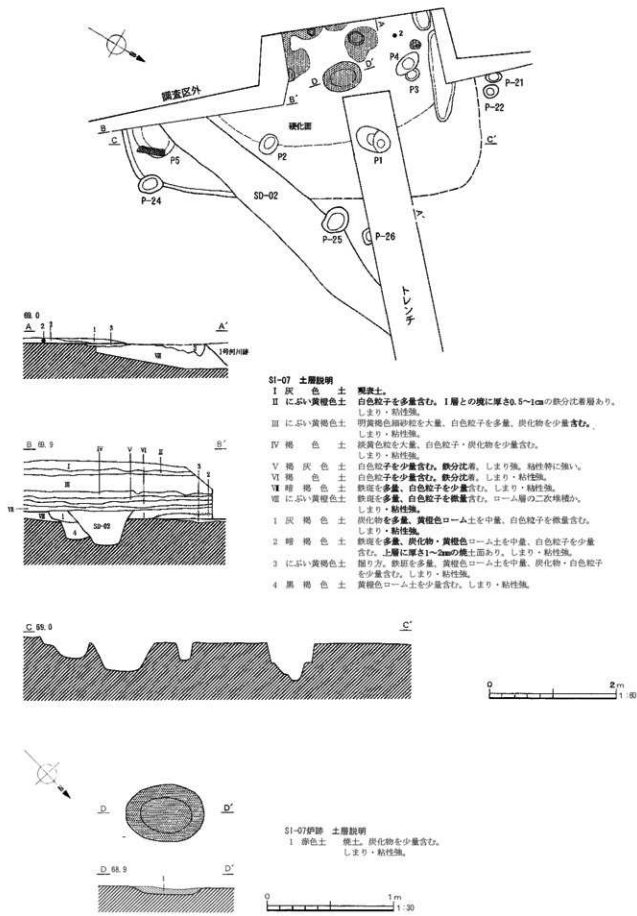


図 16 SI-04・05

SI-06 (図9・10 / 写真図版2・4)

E地点の調査区中央から北西寄りに位置する。重複するSI-02とP-23に切られる。平面形はおおむね方形と推察される。規模は、南西-北東方向3.8m、北西-南東方向は検出範囲内において1.66mである。長軸方向はN-40°-Wをとる。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは16cmである。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。ピットは3カ所検出された。規模は、P1が26cm×25cm、深さ26cm、P2が59cm×53cm、深さ30cm、P3が18cm×16cm、深さ12cmである。カマドは確認されなかった。

出土遺物は、土器片がごくわずかに出土したのみである。



SI-07 土層説明

- I 灰 色 土 暗褐色。白色粒子を多量含む。I層との間に厚さ0.5~1cmの鉄分沈着層あり。しまり・粘性強。
- II に近い黄褐色土 明黄褐色細砂粒を大量。白色粒子を多量。炭化物を少量含む。しまり・粘性強。
- III に近い黄褐色土 淡黄色粒を大量。白色粒子・炭化物を少量含む。しまり・粘性強。
- IV 褐色土 白色粒子を少量含む。鉄分沈着。しまり強。粘性中に強い。
- V 褐色土 白色粒子を少量含む。鉄分沈着。しまり・粘性強。
- VI 暗褐色土 鉄屑を多量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。
- VII に近い黄褐色土 鉄屑を多量。白色粒子を微量含む。ローム層の二次堆積か。しまり・粘性強。
- 1 灰 褐色土 炭化物を多量。黄褐色ローム土を中量。白色粒子を微量含む。しまり・粘性強。
- 2 暗 褐色土 鉄屑を多量。炭化物・黄褐色ローム土を中量。白色粒子を少量含む。上層に厚さ1~2cmの鐵土面あり。しまり・粘性強。
- 3 に近い黄褐色土 障り力。鉄屑を少量。黄褐色ローム土を中量。炭化物・白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。
- 4 暗 褐色土 黄褐色ローム土を少量含む。しまり・粘性強。

SI-07 伊勢 土層説明

- 1 赤色土 褐色土。炭化物を少量含む。しまり・粘性強。

図 17 SI-07

SI-07号住居跡 (図17・18、表6/写真図版5・17)

E地点の調査区北西角に位置する。西側は調査区外となり、重複するSD-02とP-24に切られる。平面形はおおむね方形と推察される。規模は検出範囲内において、北西-南東方向2.90 m、北東-南西方向推定5.58 mである。長軸方向はN-32°-Wをとる。壁は

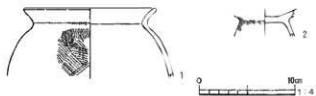


図18 SI-07出土遺物

直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは13 cmである。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。ローム土を含むにぶい黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居跡中央に堅緻な硬化面が確認される。ピットは5ヵ所検出された。規模は、P 1 が56 cm×36 cm、深さ60 cm、P 2 が32 cm×28 cm、深さ28 cm、P 3 が23 cm×16 cm、深さ18 cm、P 4 が46 cm×24 cm、深さ20 cmである。P 1 はその深さから主柱穴と推測される。P 5 は貯蔵穴に相当すると考えられる。住居の南東角に位置し、平面形は楕円形を呈すと推測される。規模は調査区範囲内において54 cm×47 cm、床面からの深さは54 cmである。上面には炭化材が出土している。炉は床面を約5 cm掘り窪めた地皿炉である。平面形は楕円形を呈し、規模は61 cm×45 cmである。炉の西側の床面には焼土が分布し、部分的に炭化物も見られる。

出土遺物は、土器片がわずかに出土したのみである。単口縁台付甕(1)は下層から、S字状口縁台付甕の台部(2)は床面直上から出土している。

表6 SI-07出土遺物観察表

No.	器種	量量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口径 (14.0) 底径 - 器高 残7.5	胴部は張り、口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面ハケの後一部ナデ。	胴部片岩・チャート 内にぶい橙色	口縁部～胴部片。下層。
2	台付甕	口径 - 底径 - 器高 残3.1	台部は「ハ」字状に開く。	台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。	片岩・チャート・角閃石 内外-明赤褐色	1/2。内外面摩耗。床面直上。

SI-08 (図19・20、表7/写真図版14・17)

F地点の調査区北東壁際に位置する。北東角は調査区外となり、南西側は砂礫層に切られる。平面形はおおむね方形と推察される。規模は検出範囲内において、北西-南東方向4.62 m、北東-南西方向2.56 mである。長軸方向はN-26°-Wをとる。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは27 cmである。

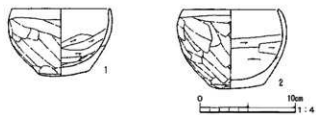


図19 SI-08出土遺物

壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。ピットは8ヵ所検出されたが、明確に主柱穴と判断できるものはない。規模は、P 1 が28 cm×22 cm、深さ46 cm、P 2 が40 cm×30 cm、深さ35 cm、P 3 が23 cm×22 cm、深さ24 cm、P 4 が21 cm×18 cm、深さ31 cm、P 5 が33 cm×31 cm、深さ50 cm、P 6 が32 cm×32 cm、深さ16 cm、P 7 が18 cm×17 cm、深さ27 cm、P 8 が34 cm×20 cm以上、

深さ 33 cm である。貯蔵穴および炉は確認されなかった。

出土遺物は、土器片がわずかに出土したのみである。坏（1・2）は P1 の上層から出土している。

表 7 SI-08 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	坏	口径	10.5	上位に膨らみを持つ体部から	口縁部内外面ヨコナデ。体部	片岩・チャート・角閃	2/3, P1内。
		底径	5.3	口縁部はゆるやかに内彎する。	外面ナデ、内面上位ナデの後	石・赤褐色粒	
		器高	7.2	底部は丸みを帯びる。	下半ケズリ。底部外面ナデ、	内外一赤褐色	
2	坏	口径	10.0	上位に膨らみを持つ体部から	口縁部内外面ヨコナデ。体部	片岩・チャート・角閃	2/3, P1内。
		底径	5.6	口縁部は内彎する。底部は丸	外面ナデ、内面ナデの後中位	石・赤褐色粒	
		器高	8.4	みを帯びる。	ケズリ。底部内外面ナデ。	内外一赤褐色	

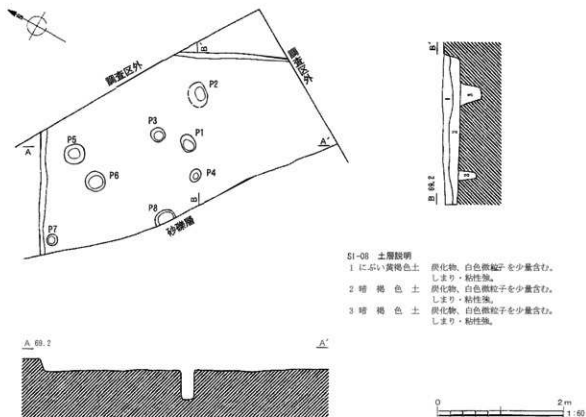


図 20 SI-08

SI-09 (図 21・22、表 8 / 写真図版 14・15・17)

G地点の調査区南端に位置する。東・南・西側は調査区外となる。重複する SI-10 と SD-07 に切られる。平面形はおおむね方形と推察される。規模は検出範囲内において、南北方向 4.0 m、東西方向 3.84 m である。主軸方向は $N-10^{\circ}-E$ をとる。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 26 cm である。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式で、住居跡中央に堅緻な硬化面が確認される。北側の床面には炭化材および焼土が分布している。ピットは 3 ヲ所検出された。規模は、P 1 が 32 cm × 31 cm、深さ 13 cm、P 2 が 40 cm × 31 cm、深さ 14 cm、P 3 が 71 cm × 25 cm 以上、深さ 14 cm である。貯蔵穴および炉は確認されなかった。

出土遺物は、北壁際の床面直上から小形丸底蓋（1）、鉢（3）、高坏（4）がまとまって出土している。P 1 の北側では、床面より約 10 cm 浮いた状態で、小形丸底蓋（2）が正位の状態出土している。

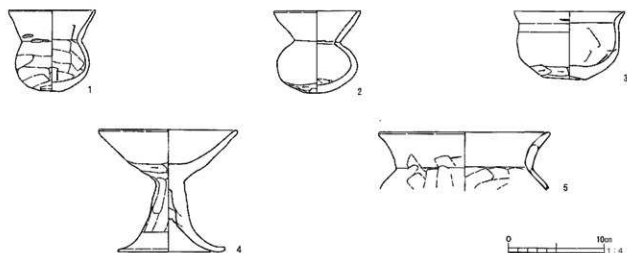


図 21 SI-09 出土遺物

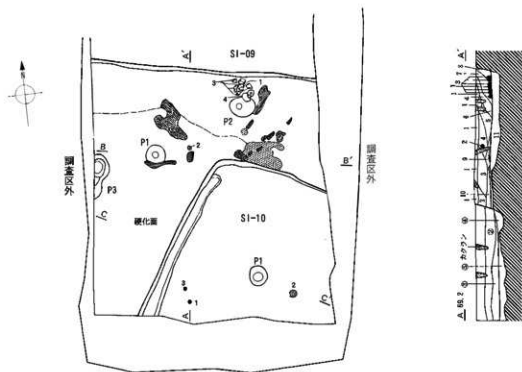
表 8 SI-09 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形丸底蓋	口径 9.2 底径 — 器高 8.7	口縁部は直線的に外傾する。 胴部は中に膨らみを持つ。 底部は丸底気味。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部ヨコナデの後下半ナデ、内面斡ナデ。底部外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	完形。床面直上。
2	小形丸底蓋	口径 9.2 底径 — 器高 8.8	口縁部は直線的に外傾する。 胴部は張り、中に最大径を持つ。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。内外面ナデ。胴部下端～底部外面ケズリの後ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一橙色	完形。中層。
3	鉢	口径 11.8 底径 4.2 器高 7.3	体部は下位に膨らみを持って立ち上がり、口縁部は外反する。底部は上げ底。	口縁部内外面ヨコナデ。外面ナデの後下端ケズリ、内面斡ナデ。底部内外面ナデ。	角閃石・赤褐色粒 内外一褐色 内一褐灰色	口縁部一部欠損。床面直上。
4	高坏	口径 14.6 底径 11.2 器高 13.0	口縁部は直線的に開く。脚柱部は下方へ開く。脚端部はゆるやかに広がり、端部でわずかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面ケズリの後ナデ。脚柱部内外面ヨコナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩・チャート・角閃石・赤褐色粒 内外一明赤褐色	ほぼ完形。坏底部にわずかに煤付着。床面直上。
5	小形甕	口径 (18.2) 底径 — 器高 6.2	口縁部は厚みを持って外反し、胴部は膨らみを持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。内外面斡ナデ。	白色粒 内一褐色 外一灰褐色	1/5。上～中層。

SI-10 (図 22・23、表 9/写真図版 14・15・17)

G 地点の調査区南端に位置する。東・南側は調査区外となる。重複する SI-09 を切り、SD-07 に切られる。平面形はおおむね方形と推察される。規模は検出範囲内において、北東-南西方向 2.72 m、北西-南東方向 2.87 m である。長軸方向は N-32°-E をとる。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 36 cm である。壁溝は検出範囲内においては西壁下で確認された。幅 13 cm ~ 24 cm、床面からの深さは 6 cm ~ 7 cm である。床面はほぼ平坦である。ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に良く締まっている。ピットは 1 ヲ所検出され、主柱穴と想定される。規模は 31 cm × 28 cm、深さ 48 cm である。貯蔵穴およびカマドは確認されなかった。

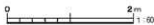
出土遺物は、土器片が少量出土したのみである。高坏脚（2）は床面よりやや浮いた状態で出土している。



Ⅱ 69.2



Ⅲ 69.2



S1-09 土層説明

- | | |
|---------|---|
| 1 灰黄褐色土 | ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまりややあり。粘性は他の層よりやや強い。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロックを多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック・炭化物を多量、積土を中量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロックを多量、炭化物を少量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック・炭化物を中量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 7 黒褐色土 | ロームブロックを多量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 8 黒褐色土 | ローム粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 9 黒褐色土 | 炭化物を大量、ロームブロックを中量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| 11 暗褐色土 | 掘り方。ロームブロックとの混合土。しまり・粘性ややあり。 |

S1-10 土層説明

- | | |
|--------|---------------------------------|
| ① 暗褐色土 | ロームブロックを多量、炭化物を少量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| ② 黒褐色土 | ロームブロックを多量、炭化物を中量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| ③ 黒褐色土 | ロームブロックを多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| ④ 黒褐色土 | ロームブロックを多量、炭化物を少量含む。しまり・粘性ややあり。 |
| ⑤ 暗褐色土 | 掘り方。ロームブロックとの混合土。しまり・粘性ややあり。 |

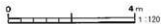
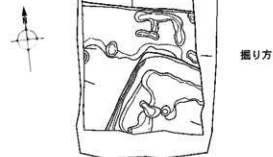


図 22 S1-09・10



図23 SI-10 出土遺物

表9 SI-10 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (13.0) 底径 — 器高 (4.0)	口縁部は浅い体部との境に、わずかな稜を持って外反する。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。内外面蓋ナデ。	チャート・黒色粒 内外—明赤褐色	1/6。上層。
2	高坏	口径 — 底径 10.0 器高 残4.7	脚柱部は短く「ハ」字状に開き、脚端部は短く広がる。	坏部内面ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	白色粒 内外—橙色	坏部～脚部。内外面磨耗。床面直上。
3	甕	口径 (19.5) 底径 — 器高 残10.5	口縁部は直立し、上位で外反する。胴部は膨らみを持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面蓋ナデ、内面ナデ。	片岩・チャート・黒色粒 内外—橙色	1/4。内外面磨耗。中層。

(2) 溝跡

SD-01 (図24・25、表10 / 写真図版6・18)

E地点の調査区西寄りに位置する。南側は調査区外へ延びる。重複するSI-04と1号河川跡を切っている。北側は旧女堀川に壊される。調査区内では、南北方向に向いてほぼ直線的に走行するが、北端付近で北西方向へやや角度を変える。規模は、上幅が110 cm～230 cm、下幅が52 cm～182 cmである。壁は、直線的に開いて立ち上がる。底面は平坦で、確認面からの深さは24 cm～57 cmである。北東および南西の2カ所に、ゆるやかな傾斜を持つ不整形な広がりを持つ。埋没土はAs-Bを大量に含む褐灰色土を主体とする。

遺物は、埋没土中から多数の土器片が出土している。土師器坏や須恵器甕等が確認されているが、本溝跡に伴うかは不明である。土器以外では、土鏝(5)や鉄釘(6)等が出土している。

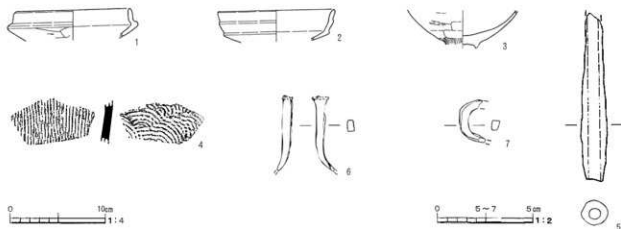
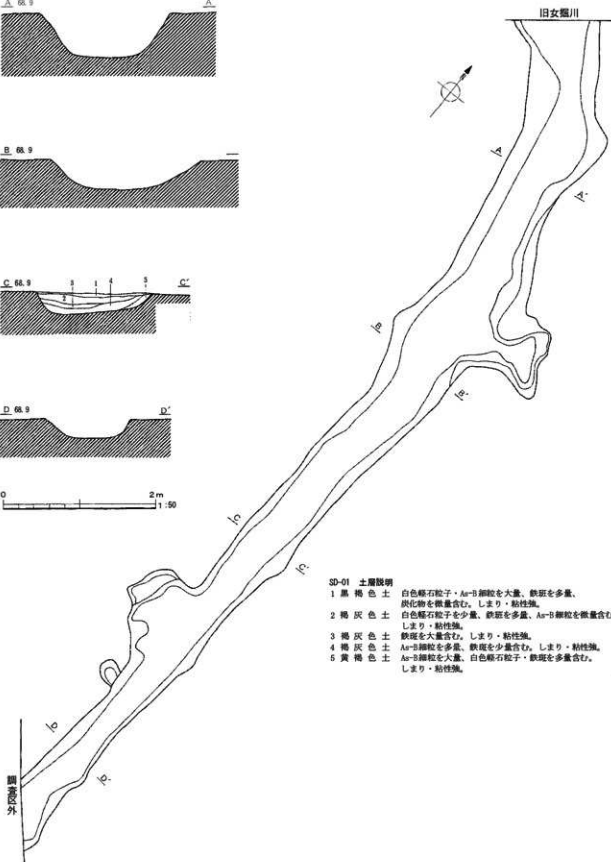
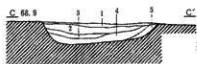


図24 SD-01 出土遺物



SD-01 土層説明

- 1 黒褐色土 白色粘土粒子・As-B細粒を大量、鉄斑を多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性強。
- 2 稀灰色土 白色粘土粒子を少量、鉄斑を多量、As-B細粒を微量含む。しまり・粘性強。
- 3 稀灰色土 鉄斑を大量含む。しまり・粘性強。
- 4 稀灰色土 As-B細粒を多量、鉄斑を少量含む。しまり・粘性強。
- 5 黄褐色土 As-B細粒を大量、白色粘土粒子・鉄斑を多量含む。しまり・粘性強。



図 25 SD-01

表 10 SD-01 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (12.1) 底径 — 器高 残 3.2	口縁部は体部との境に稜を持ち、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面澁ナデ。	白色粒 外一灰黄褐色 内一褐色	口縁部～体部片。 下層。
2	坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 残 3.3	体部は浅く、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は中位に段を持ち、彎曲気味に外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	チャート・黒色粒・褐色粒 内外一にぶい黄褐色	口縁部～体部片。 内外面摩耗。下層。
3	台付鉢	口径 — 底径 — 器高 残 4.1	体部は膨らみを持つ。	体部外面ハケの後ナデ、内面澁ナデ。	チャート・黒色粒 外一にぶい黄褐色 内一明赤褐色	1/4。上層。
4	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	胴部外面平行タタキ、内面同心内の当て具痕。	白色粒 内外一灰色	胴部片。一括。
No.	種類	器種	法量 (cm・g)			備考
5	土製品	土 鐘	残長：8.9、最大幅：1.4、孔径：0.6、残重：12.59。 胎土：チャート。色調：明黄褐色。			端部欠損。 上層。
6	鉄製品	釘	残長：3.9、幅：0.4、厚さ：0.5、残重：1.81。			端部欠損。 下層。
7	鉄製品	—	残長：2.3、幅：0.4、厚さ：0.5、残重：1.23。			両端部欠損。 一括。
8	石	—	長さ：13.2、幅：4.1、厚さ：4.2、重さ：335.40。 片岩。写真のみ掲載。			一部欠損。 一括。
9	石	—	長さ：16.2、幅：4.8、厚さ：3.0、重さ：343.77。 片岩。写真のみ掲載。			一部欠損。 一括。

SD-02 (図 26・27、表 11 / 写真図版 6・18)

E地点の調査区西端に位置する。西側は調査区外へ延びる。重複する1号河川跡とP-25に切られ、SI-07を切っている。調査区内では、南北方向に向いてほぼ直線的に走行する。規模は、上幅が56

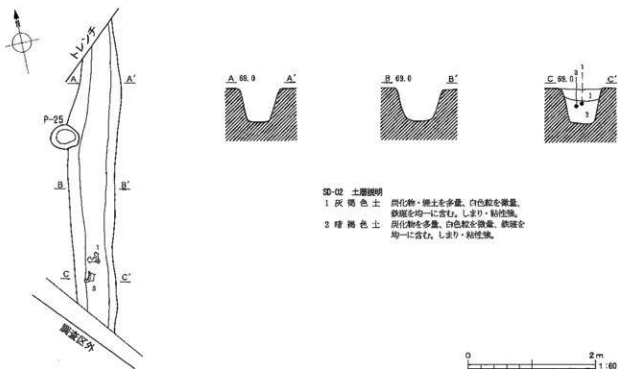


図 26 SD-02

cm～81 cm、下幅が30 cm～45 cmである。壁は、直線的にやや開いて立ち上がる。底面は平坦で、確認面からの深さは51 cm～54 cmである。埋没土は炭化物を多量、白色粒を微量に含む暗褐色土を主体とする。

遺物は、埋没土中から少量の土器片が出土している。器台（1）と甕（3）は、中層のほぼ同じレベルで出土した。

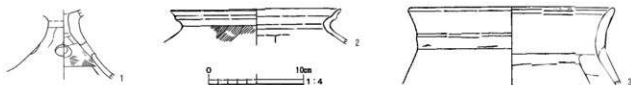


図 27 SD-02 出土遺物

表 11 SD-02 出土遺物観察表

№	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	器台	口径 — 底径 — 器高 残 7.3	脚部は下方へ広がり、中位に円孔を4ヶ所穿つ。孔径 1.5。	脚部外面ナデ、内面上位ナデ、中位ハケ・下位ヨコナデ。	白色粒 内外一にぶい橙色	2/3、内外面摩耗、中層。
2	台付甕	口径 (18.0) 底径 — 器高 残 3.3	胴部は張り、口縁部はS字状を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	粗粒チャート 内外一橙色	口縁部片。 一括。
3	甕	口径 (21.6) 底径 — 器高 残 8.3	口縁部は下位にわずかな段を持ち、ゆるやかに外反する。内面上端に浅い凹線が巡る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ナデ。	チャート・黒色粒 内外一橙色	1/3、外面摩耗、中層。

SD-03 (図 28・29、表 12 / 写真図版 18)

E地点の調査区西端に位置する。SD-04と隣接する。北西から南東方向に向いてほぼ直線的に走行する。規模は、全長が4.75 m、上幅が最大102 cm、下幅が最大84 cmである。壁はやや開いて立ち上がる。底面は凹凸があり、確認面からの深さは6 cmである。埋没土は鉄斑を多量に含む灰黄褐色土である。

遺物は、埋没土中からわずかな土器片が出土したのみである。環（1・2）は古墳時代後期に比定されるが、本溝跡に伴うかは不明である。

SD-04 (図 28)

E地点の調査区西端に位置する。SD-03と隣接する。北西から南東方向に向いてほぼ

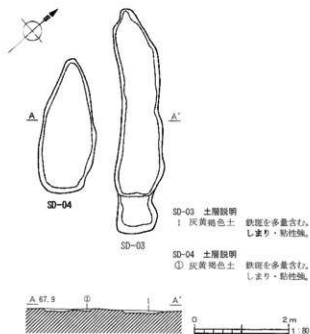


図 28 SD-03・04

直線的に走行する。規模は、全長が 2.83 m、上幅が最大 119 cm、下幅が最大 105 cm である。壁はやや開いて立ち上がる。底面は凹凸があり、確認面からの深さは 6 cm である。埋没土は鉄斑を多量に含む灰黄褐色土である。



図 29 SD-03 出土遺物

遺物は、埋没土中からごくわずかな土器片が出土したのみである。

表 12 SD-03 出土遺物観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (11.8) 底径 — 器高 残 3.6	口縁部は体部との境に稜を持って内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	チャート・黒色粒外—浅黄褐色 内—浅黄褐色	1/5。一括。
2	坏	口径 (11.0) 底径 — 器高 残 3.9	口縁部は体部との境にわずかな稜を持って外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	チャート・褐色粒内外—浅黄褐色	1/4。内外面摩耗。一括。

SD-05 (図 32 / 写真図版 6)

E 地点の調査区東側に位置する。北側は調査区外へ延びる。重複する 2 号河川跡を切っている。調査区内では、南北方向に向いて蛇行気味に走行し、北側で北東方向にやや角度を変える。規模は、上幅が 42 cm ~ 116 cm、下幅が 20 cm ~ 100 cm である。壁は開いて立ち上がる。底面は凹凸があり、確認面からの深さは 10 cm である。埋没土は As-B を多量に含む褐灰色土である。

遺物は、埋没土中からごくわずかな土器片が出土したのみである。

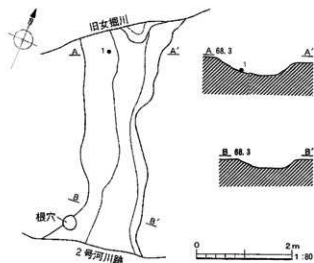


図 30 SD-06

SD-06 (図 30・31、表 13 / 写真図版 18)

E 地点の調査区東側に位置する。重複する 2 号河川跡を切っている。北側では旧女堀川に壊される。調査区内では、北西から南東方向に向いてほぼ直線的に走行する。規模は、上幅が 110 cm ~ 218 cm、下幅が 25 cm ~ 110 cm である。壁は、直線的に開いて立ち上がる。底面は凹凸があり、確認面からの深さは 32 cm である。埋没土は小礫や砂粒を多量に含む褐灰色土である。

遺物は、埋没土中から少量の土器片が出土している。坏 (1) は底面直上からの出土で、周辺には土師器坏・甕の破片や礫がまとまって確認されている。

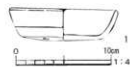


図 31 SD-06 出土遺物

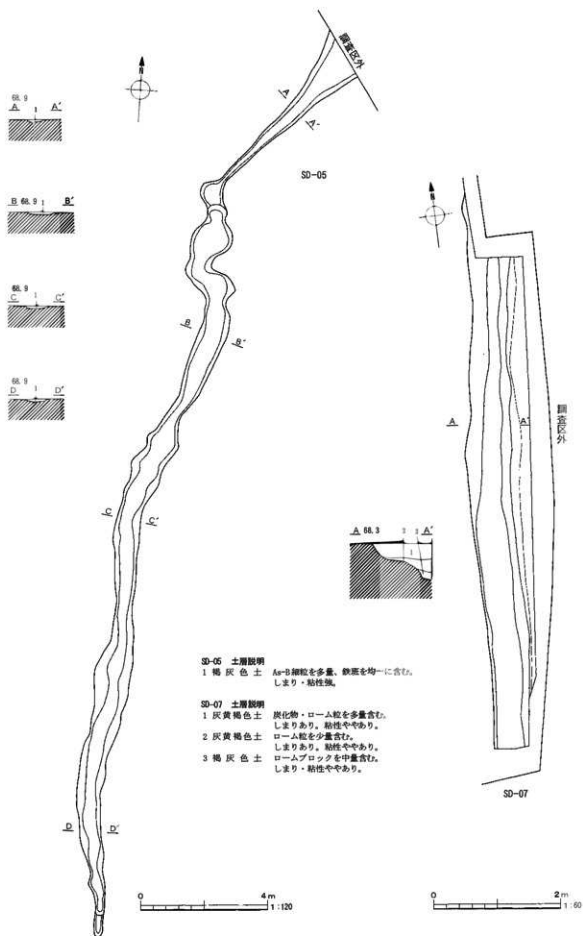


図 32 SD-05・07

表 13 SD-06 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	杯	口径 11.5 底径 3.4 器高 8.7	体部から口縁部にかけて内湾気味に開く。底部は平底で、丸みを帯びる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底内外一橙色。部外面ケズリ、内面ナデ。	角閃石・チャート 内外一橙色	1/3。底面直上。

SD-07 (図 32・33、表 14 / 写真図版 14・18)

G 地点の調査区東端に位置する。南北両端および東側は調査区外となる。重複する SI-09 と SI-10 を切っている。調査区内においては、南北方向に向いて直線的に走行する。規模は上幅が最大 104 cm、下幅が最大 28 cm である。壁は西側は、中位に段を有し、上位は直線的にやや開いて立ち上がる。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 57 cm である。埋没土は、下層がロームブロックを含む褐灰色土、上層がローム粒を含む灰黄褐色土である。条里形地割りの南北方向の坪線とほぼ一致する。

出土遺物は、埋没土中からわずかに土器片が出土したのみである。須恵器壺片 (1) は上層からの出土である。



図 33 SD-07 出土遺物

表 14 SD-07 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器壺	口径 - 底径 - 器高 -	タタキ成形。	外面平行タタキ。内面平行当て具痕の後ナデ、上方はナデ。内外一灰色	チャート	胴部片。上層。

(3) 土坑

SK-01 (図 35・36、表 15 / 写真図版 7・19)

E 地点の調査区西端に位置する。南西側は調査区外となる。重複する P-02 に切られる。平面形は南北に長い不整形な隅丸長方形を呈すと推測される。規模は検出範囲内において、南北方向 2.5 m、東西方向 1.42 m である。長軸方向は N-19°-W をとる。壁はやや傾斜して立ち上がる。底面は低い段差を持ち、確認面からの深さは最深で 38 cm である。

遺物は、2 層を中心に多量の土器片が出土している。土師器の器台、高杯、埴、鉢、S 字状口縁台付壺、単口縁台付壺、受け口状口縁壺、二重口縁壺等がある。

SK-02 (図 34・35、表 16 / 写真図版 7・18)

E 地点の調査区西端に位置する。SK-03 と隣接する。平面形は不整形で、北東側の深い掘り込み部分は槽円形を呈する。規模は、北東-南西方向 166 cm、北西-南東方向 99 cm



図 34 SK-02 出土遺物

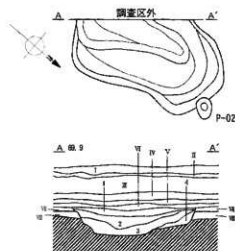
である。楕円形部分は99 cm×88 cmである。長軸方向はN-48°-Eをとる。壁は、下半は直線的に急な傾斜で立ち上がり、上半はゆるやかに開く。底面はゆるやかに傾斜している。確認面からの深さは最深で49 cmである。

遺物は、埋設土中からパレストスタイル壺の胴部片(1・2)が出土している。本来の山形文が楕円斜格字文に変換されており、在地産と考えられる。

SK-03 (図35 / 写真図版7)

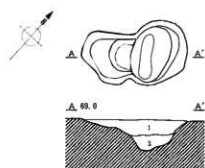
E地点の調査区西端に位置する。SK-02と隣接する。平面形は不整形で、北東側の深い掘り込み部分は円形を呈する。規模は、北東-南西方向156 cm、北西-南東方向80 cmである。円形部分は80 cm×68 cmである。長軸方向はN-23°-Eをとる。壁は、北東側は直線的に急な角度で立ち上がる。南西側は下半が急な角度で立ち上がり、上半はゆるやかに開く。確認面からの深さは最深で48 cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は、ごくわずかな土器片が出土したのみである。



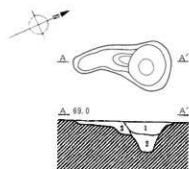
SK-01 土層説明

- | | |
|--------------|--|
| I 灰 色 土 | 硬表土。 |
| II にぶい黄褐色土 | 白色粒子を多量含む。1層上の間に厚さ0.5~1cmの鉄分沈着物あり。しまり・粘性強。 |
| III にぶい黄褐色土 | 明黄褐色細砂粒を大量。白色粒子を少量、炭化物を少量含む。しまり・粘性強。 |
| IV 褐色土 | 灰黄色粒を大量。白色粒子・炭化物を少量含む。 |
| V 褐色土 | 白色粒子を少量含む。鉄分沈着。しまり強。粘性弱に強い。 |
| VI 褐色土 | 白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。鉄分沈着。 |
| VII 褐色土 | 鉄斑を多量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。遺物を含む。 |
| VIII にぶい黄褐色土 | 鉄斑を多量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。ローム土の二次堆積か。炭化物を少量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。 |
| 1 にぶい褐色土 | 炭化物を多量。白色粒子を少量含む。最も遺物が集中する。しまり・粘性強。炭化物を少量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。 |
| 2 暗褐色土 | 炭化物・黄褐色ローム土を少量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。 |
| 3 褐色土 | 炭化物を少量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。 |
| 4 褐色土 | 炭化物・黄褐色ローム土を少量。白色粒子を少量含む。しまり・粘性強。 |



SK-02 土層説明

- | | |
|---------|-------------------------------|
| 1 暗灰色土 | 炭化物・白色粒子を少量。鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。 |
| 2 灰黄褐色土 | 炭化物を少量。鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。 |



SK-03 土層説明

- | | |
|-----------|---------------------------------------|
| 1 にぶい黄褐色土 | ローム土を多量。炭化物・白色粒子を少量。鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。 |
| 2 黒褐色土 | 炭化物・白色粒子を少量。鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。 |
| 3 にぶい黄褐色土 | 1層と異なる色がやや薄い。鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。 |



図35 SK-01 ~ SK-03

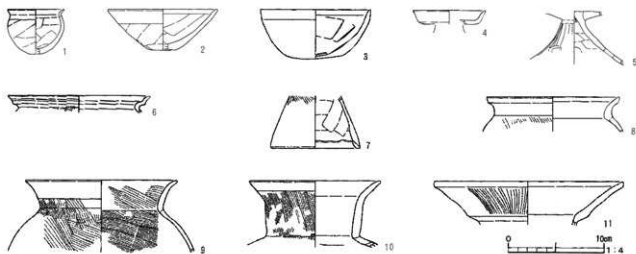


図 36 SK-01 出土遺物

表 15 SK-01 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形埴	口径 (6.0) 底径 (1.0) 器高 (4.8)	体部は上位に膨らみを持ち、口縁部は短く外傾する。底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面造ナデ。底部内外面造ナデ。	角閃石・チャート 外-明赤褐色 内-橙褐色	1/4。内外面摩耗。一括。
2	小形鉢	口径 (11.6) 底径 (2.5) 器高 4.4	底部から口縁部にかけて直線的に開く。底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面造ナデ。底部外面ナデ。内面造ナデ。	片岩・チャート・角閃石 外-明赤褐色 内-明赤褐色	1/2。内外面摩耗。一括。
3	埴	口径 11.6 底径 器高 5.3	体部はわずかに丸みを帯び、口縁部は短く外反気味に立ち上がる。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面造ナデ。	角閃石・チャート・赤2/3 褐色粒 内外-橙褐色	外面摩耗。一括。
4	器台	口径 (7.7) 底径 器高 残 1.5	口縁部は上位で外反する。	器受部内外面ナデ。	角閃石・白色粒 褐色粒 内外-橙褐色	1/3。内外面摩耗著しい。一括。
5	器台	口径 底径 器高 残 5.6	脚部は外反して下方へ開き、中に円孔を3ヵ所穿つ。孔径 (1.2)。	脚部外面ミガキ、内面造ナデ。	角閃石・チャート・赤2/3 褐色粒 内外-橙褐色	一括。
6	台付甕	口径 (15.0) 底径 器高 残 1.9	口縁部はS字状を引する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ。	角閃石・チャート 外-こぶい、褐色 内-灰褐色	口縁部片。一括。
7	台付甕	口径 底径 (9.4) 器高 残 5.6	「台部は「ハ」字状に開き、下部は内側へ折返す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ。内面造ナデ・下位ヨコナデ。	チャート 内外-こぶい、褐色	1/2。一括。
8	甕	口径 (14.0) 底径 器高 残 3.7	口縁部は外反する。口唇部は平坦面を持ち、上方へつまみ上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ハケ、内面造ナデ。	片岩・白色粒・褐色粒 外-橙褐色 内-明赤褐色	1/6。一括。
9	甕	口径 (16.0) 底径 器高 残 7.6	胴部は膨らみを持つ。口縁部は外反する。	口縁部外面ハケの後上へ中位ヨコナデ、内面ハケ。胴部内外面ハケ。	片岩・チャート・角閃石 内外-橙褐色	一括。
10	壺	口径 (13.8) 底径 器高 残 7.0	口縁部は直立し、上位で強く外傾する。	口縁部外面ハケの後上位ヨコナデ、内面ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外-橙褐色	口縁部片1/3。一括。
11	壺	口径 (20.0) 底径 器高 残 4.6	口縁部は外傾し、上端で短く直立する。重口縁。	口縁部外面ミガキ、内面ヨコナデ。	角閃石・白色粒 外-こぶい、赤褐色 内-明赤褐色	口縁部片。一括。

表 16 SK-02 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	蓋	口径 底径 器高	— — —	胴部外面縞襷横線文の間に篋 抽斜格子文、内面ナデ。	チャート・黒色粒 外一に深い褐色 内一明赤褐色	胴部片。一括。
2	蓋	口径 底径 器高	— — —	胴部外面縞襷横線文の下に篋 抽斜格子文、内面ナデ。	チャート・黒色粒 外一褐色 内一に深い赤褐色	胴部片。一括。

(4) ビット (図 6、表 17)

本調査区では総計 26 基を検出した。ビットの分布範囲は 1 号河川跡の南西側に密集している。各ビットの平面形は、円形および楕円形を呈する。規模は長径 18 cm～49 cm、短径 18 cm～42 cm、確認面からの深さ 8 cm～38 cm である。埋没土は、A：上層が褐灰色土、下層が黒褐色土で、炭化物・焼土を含むもの、B：上層が褐灰色土、下層が黒褐色土で、鉄分を均一に含むもの、C：単層で灰褐色土のものという 3 タイプが確認された。いずれも粘性に富み、締まりは強い。A は P-01・03・12、B は P-02・04・05・06・10・11、C は P-07～09・13～26 で、C が主体を占める。柱痕は検出されていない。

遺物は、P-25・26 から土師器の細片がわずかに出土している。全て細片で土器から時期を比定することはできないが、P-02・25 が古墳時代前期の遺構である SI-07・SD-02 を切っていることから、B・C の埋没土を有するビットの時期はこれ以降と考えられる。また、A と B の土質は炭化物・焼土の有無を除き、類似しており、近い時期に埋没したものと推測される。

表 17 ビット計測表

番号	平面形態	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
01	楕円形	47 × 32	17
02	楕円形	34 × 24	38
03	円形	26 × 25	33
04	円形	24 × 24	21
05	楕円形	38 × 23	17
06	楕円形	38 × 21	18
07	円形	44 × 42	9
08	楕円形	(38) × 29	14
09	楕円形	25 × 21	8
10	円形	41 × 37	25
11	不整楕円形	48 × 34	25
12	円形	49 × 45	11
13	円形	22 × 21	32

番号	平面形態	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
14	楕円形	28 × 21	16
15	楕円形	41 × 23	17
16	円形	20 × 20	20
17	円形	25 × 23	12
18	円形	18 × 18	24
19	楕円形	24 × 18	19
20	円形	23 × 20	20
21	楕円形	26 × (18)	16
22	円形	23 × 22	17
23	楕円形	38 × 26	36
24	楕円形	32 × 24	14
25	楕円形	46 × 38	45
26	円形か	22 × (20)	21

(5) 河川跡

1号河川跡 (図 37・39・46～49、表 18～23 / 写真図版 8～11・19～22)

E地点の調査区西側に位置する。北西側は調査区外へ延びる。南東側は2号河川跡と合流する。重複するSD-02を切り、SD-01に切られる。調査区内ではほぼ直線的に走行し、流れの方向は北西から南東に向かっていたものと考えられる。規模は、上幅が5.4m～7.0m、下幅が3.6m～5.0mである。壁は直線的にやや開いて立ち上がるが、調査区北西側の西壁は中位で角度を変え、上半はゆるやかな傾斜となる。調査は砂利層の上面まで行い、一部砂利層を20cm程掘り下げた。砂利層の上面はほぼ平坦で、確認面からの深さは95cm～130cmである。

埋没状態は、調査区北西側の土層断面Aでは、確認面から約50cm下に厚く硬い鉄分凝集層(7層)があり、これを境にして上層と下層に分かれる。鉄分凝集層はほぼ平坦をなしている。上層は灰褐色粘質土を主体とする。下層は黄灰色砂と褐色粘土が互層をなしており、その下に砂利層が堆積する。南側の土層断面Bでは、大きな相違はないものの、上層と下層を分ける厚い鉄分凝集層は見られなくなり、上層中に薄い鉄分の沈着(1層下位)が見られるに留まる。砂利層は径0.5～4cmの円礫・角礫と黄灰色砂が主体となり、鉄分を多く含む。

遺物は、埋没土全体から多量の土器が出土している。上層は破片が多く、器面は摩耗している。ただし、確認面に近い位置では、ある程度まとまりを持った甕(13)、瓶(14)、須恵器甕(19)などが出土している。時期は、若干古い様相のものが見られるが、鬼高式期が主体となる。下層も破片が多いが、下半～砂利層付近では、比較的形を保った土器が出土している。ミニチュア(22)、小形丸底壺(25)、高杯(29)、甕(39)、直口壺(42)は、砂利層直上面から出土したものである。時期は、S字口縁台付壺など前期の土器も確認されるが、和泉式期が主体となる。また、下位からは自然木も出土している。

2号河川跡 (図 37・40～45・50～54、表 24～33 / 写真図版 8・11～13・23～26)

E地点の調査区南東側からF地点東側にかけて位置する。南西および北東側は調査区外へ延び、北西側では1号河川跡が合流する。重複するSD-05とSD-06に切られる。流れの方向は調査区内では、南西から北東に向かって走行していたものと考えられ、F地点の北東に隣接する川越田遺跡B地点(宍河内1993)で検出された河川跡へ続いていく。部分的な調査のため、河川の南東側の立ち上がりを確認することはできなかった。壁は、北西壁において直線的にやや開いて立ち上がり、上位でゆるやかに傾斜して開く。調査は砂利層の上面まで行った。砂利層の上面はほぼ平坦だが、部分的に乱れが生じている。確認面からの深さは、E地点で70cm～110cm、F地点で140cmである。また、E地点の河川跡で土坑が1ヵ所検出された。規模は24cm×12cmの不整形円形で、確認面からの深さは140cmである。壁は直線的にやや開いて立ち上がり、底面は平坦である。

埋没状態は、E地点西側、E地点東側、F地点の各場所で相違が見られ、複雑な様相を呈している。E地点西側(土層断面D)では、上層は灰褐色粘質土、下層は黒褐色粘土が主体である。黒褐色粘土の下は砂利層となる。この状況は1号河川跡との合流地点まで続くが、これ以东は様相を異にする。E地点東側(土層断面F)では、上層は灰褐色粘質土、中層は灰黄褐色砂を含む褐色粘質土、下層は暗青灰色粘土が主体となる。粘土の下は砂利層である。土層断面Dの付近で見られなかった砂を含

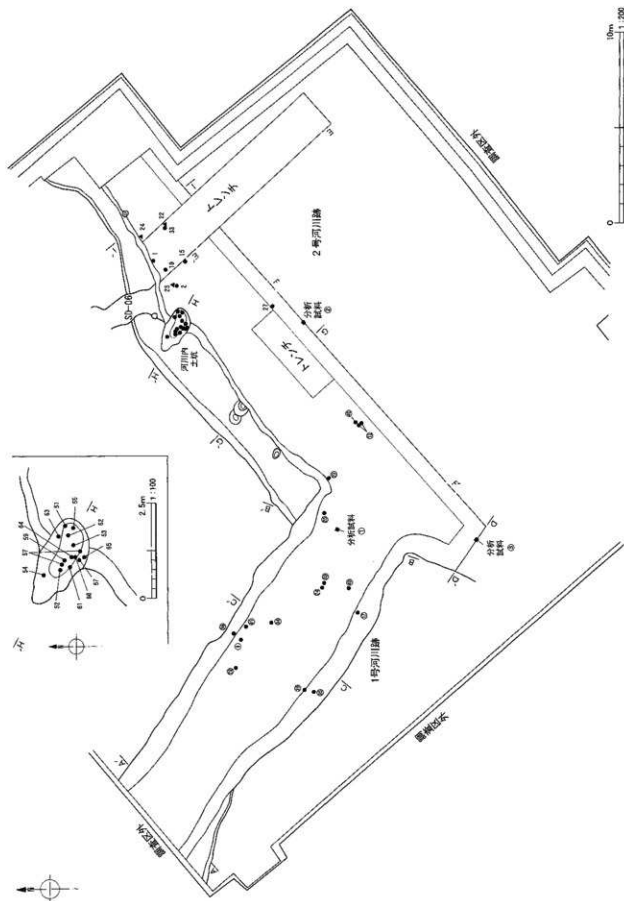
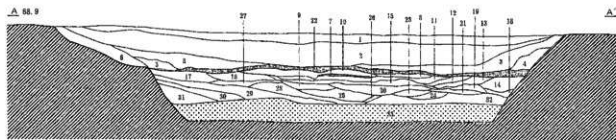


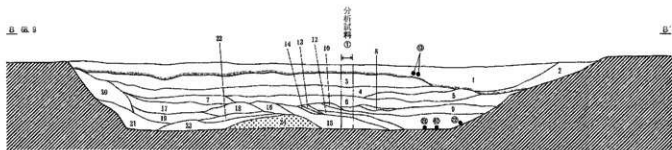
图 37 E地点1・2号河川跡

図 38 1号河川跡 (1)



1号河川跡 (A-A')

- | | | | |
|----------|--------------------------------|----------|---|
| 1 灰褐色土 | 鉄分を多量含む。しまり・粘性強。 | 17 褐灰色粘土 | 16層に近いが、鉄分が少ない。 |
| 2 灰褐色土 | 1層に比へ鉄分が少ない。 | 18 褐灰色粘土 | 15層に近いが、鉄分をより多く含む。 |
| 3 灰褐色土 | 2層に比へ灰色がかる。 | 19 褐灰色粘土 | 15層に近い。炭化物を少量含む。 |
| 4 灰褐色土 | 鉄分を多く含むローム土との混合土。しまり・粘性強。 | 20 黒褐色粘土 | 鉄分を多く含む砂との互層。炭化物を多量に含む。しまり・粘性強。 |
| 5 灰褐色土 | 3層に近いが、やや鉄分を多く含む。 | 21 黒褐色粘土 | 20層に近いが、黒褐色土が多い。 |
| 6 灰褐色土 | 粘質土と鉄分を多く含むローム土との混合土。しまり・粘性強。 | 22 褐灰色粘土 | 鉄分を多く含む砂の小ブロック・黒褐色粘土を塊状に含む。しまり・粘性強。 |
| 7 明褐色土 | 鉄分軽集層。 | 23 黄灰色砂 | 鉄分が不規則に層状をなして混入する。しまり・粘性なし。 |
| 8 褐灰色土 | 粘質土。砂を多量に、鉄質を均一に含む。しまり・粘性強。 | 24 褐灰色粘土 | 黒みが強い。鉄分・砂を均一に含む。しまり・粘性あり。 |
| 9 褐灰色土 | 8層に近いが、砂は殆ど含まず、鉄質も少ない。 | 25 暗赤褐色土 | 鉄分と砂との互層。しまり・粘性弱。 |
| 10 暗赤褐色土 | 鉄分軽集層。 | 26 褐灰色粘土 | 砂を均一に含む。しまり・粘性あり。 |
| 11 褐灰色土 | 9層に近いが、鉄質は大ブロック状となり、上段にまとまる。 | 27 褐灰色粘土 | 鉄分・砂を均一に。黒褐色粘土を下位に含む。しまり・粘性強。 |
| 12 褐灰色土 | 11層より鉄分を多く含む。 | 28 褐灰色粘土 | 22層に近いが、黒褐色土が少ない。 |
| 13 褐灰色土 | 12層に近いが、鉄分がさらに多く沈着する。 | 29 褐灰色粘土 | 黒褐色粘土と砂との互層。しまり・粘性あり。 |
| 14 暗赤褐色土 | 鉄分層。褐灰色粘土般・ブロックを均一に含む。しまり・粘性強。 | 30 褐灰色粘土 | 29層に近いが、互層が見れる。 |
| 15 褐灰色粘土 | 鉄分多く含む粘土との互層。黒褐色粘土を塊状に含む。 | 31 褐灰色粘土 | 黒みが強い。砂を大量に含む。しまり・粘性強。 |
| 16 褐灰色粘土 | 鉄分を大量に、砂を均一に含む。しまり・粘性強。 | 32 黄灰色砂 | 鉄分・黒褐色シルト・灰褐色シルトを均一に含む。しまり・粘性あり。 |
| | | 33 黄灰色砂利 | 径0.5~4cmの円礫・角礫が主体となる。鉄分・砂を多量に含む。赤みがかる。しまり・粘性なし。 |



1号河川跡 (B-B')

- | | |
|----------|--|
| 1 灰褐色土 | 炭化物を少量含む。下位に鉄分が多量に沈着する。しまり・粘性強。 |
| 2 灰褐色土 | ローム土・鉄分を多量に含む。しまり・粘性強。 |
| 3 暗灰色土 | 粘質土。炭化物・鉄分を少量含む。しまりは3層より強い。 |
| 4 暗褐色土 | 黒褐色土を多量。鉄分を均一に含む。しまり・粘性強。 |
| 5 褐灰色土 | 3層に近いが、鉄分がやや少ない。粘性は3層より強い。 |
| 6 黒褐色土 | 粘質土。薄層状の炭化物。鉄分を多量に含む。しまり・粘性強。 |
| 7 灰褐色土 | 4層に近い。鉄分を多量に含む。しまり・粘性強。 |
| 8 黄褐色土 | 褐灰色粘土との互層。砂中に鉄分沈着。しまり・粘性あり。 |
| 9 黒褐色土 | 褐灰色粘土とのやや互層した互層。炭化物・砂を少量含む。鉄分沈着。しまり・粘性強。 |
| 10 黄褐色土 | しまり・粘性なし。 |
| 11 暗灰色粘土 | 炭化物・砂を均一に含む。しまり・粘性強。 |
| 12 黄褐色土 | 鉄分沈着。粘土を部分的に含む。しまり・粘性ややあり。 |

- | | |
|-----------|---|
| 13 褐灰色粘土 | 11層に近いが、黒褐色粘土を多く含む。 |
| 14 褐灰色粘土 | 13層より黒褐色粘土・砂が少ない。 |
| 15 褐灰色粘土 | 砂との互層。砂みがか。薄層状黒褐色粘土を所々含む。しまり・粘性あり。 |
| 16 褐灰色粘土 | 砂との混合物。上半に鉄分沈着。薄層状の黒褐色粘土を所々含む。しまり・粘性あり。 |
| 17 褐灰色粘土 | 16層に近いが、粘土の割合が減少する。 |
| 18 褐灰色粘土 | 16層に近いが、粘土の割合が増加する。 |
| 19 褐灰色粘土 | 17層に近いが、鉄分の沈着が少ない。 |
| 20 灰黄褐色粘土 | 鉄分を多く含むローム土との混合物。しまり・粘性強。 |
| 21 灰褐色土 | 20層よりローム土が少ない。 |
| 22 黄褐色土 | 砂との互層。鉄分沈着。しまり・粘性あり。 |
| 23 黄褐色土 | 砂を均一に含む。しまり・粘性強。 |
| 24 黄褐色砂利 | 径0.6~3cmの角礫が主体となる。しまり・粘性なし。 |

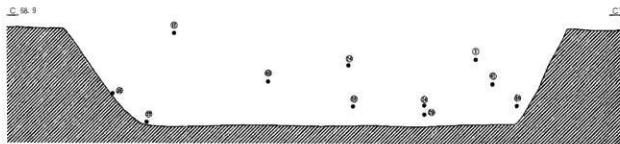
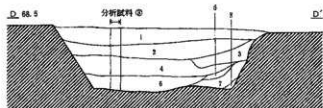
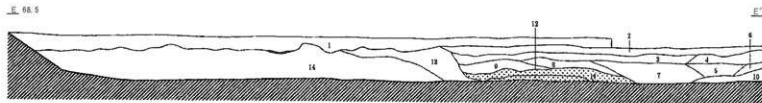


図 39 1号河川跡 (2)



2号河川跡 (D-D')

- | | |
|---------|--------------------------------------|
| 1 灰褐色土 | 鉄分を多量に含む。しまり・粘性強。 |
| 2 灰褐色土 | しまり・粘性強。 |
| 3 褐灰色土 | 褐色ローム土を大量に含む。しまり・粘性強。 |
| 4 黒褐色粘土 | 極細かな赤色粉末を多量に含む。しまり・粘性強。土層断面Fの24層に対応。 |
| 5 黒褐色粘土 | 褐色ローム土を多量に含む。鉄分少量。しまり・粘性強。 |
| 6 黒褐色粘土 | 黒褐色植物遺材を含む。しまり・粘性強。土層断面Fの25層に対応。 |
| 7 黒褐色粘土 | 6層に近いが、より粘性が強い。 |
| 8 黒褐色粘土 | 7層より黒みがかる。 |



2号河川跡 (E-E')

- | | | | |
|---------|---------------------------------------|-----------|-------------------------------------|
| 1 褐灰色土 | 鉄道を均一に、砂を少量含む。しまり・粘性強。 | 8 灰褐色粘土 | 赤褐色砂との互層。しまり・粘性あり。 |
| 2 灰褐色土 | 1層と比べ黒み強い。白色細粒を少量含む。鉄分不規則に沈着。しまり・粘性強。 | 9 灰褐色粘土 | 鉄分を多量に含む。しまり・粘性強。 |
| 3 灰褐色土 | 粘質土と砂の互層。しまり・粘性強。 | 10 灰褐色粘土 | 砂を均一に、鉄分を少量含む。しまり・粘性強。 |
| 4 灰褐色土 | 粘質土と鉄分を多く含む褐色ローム土の混合土。しまり・粘性強。 | 11 暗赤褐色砂利 | 径5mm。しまり・粘性なし。 |
| 5 灰褐色粘土 | 砂・鉄分を均等に含む。しまり・粘性強。 | 12 暗赤褐色砂利 | 11層に近いが、小礫を大量に含む。しまり・粘性なし。 |
| 6 灰褐色粘土 | 6層に近いが、鉄分がやや多く、砂が少ない。 | 13 灰褐色土 | 粘質土。砂を多量に、鉄分を少量含む。しまり・粘性強。 |
| 7 灰褐色粘土 | 径0.3~2cmの赤褐色砂利との互層。しまり・粘性あり。 | 14 灰褐色土 | 粘質土。砂・鉄分を不規則に含む。黒化植物片が存在する。しまり・粘性強。 |



図40 三地点2号河川跡 (1)

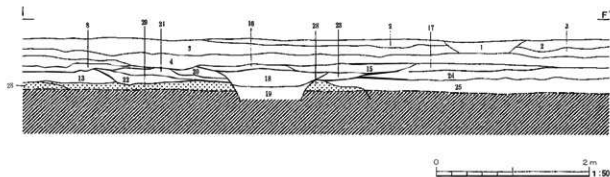
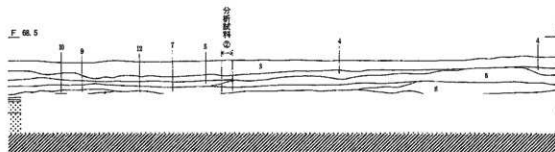


図 41 E地点2号河川跡(2)

2号河川跡 (F-F')

- 1 褐灰色土 鉄分を不規則に含む。しまり・粘性強。
- 2 灰褐色土 鉄分を多量に含む。しまり・粘性強。
- 3 灰褐色土 粘質土。鉄分を多量含む。下部に鉄分沈着。しまり・粘性強。
- 4 褐灰色土 粘質土。鉄分を不規則に含む。しまり・粘性強。
- 5 褐灰色土 4層に近いが、鉄分・砂を多量に含む。しまり・粘性強。
- 6 褐灰色土 5層より鉄分が多く、4層より粘質土が少ない。しまり・粘性あり。
- 7 褐灰色土 粘質土。砂を多量。鉄分を少量含む。しまり・粘性あり。
- 8 褐灰色土 7層に近いが、砂・鉄分を不規則な薄層状に含む。
- 9 褐灰色土 8層より砂・鉄分を多量に含む。
- 10 褐灰色土 9層に近いが、黒褐色粘土が混入する。
- 11 黄灰色砂 砂との混合土。鉄分を均一に含む。しまり・粘性あり。
- 12 黄灰色砂 鉄分沈着層。
- 13 褐灰色粘土 砂を多量。鉄分を少量含む。しまり・粘性強。
- 14 青灰色粘土 砂との混合土。鉄分が多量に沈着。しまり・粘性強。
- 15 褐灰色粘土 やや黒みが強い。しまり・粘性強。

- 16 灰黄褐色砂 粘土をわずかに含む。しまり・粘性なし。
- 17 褐灰色粘土 15層に近いが、さらに黒みが強い。
- 18 灰黄褐色砂 16層に近いが、鉄分を多量に含む。しまり・粘性なし。
- 19 褐灰色粘土 砂との混合土。しまり・粘性あり。
- 20 褐灰色粘土 砂を縦状・塊状に少量含む。しまり・粘性あり。
- 21 褐灰色粘土 砂との互層。鉄分を多量に含む。しまり・粘性あり。
- 22 褐灰色粘土 砂を多量に含む。しまり・粘性あり。
- 23 褐灰色粘土 黒みが強い。砂を多量に含む。しまり・粘性強。
- 24 黄褐色粘土 黒輝石の細粒を多量含む。しまり・粘性強。
- 25 黒褐色粘土 黒褐色煤物混入を含む。しまり・粘性強。
- 26 黄灰色砂 径5-30mmの角礫・円礫を主体とする。鉄分を多量に含む。しまり・粘性なし。
- 27 暗青灰色粘土 砂・銀色の細粉末を均一に、炭化物をわずかに含む。しまり・粘性強。
- 28 黒褐色砂 径5-30mmの角礫・円礫を主体とする。黒褐色粘土を含む。しまり・粘性弱い。
- 29 黄灰色砂 部分的に黒褐色粘土を含む。しまり・粘性なし。

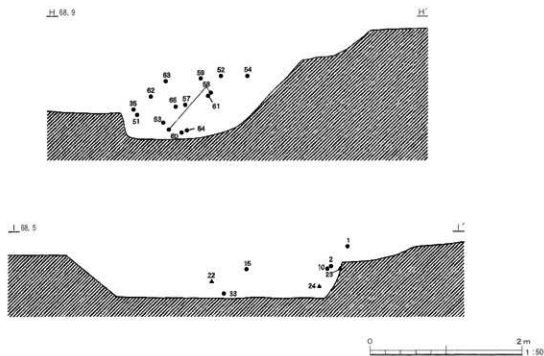


図42 E地点2号河川跡(3)

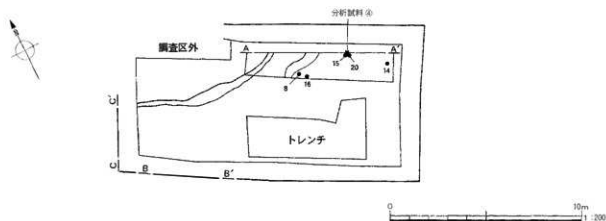
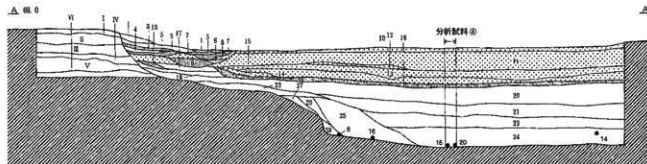


図43 F地点2号河川跡(1)

む粘質土が、上層の粘質土と下層の粘土との間に堆積するようになる。また、下層の粘土も土層断面Dでは黒褐色だったのが、土層断面F東側では暗青灰色に変化している。

さらに、F地点になると、確認面から約50cm下に厚く硬い鉄分凝集層(F地点土層断面A-16層)が確認される。鉄分凝集層は、北西側でやや上がるが、ほぼ平坦をなしている。これを境に上層と下層に分かれ、上層にはふい黄褐色砂利層、下層は粘土が主体となる。下層は上半が暗灰色粘土、下半が緑黒色粘土に分かれる。粘土層の下は砂利層となり、粘土層の底面は平坦である。F地点の状態は、B地点とはほぼ同様の様相を示している。また、北西端には、上層の砂利層を一部切る砂利・粘土・砂の互層(F地点土層断面A-1~9層)が確認される。



F地点

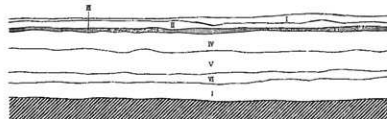
2号河川跡 (A-A')

- I ぶい黄褐色土 ぶい黄褐色砂と褐灰色粘質土の混合土。灰色砂を多量に、白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一、固化物を部分的に含む。しまりあり。粘性強。
- II 褐灰色土 粘質土。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一、固化物を微量に含む。しまり・粘性強。
- III 黒褐色土 粘質土。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。
- IV 褐灰色土 粘質土。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。
- V 灰褐色土 粘質土。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一、砂を少量含む。しまり・粘性強。
- VI 黄褐色土 褐灰色ローム土と灰褐色粘質土の混合土。白色粒子を均一に含む。しまり・粘性強。
- 1 褐灰色土 褐灰色粘質土とぶい黄褐色砂の混合土。径1~2cmの小礫を所々、白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一含む。しまり強。粘性中弱。
- 2 褐灰色土 褐灰色粘土とぶい黄褐色砂の混合土。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。
- 3 ぶい黄褐色砂 白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり強。粘性なし。
- 4 褐灰色粘土 ぶい黄褐色砂を部分的に、白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまりややあり。粘性強。3層との間に鉄分深く沈着。
- 5 灰黄褐色砂 褐灰色粘土を少量、白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり中弱。粘性なし。
- 6 黄褐色砂 白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり中弱。粘性なし。
- 7 褐色砂 径1~3mmで均一。銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまりあり。粘性なし。
- 8 褐灰色粘土 灰黄褐色砂を少量含む。しまり弱。粘性強。
- 9 ぶい黄褐色砂 しまり・粘性なし。
- 10 ぶい黄褐色砂利 径1~5mm。しまり・粘性なし。

- 11 ぶい黄褐色砂利 径1~3cmを主体とし、更に径4~5cmが混入する。しまり・粘性なし。
- 12 ぶい黄褐色砂利 径1~3mmで均一。しまり・粘性なし。
- 13 礫 径1~3cmを主とし、所々に径0.5~1cm、径5~6cmの小礫が混入する。しまり・粘性なし。
- 14 褐色砂利 下半に径3~5cmの小礫を所々に含む。しまり・粘性なし。
- 15 ぶい黄褐色砂 鉄分層薄。
- 16 黄褐色土 褐灰色粘土との互層。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり・粘性なし。
- 17 暗黄褐色砂 褐灰色粘土との互層。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり・粘性中弱。
- 18 ぶい黄褐色砂 褐灰色粘土を少量含む。しまりなし。粘性中弱。
- 19 灰黄褐色粘土 灰黄褐色砂との互層。白色粒子・銀色粒子・鉄斑を均一に含む。しまり・粘性中弱。
- 20 灰色粘土 鉄斑を均一に含む。しまりあり。粘性強。
- 21 暗灰色粘土 20層よりしまり弱い。
- 22 灰黄褐色粘土 鉄斑を均一に含む。しまりあり。粘性強。
- 23 緑黒色粘土 砂を均一に含む。しまり中弱。粘性強。
- 24 緑黒色粘土 しまり弱。粘性は23層に比し強い。
- 25 暗オリーブ灰色粘土 鉄斑を均一に含む。しまりあり。粘性強。
- 26 暗黄褐色粘土 鉄斑を均一、径2~3cmの小礫をごく微量に含む。しまり・粘性強。
- 27 黄灰色粘土 鉄斑を均一、径3~4cmの小礫を微量に含む。しまり・粘性強。
- 28 灰色粘土 鉄斑を均一に含む。しまり・粘性強。

図 44 F地点2号河川跡 (2)

B, 70.0

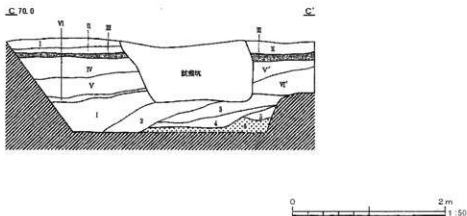


F地点

2号河川跡 (B-B')

- I 暗褐色土 現状土。
- II ぶい黄褐色土 I層と灰色粘質土の混合層。しまり・粘性強。
- III ぶい黄褐色土 II層に鉄分が沈着したものの。
- IV ぶい黄褐色土 ぶい黄褐色砂との混合土。鉄分を大量に含む。しまり・粘性強。
- V ぶい黄褐色土 IV層に近いが、砂は少なく、よりしまり。
- VI 褐色土 V層に近いが、より粗み多く、鉄分を多量に含む。径5mmのローム粒・小礫が点在する。
- 1 黒褐色土 粘質土。砂を多量、ローム粒・小礫を少量含む。しまり・粘性強。





F地点

2号河川跡 (C-C')

- I 埴 褐色土 埋表土。
- II 深い黄褐色土 I層と灰色粘質土の混合層。しまり・粘性強。
- III 深い黄褐色土 II層に鉄分が沈着したもの。
- IV 深い黄褐色土 深い黄褐色土との混合土。鉄分を大量に含む。しまり・粘性強。
- V 深い黄褐色土 IV層と近いが、砂は少なく、よりしまる。
- VI 褐色土 V層と近いが、より黒み強く、鉄分を多量に含む。径5mmのローム粒・小礫が点在する。
- V' 深い黄褐色土 V層より褐色みが強く、しまる。
- VI' 褐色土 VI層より黒み強く、しまる。

- 1 黒褐色土 粘質土。砂を多量、ローム粒・小礫を少量含む。しまり・粘性強。
- 2 黒褐色土 粘質土。径5~30mmの小礫を多量に含む。しまり・粘性強。
- 3 灰黄褐色土 灰黄褐色土と粘土の互層。鉄分を多量に含む。しまり・粘性あり。
- 4 灰黄褐色土 3層に近いが粘土が多い。鉄斑を不規則に含む。しまり・粘性あり。
- 5 灰黄褐色土 3層に近い。鉄分を大量に含む。しまり・粘性あり。
- 6 灰黄褐色砂利 径2~30mmの角礫を主体とする。しまり・粘性なし。

図 45 F地点2号河川跡 (3)

遺物は、埋没土全体から多量の土器が出土している。上層は破片が多く、器面は摩耗している。時期は、若干古い様相のものが見られるが、鬼高式期が主体となる。土器以外では、土製支脚や土鍾が出土している。下層も破片が多いが、底部付近では完形に近い土器が見られる。F地点の小形丸底壺(8)、直口壺(15)、小形甕(16)、壺(20)は、底面直上から出土したものである。時期は、吉ヶ谷式系や五領式期の土器も確認されるが、和泉式期が主体となる。土器以外では、F地点の下層から石製模造品(21)や種子(22・23)が、E地点の粘土層下位から自然木が出土している。また、E地点の河川内土坑からは、五領式期を主体とする土器が多数出土しており、小形丸底壺(51)、高坏(52・53)、受け口状口縁甕(55)、S字状口縁甕(56~59)、複合口縁壺(65)等が見られる。

表 18 1号河川跡上層出土遺物観察表(1)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 坏	口径 (13.0) 底径 丸 器高 4.3	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部はわずかに上がり気味このびる。底面は丸底。	内外面回転ナデ。底面外面回転ナデ。後粗いナデ。	白色粒 内外一灰白色	1/4。上層。
2	坏	口径 (12.6) 底径 一 器高 珠 3.0	口縁部は体部との境に稜を持って内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面ケズリ、内面ナデ。	片岩・チャート 内外一赤褐色 内外一明赤褐色	口縁部~体部片。上層。
3	坏	口径 (12.4) 底径 一 器高 (4.1)	口縁部は体部との境に稜を持って直立する。体部は浅く、底面は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。外面ケズリ、内面ナデ。	黒色粒・褐色粒 内外一橙色	1/4。内外面摩耗。上層。
4	坏	口径 (13.0) 底径 一 器高 (4.1)	口縁部は体部との境に稜を持って外傾する。体部は浅く、底面は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。外面ケズリ、内面艶ナデ。	白色粒・褐色粒 内外一橙色	1/4。内外面摩耗。上層。

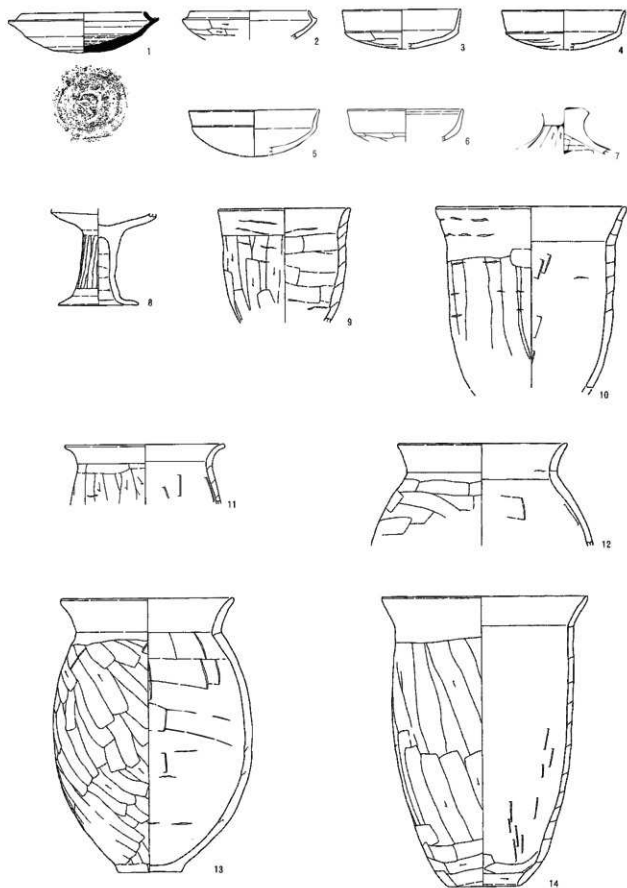


图 46 1号河川跡上層出土遺物(1)

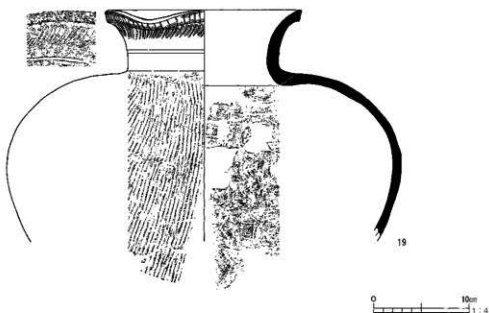
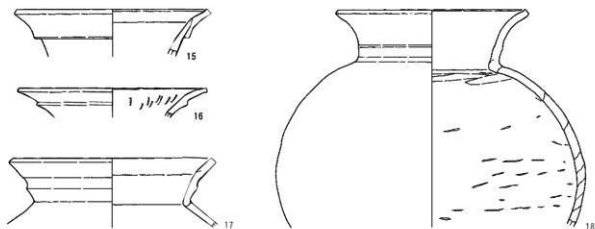


図 47 1号河川跡上層出土遺物(2)

表 19 1号河川跡上層出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	坏	口径 (13.8) 底径 — 器高 (4.9)	口縁部は体部との境に弱い稜を持って外傾する。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面匏ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一橙色	1/5。内外面摩耗。上層。
6	坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 残 3.4	浅い体部から、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部内面に浅い凹縁が巡る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	チャート・黒色粒 内外一赤褐色	1/5。内外面摩耗。中層。
7	高坏	口径 — 底径 — 器高 残 34.9	脚柱部は外反して「ハ」字状に広がる。	脚柱部外面ケズリの後上端ヨコナデ、内面匏ナデ。	片岩・チャート 内一に濃い黄褐色 外一に濃い褐色	2/3。上へ中層。
8	高坏	口径 — 底径 8.4 器高 残 10.2	脚柱部は筒状を呈し、脚端部は短く広がる。	環部内外面匏ナデ。脚柱部外面ケズリの後ミガキ、内面匏ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内外一橙色	脚部、外面・環部内面に赤彩の痕跡。上層。
9	小形甕	口径 (14.0) 底径 — 器高 残 12.0	胴部は中位にわずかな膨らみを持つ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。	角閃石・赤褐色粒 内一に濃い橙色 外一に濃い赤褐色	1/2。上層。

表 20 1号河川跡上層出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
10	甗	口径 (20.2) 底径 — 器高 残 19.1	胴部は中位にわずかな膨らみを持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。	角閃石・チャート 外—橙色 内—灰褐色	1/4。上〜中層。
11	甗	口径 17.0 底径 — 器高 残 6.3	胴部は下方へ向かって膨らみを持つ。口縁部は強く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上端ナデ、内面匏ナデ。	片岩・チャート・黒色 内外—にぶい赤褐色	1/2。上層。
12	甗	口径 (18.0) 底径 — 器高 残 10.9	胴部は中位に最大径を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。	チャート・黒色粒 内外—橙色	1/2。上〜中層。
13	甗	口径 (18.4) 底径 (6.7) 器高 29.0	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。底部は台状。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、下端部ナデ、内面匏ナデ。底部内外面ナデ。	片岩・チャート・黒色 内外—にぶい橙色	2/3。上層。
14	大形甗	口径 (21.8) 底径 7.5 器高 30.6	胴部は膨らみを持たない。口縁部は外傾する。孔径 7.0。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後下端部ナデ、内面匏ナデの後下端ケズリ。	片岩・チャート・黒色 内外—橙色	2/3。上層。
15	壺	口径 (20.8) 底径 — 器高 残 5.0	口縁部は外反し口唇部に平坦面を持つ。複合口縁。	口縁部内外面ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内外—明赤褐色	口縁部片。上層。
16	壺	口径 (20.0) 底径 — 器高 残 3.0	口縁部は中位に段を有して外反する。口唇部に平坦面を持つ。	口縁部外面ヨコナデ、内面匏ナデ。	白色粒・黒色粒 内—明赤褐色 外—にぶい橙色	口縁部片。上〜中層。
17	壺	口径 (21.8) 底径 — 器高 残 7.3	口縁部は中位に段を有して外反する。口唇部に平坦面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。	白色粒・赤褐色粒 内外—橙色	1/3。上層。
18	壺	口径 (20.4) 底径 — 器高 残 23.0	胴部は張り、中位に最大径を持つ。口縁部は下位に弱い段を持って外反する。口唇部は平坦面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面匏ナデ。	角閃石・白色粒・赤褐色粒 内—にぶい橙色 外—橙色	2/3。上〜中層。
19	須恵器甗	口径 (20.7) 底径 — 器高 残 24.6	胴部は張り、上〜中位に最大径を持つ。口縁部は直立し、上位で外反する。中位に凹線が1条走る。口唇部に平坦面を持つ。	口縁部外面櫛歯状工具による押引文の後ナデ、内面凹線ナデ。胴部外面平行タタキ、一部擬格子タタキ、内面同心円の当て具痕の後ナデ。	白色粒 内外—灰色	2/3。上層。
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)		備考	
20	石	—	長さ: 4.4、幅: 4.0、厚さ: 1.0、重さ: 24.20。片岩。 写真のみ掲載。		完形。 上層。	
21	石	—	長さ: 11.9、幅: 4.5、厚さ: 2.4、重さ: 176.34。片岩。 写真のみ掲載。		完形。 上層。	

表 21 1号河川跡下層出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
22	ミニチュア	口径 5.4 底径 3.0 器高 3.7	手捏成形。体部から口縁部に立かけて弱い膨らみを持つ立ち上がる。底部は上り底。	口縁部外面ヨコナデの後指角底。体部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。内面指ナデ。	角閃石・白色粒・赤褐色粒 内外—にぶい黄褐色	口縁部一部欠損。最下層。
23	坏	口径 11.8 底径 4.3 器高 4.6	体部から口縁部にかけて内側気味に開き、口縁部上端でわずかに外傾する。底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面匏ナデ。底部外面ナデ、内面匏ナデ。	チャート・黒色粒 内外—にぶい赤褐色	口縁部1/2欠損。中〜下層。
24	坏	口径 (11.6) 底径 — 器高 5.9	体部は丸みを持ち、口縁部は外反して、短く立ち上がる。底部は丸底。輪積み痕厚縁。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面匏ナデ。	チャート・黒色粒 内外—暗灰黄色	1/2。中層。

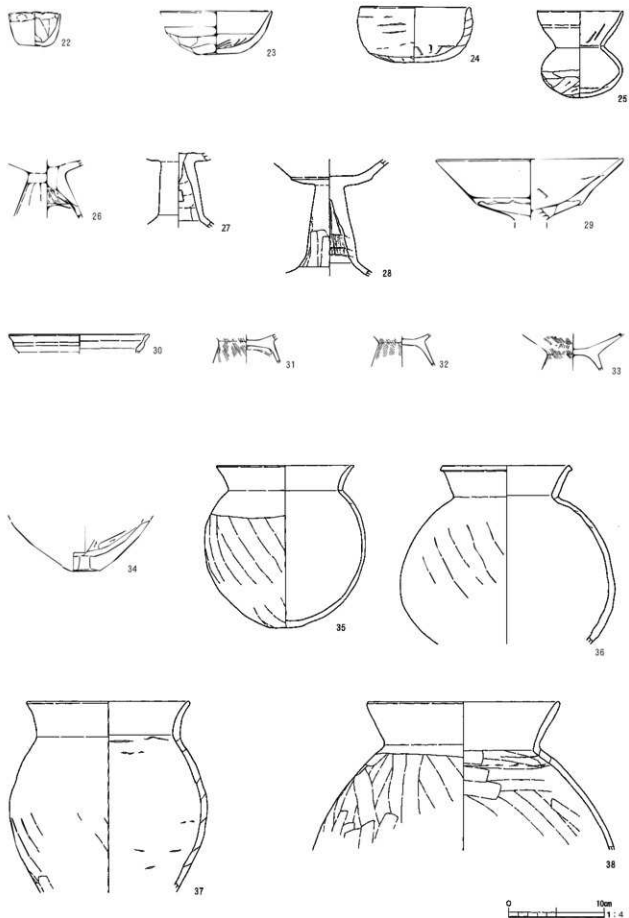


图 48 1号河川跡下層出土遺物(1)

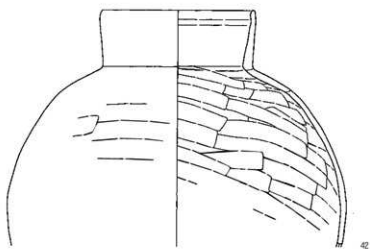
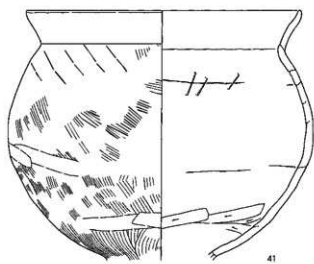
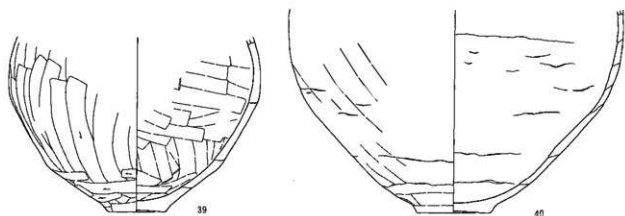


图 49 1号河川跡下層出土遺物(2)

表 22 1号河川跡下層出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
25	小形丸底甕	口径 9.0 底径 9.0 器高 9.2	胴部は張り、中位に最大径を持つ。口縁部は上半で弱く内側に膨らみながら開く。口縁部中に凹線が巡る。	口縁部外面ヨコナデ、内面鑑ナデ。胴部外面上位ナデ・下位ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	角閃石・チャート・角閃石 内外一にぶい赤褐色	3/4。最下層。
26	高坏	口径 -- 底径 -- 器高 残 6.2	脚柱部は下方へ広がる。	脚柱部外面ナデの後上端ヨコナデ、内面ナデの後下位ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい赤褐色	1/2。下層。
27	高坏	口径 -- 底径 -- 器高 残 7.8	脚柱部は膨らみを持たない。	脚柱部外面ナデ、内面鑑ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内一にぶい褐色 外一にぶい橙褐色	2/3。中層。
28	高坏	口径 -- 底径 -- 器高 残 12.3	口縁部は坏部との境に弱い後を持つて開く。脚柱部は下位にわずかな膨らみを持つ。	坏部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面鑑り目の後ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内外一にぶい橙褐色	2/3。中層。
29	高坏	口径 19.8 底径 -- 器高 残 6.5	口縁部は坏部との境にわずかな段を持ち、直線的に開く。口縁部と坏部との接合部の調整は粗い。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデ、内面鑑ナデ。	角閃石・チャート 内一にぶい褐色 外一にぶい赤褐色	4/5。最下層。
30	台付甕	口径 (14.8) 底径 -- 器高 残 2.0	口縁部は別れたS字状を呈し、器厚は厚い。	口縁部内外ヨコナデ。	チャート 内外一灰黄褐色	口縁部片。中層。
31	台付甕	口径 -- 底径 -- 器高 残 3.1	台部は「ハ」字状に開く。	台部外面ハケの後ナデ、内面鑑ナデ。	チャート・黒色粒 内一にぶい黄色 外一にぶい黄褐色	1/2。一括。
32	台付甕	口径 -- 底径 -- 器高 残 3.4	台部は「ハ」字状に開く。	台部外面ハケの後ナデ、内面鑑ナデ。	片岩・チャート 内一黄灰色 外一灰黄色	1/2。下層。
33	台付甕	口径 -- 底径 -- 器高 残 3.8	台部は「ハ」字状に開く。	胴部下位～台部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。	チャート・黒色粒 内一にぶい黄褐色 外一灰黄褐色	1/3。一括。
34	瓶	口径 -- 底径 3.2 器高 残 5.2	底部は上げ底で単孔を有する。孔径 1.2。	胴部内外面ケズリ。底部内面ナデ。	黒色粒 内外一褐色	2/3。外面摩耗。下層。
35	甕	口径 14.4 底径 3.0 器高 17.2	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面鑑ナデの後上位ヨコナデ、内面ナデ。底部内外面ナデ。	チャート・黒色粒 内一にぶい赤褐色 外一褐色	4/5。内面摩耗。下層。
36	甕	口径 (13.4) 底径 -- 器高 残 18.9	胴部は張り、中～下位に最大径を持つ。口縁部は外傾する。口唇部は平ら面を持ち、外方へつまみ出す。	口縁部内外ヨコナデ。胴部内外面鑑ナデ。	角閃石・チャート 内一にぶい褐色 外一褐色	3/4。内面胴部上位に黒斑。内外外面摩耗。下層。
37	甕	口径 (17.4) 底径 -- 器高 残 20.2	胴部は張り、中～下位に最大径を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面鑑ナデ。	粗粒チャート・片岩 内一にぶい褐色 外一にぶい黄褐色	1/2。内外面摩耗。下層。
38	甕	口径 (20.4) 底径 -- 器高 残 15.7	胴部は張る。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面鑑ナデ。	白色粒 内一灰赤色 外一明赤褐色	2/3。下層。
39	甕	口径 -- 底径 6.0 器高 残 18.5	胴部は中位に最大径を持つ。底部は台状。	胴部外面ケズリの後下端部ナデ、内面鑑ナデ。底部外面ナデ、内面鑑ナデ。	チャート・黒色粒 内外一にぶい赤褐色	1/3。最下層。
40	甕	口径 -- 底径 7.8 器高 残 21.4	胴部は中位に最大径を持つ。底部は台状。	胴部内外面鑑ナデ。底部内外面ナデ。	粗粒チャート・片岩 内外一灰黄褐色	1/3。内外面摩耗。中層。

表 23 1号河川跡下層出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
41	甕	口径 29.0 底径 - 器高 残 26.5	胴部は張り、中位に最大径を持つ。口縁部は外傾し、上位で直立する。	口縁部外面部分的なハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ハケの後籠ナデ、内面籠ナデの後下ケズリ。	チャート・黒色粒・赤 1/2。中層。褐色粒 内一赤褐色 外一ぶい橙色	
42	壺	口径 (16.0) 底径 - 器高 残 25.0	胴部は張り、中位に最大径を持つ。口縁部は直立し、上部でわずかに内彎する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面籠ナデ。	白色粒 内一にぶい赤褐色 外一にぶい橙色	1/3。下層。

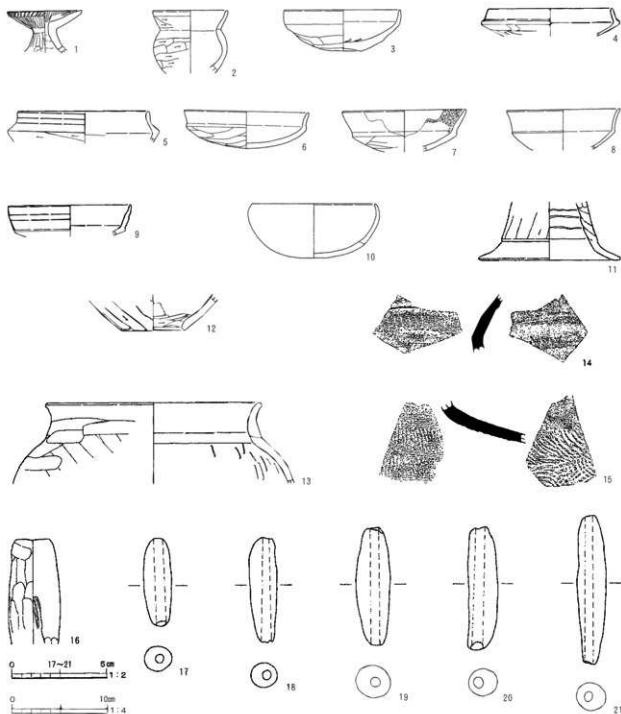


図 50 E地点2号河川跡上層出土遺物

表 24 E地点 2号河川跡上層出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	器台	口径 7.8 底径 — 器高 残 4.4	器受部は直線的に外傾し、口唇部に平坦面を持つ。脚部中に位に円孔を3ヶ所穿つ。孔径(0.9)。	口唇部外面木口状工具による列点状の突起文。器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキの後接合部ナデ、内面鑑ナデ。	チャート 内一灰褐色 外一褐灰色	1/2。上層。
2	小形丸底蓋	口径 (7.9) 底径 — 器高 残 6.6	胴部は中位に膨らみを持つ。口縁部は外傾し、上位で内彎気味に立ち上がる。	口縁部外面ケズリの後上端ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部内外一黒褐色外面ケズリの後上位ナデ、内面ナデ。	片岩・白色粒 内一灰褐色 外一黒褐色	1/5。上へ中層。
3	坏	口径 (12.4) 底径 3.2 器高 4.3	膨らみを持たない体部から、口縁部は直立する。底部は上げ底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ・下半ケズリ、内面鑑ナデ。底部外面ナデ。	チャート・黒色粒 内一にぶい橙色 外一にぶい黄褐色	2/3。上層。
4	坏	口径 (13.0) 底径 — 器高 残 2.9	口縁部は体部との境に稜を持って内傾する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面鑑ナデ。	白色粒・黒色粒 内一にぶい赤褐色 外一灰褐色	口縁部～体部片。上層。
5	坏	口径 (14.0) 底径 — 器高 残 3.3	口縁部は体部との境に稜を持ち、強く反って内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩・チャート・黒色粒 内一にぶい赤褐色 内外一灰黄褐色	口縁部～体部片。上層。
6	坏	口径 (13.0) 底径 4.0 器高 4.0	口縁部は体部との境に稜を持って外反する。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	白色粒・赤褐色粒 内一にぶい赤褐色 外一灰黄褐色	1/2。上層。
7	坏	口径 (13.0) 底径 — 器高 残 4.4	口縁部は体部との境に稜を持って外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	チャート 内一にぶい赤褐色 外一明赤褐色	1/5。口縁部内面に煤附着。上層。
8	坏	口径 (12.0) 底径 — 器高 残 4.2	口縁部は体部との境に稜を持って外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外一褐色	1/3。内外面摩擦。一括。
9	坏	口径 (13.0) 底径 — 器高 残 3.3	口縁部は体部との境に稜を持って、彎曲気味に外傾する。中位に浅い凹線が巡る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面鑑ナデ。	チャート・黒色粒 内一にぶい黄褐色 外一にぶい黄褐色	口縁部～体部片。上層。
10	坏	口径 (13.0) 底径 — 器高 5.8	丸みを帯びる体部から、口縁部が内彎する。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	黒色粒 内外一褐色	2/3。内外面摩擦。上へ中層。
11	高坏	口径 — 底径 (15.0) 器高 残 6.2	脚柱部と脚端部との境に段差を持つ。	脚柱部外面ケズリ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩・チャート・角閃石 内外一にぶい赤褐色	1/4。外面に粘土附着。上層。
12	瓶	口径 — 底径 (6.8) 器高 残 3.8	胴部は上方に開く。孔径(6.0)。	胴部外面ケズリ、内面鑑ナデ下端ケズリ。	片岩・チャート・角閃石 内外一褐色	1/4。上層。
13	甕	口径 (22.8) 底径 — 器高 残 8.6	口縁部は内傾気味に立ち上がり、上位で外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部ケズリ、内面鑑ナデ。	角閃石・チャート 内外一にぶい赤褐色	1/5。上層。
14	須恵器壺	口径 — 底径 — 器高 —	ロコウ成形。	胴部外面櫛歯状工具による波状文、内面回転ナデ。	白色粒 内一灰色 外一黄灰色	頸部片。上層。
15	須恵器壺	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	胴部外面平行タタキの後カキメ、内面同心円の当て具痕。	白色粒 内外一灰色	肩部片。上へ中層。
16	土製支脚	上径 3.6 下径 残 11.1	円筒状。下面から半ばまで孔が穿たれる。孔径最大値 2.3×1.8。	外面ケズリの後ナデ、内面絞目。	片岩・チャート 内一にぶい赤褐色 外一褐色	下端部欠失。上面に粘土附着。上層。
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)		備考	
17	土製品	土 鏝	長さ: 4.7、幅: 1.6、孔径: 0.5、重さ: 8.39。 胎土: 片岩・白色粒。色調: 灰褐色。		完形。上層。	

表 25 E地点2号河川跡上層出土遺物観察表(2)

No	種類	器種	法 量 (cm・g)	備考
18	土製品	土 鉢	長さ:6.5、幅:1.5、孔径:0.45、重さ:10.15。 胎土:片岩・チャート。色調:橙色。	完形。 上層。
19	土製品	土 鉢	長さ:6.2、幅:1.9、孔径:0.45、重さ:19.41。 胎土:片岩・白色粒。色調:にぶい褐色。	端部欠損。 上層。
20	土製品	土 鉢	長さ:6.5、幅:1.6、孔径:0.5、重さ:14.35。 胎土:片岩・白色粒。色調:明赤褐色。	完形。 上層。
21	土製品	土 鉢	長さ:7.9、幅:1.5、孔径:0.4、重さ:15.72。 胎土:片岩・チャート。色調:橙色。	完形。 上層。
22	石	—	長さ:10.7、幅:4.5、厚さ:3.4、重さ:246.08。輝石安山岩。 写真のみ掲載。	完形。 上〜中層。
23	石	—	長さ:11.4、幅:5.2、厚さ:4.0、重さ:363.12。輝石安山岩。 写真のみ掲載。	完形。 上〜中層。
24	石	—	長さ:17.1、幅:7.3、厚さ:6.9、重さ:1159.28。チャート。 写真のみ掲載。	完形。 上〜中層。

表 26 E地点2号河川跡下層出土遺物観察表(1)

No.	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
25	ミニチュア	口径 6.5 底径 3.0 器高 4.6	手捏成形。口縁部は整っていない。底部は厚く平底。	外面指ナデ、下半ケズリ、底部ナデ。内面指ナデ。	チャート・黒色粒・暗赤褐色粒 内外にぶい黄褐色	口縁部一部欠損。下層。
26	ミニチュア	口径 (7.0) 底径 (3.1) 器高 4.4	手捏成形。口縁部は整っていない。底部は厚く平底。	外面ナデ、下半ケズリ、底部ナデ。内面指ナデ。	角閃石・チャート・暗赤褐色粒 内外にぶい黄褐色	1/4。下層。
27	ミニチュア	口径 (7.4) 底径 3.3 器高 3.2	体前は膨らみを持つ。底部は平底。	外面ナデ、底部木葉痕、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 外一褐色	2/3。下層。
28	坏	口径 (13.2) 底径 — 器高 6.4	体前は膨らみを持ち、口縁部は短く外傾する。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面施ナデ。	角閃石・白色粒 内外一橙色	1/3。下層。
29	小形丸底煮	口径 — 底径 — 器高 残 6.6	胴部は張り、中位に最大径を持つ。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部内外面ナデ。	角閃石・チャート・赤褐色粒 内外一明赤褐色	1/3。内外面摩耗。中〜下層。
30	器台	口径 — 底径 (11.6) 器高 残 4.2	脚部は外反して開く。上位に円孔を穿つ。孔径(1.1)。	脚部外面ハケの後ナデ、内面ケズリ。	チャート・黒色粒 内外にぶい黄褐色	1/4。一括。
31	高坏	口径 — 底径 (16.0) 器高 残 2.7	脚端部は湾曲気味に開き、円孔を穿つ。孔径0.9。	脚端部内外面ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内外にぶい橙色	脚部片。一括。
32	高坏	口径 — 底径 (11.4) 器高 残 8.3	脚柱部は下方へ開く。脚端部は外反して広がる。	坏部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面紋り目。脚端部内外面ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内一ぶい橙色 外一褐色	口縁部欠失。下層。
33	高坏	口径 — 底径 — 器高 残 8.0	坏部は口縁部との境に稜を持つ。脚柱部は上〜中位に膨らみを持ち、脚端部は広がる。	坏部外面施ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内外一明赤褐色	1/2。坏部内面摩耗。下層。
34	高坏	口径 — 底径 — 器高 残 9.4	脚柱部は中〜下位に膨らみを持つ。	脚柱部外面ナデ、内面指ナデ。	白色粒 内一褐色 外一明赤褐色	4/5。脚柱部外面摩耗。中〜下層。
35	高坏	口径 — 底径 — 器高 残 7.8	脚柱部は中位にわずかな膨らみを持つ。中位に円孔が2カ所穿たれる。孔径1.9。	脚柱部外面ナデ、内面上位紋り目・中位施ナデ・下位ヨコナデ。	白色粒 内一ぶい赤褐色 外一明赤褐色	4/5。脚柱部外面摩耗。下層。
36	高坏	口径 — 底径 — 器高 残 10.5	直線的な脚柱部。	脚柱部外面ケズリ目の後一部ナデ、内面紋り目の後ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩・チャート・黒色粒 内外一褐色	2/3。下層。

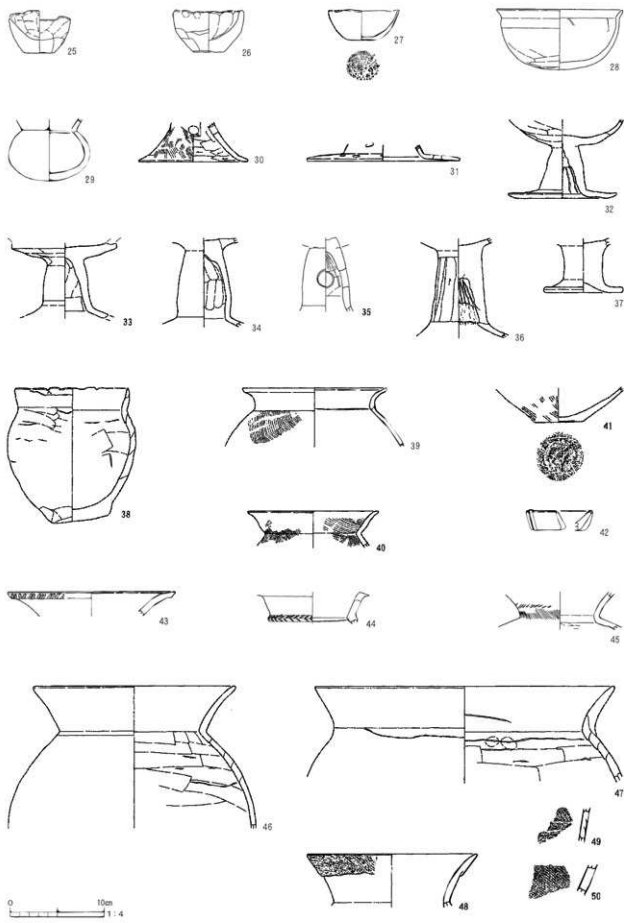


图 51 E地点 2号河川跡下層出土遺物

表 27 E 地点 2 号河川跡下層出土遺物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
37	高 坏	口径 — 底径 (8.4) 器高 残 5.8	脚柱部は中実。脚端部は外反して広がる。	脚柱部外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	チャート・白色粒 内外外にぶい橙色	2/3。脚柱部摩耗。下層。
38	小形甕	口径 (12.0) 底径 5.8 器高 14.9	胴部は上位に膨らみを持つ。口縁部は内彎して立ち上がり、上端部は整わない。底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面惣ナデ。底部内外面ナデ。	チャート・黒色粒 内一にぶい褐色 外一灰褐色	1/3。中層。
39	甕	口径 (15.2) 底径 — 器高 残 6.2	口縁部は強く外反する。口唇部は平坦面を持つ。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。	チャート・黒色粒 内一明赤褐色 外一にぶい橙色	1/4。内面摩耗。一括。
40	甕	口径 (13.8) 底径 — 器高 残 3.8	口縁部は内湾気味に立ち上がり、上半で外反する。中位よりやや下に最大肥厚を持つ。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ後一部ナデ。	チャート・黒色粒 内一にぶい赤褐色 外一黒褐色	口縁部へ胴部片。下層。
41	甕	口径 — 底径 5.3 器高 残 3.6	胴部は上方へ開き、底部は平底。	胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部外面圧痕。	片岩・角閃石 内一橙色 外一黒色	1/3。内面摩耗。中～下層。
42	壺	口径 — 底径 — 器高 —		口縁部内外面ヨコナデ。外面に棒状浮文を貼付。	チャート・黒色粒 内外一赤褐色	口縁部片。中層。
43	壺	口径 (17.8) 底径 — 器高 残 2.5	口縁部は外反し、口唇部に平坦面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。口唇部外面木口状工具による刺突文か。	チャート・白色粒 内外一明赤褐色	口縁部片。内外面摩耗。下層。
44	壺	口径 — 底径 — 器高 残 3.3	二重口縁。	口縁部内外面ヨコナデ。陸帯部柳倉状工具による刺突文。	チャート・黒色粒 内一橙色 外一にぶい橙色	口縁部片。内外面摩耗。外面に赤彩の痕跡。中層。
45	壺	口径 — 底径 — 器高 残 4.0	口縁部は外反する。	口縁部外面上位ヨコナデ・下位ハケの後ナデ。内面ヨコナデ。胴部内外面惣ナデ。	黒色粒・白色粒・赤褐色粒 内外外にぶい橙色	1/3。中～下層。
46	甕	口径 21.4 底径 — 器高 残 15.0	口縁部は外反する。胴部は膨らみを持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面惣ナデ。	角閃石・白色粒・茶褐色粒 褐色粒 内外一明赤褐色	1/2。口縁部煤付着。内外面摩耗。下層。
47	甕	口径 (31.6) 底径 — 器高 残 10.2	口縁部は外反する。胴部は膨らみを持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面惣ナデ・指押しさえ。	角閃石・茶褐色粒 内一黒褐色 外一にぶい橙色	1/4。外面摩耗。下層。
48	壺	口径 (18.0) 底径 — 器高 残 5.6	口縁部は外反する。折り返し口縁。	口縁部外面上位無節R縄文・下位ナデ、内面ナデ。	チャート・茶褐色粒 内一にぶい橙色 外一にぶい黄褐色	口縁部片。内外面に赤彩の痕跡。下層。
49	弥生土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —		口縁部外面単節縄文、内面ナデ。	チャート・橙褐色 内一灰黄褐色 外一にぶい赤褐色	口縁部片。下層。
50	弥生土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —		胴部外面単節縄文、内面惣ナデ。	チャート・黒色粒 内一褐色 外一灰黄褐色	胴部片。中～下層。

表 28 E 地点 2 号河川跡内土坑出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
51	小形丸底甕	口径 — 底径 — 器高 残 5.9	胴部は張り、中位に最大径を持つ。底部は丸底。	胴部外面上半ナデ・下半～底部木口状工具ナデ、内面上位ヨコナデ・中～下位指ナデ。	白色粒 内外外にぶい黄褐色	口縁部欠失。
52	高 坏	口径 — 底径 (13.0) 器高 残 6.2	脚柱部は「ハ」字状に開き、脚端部は外反気味に短く広がる。	脚柱部外面惣ナデ、内面ハケの後ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩・チャート・黒色粒 内外一橙色	3/4。

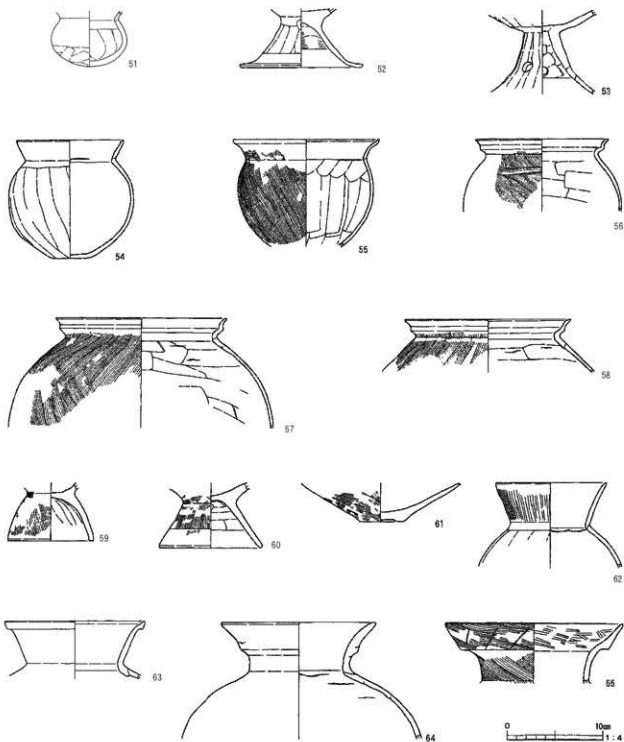


図 52 E地点 2号河川跡内土坑出土遺物

表 29 E地点 2号河川跡内土坑出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
53	高環	口径 — 底径 — 器高 残 9.0	口縁部は直線的に開く。脚柱部は外反して開き、中に円孔を3カ所穿つ。孔径1.2。	坏部内外面篋ナデ。脚柱部外面篋ナデ、内面篋ナデの後ヨコナデ。	角閃石・赤褐色粒 内—黒色 外—橙色	口縁・脚端部欠失。
54	小形甕	口径 11.3 底径 4.0 器高 12.4	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外傾する。底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面篋ナデ。底部内外面ナデ。	チャート 内外—明赤褐色	4/5。外面黒斑。

表 30 E地点 2号河川跡内土坑出土土物観察表(3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
55	甕	口径 (15.4) 底径 — 器高 残 11.2	胴部は中位に膨らみを持つ。 口縁部は外反し、口唇部に平坦面を持つ。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ハケの後一部ナデ、内面鑑ナデ。	チャート 内一灰黄色 外一灰黄褐色	1/2。外面煤付着。
56	台付甕	口径 (14.0) 底径 — 器高 残 7.6	胴部は中位に膨らみを持つ。 口縁部はS字状を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ・肩部横線、内面鑑ナデ。	チャート 内一灰黄色 外一灰黄褐色	口縁部～胴部片。
57	台付甕	口径 (18.0) 底径 — 器高 残 11.5	胴部は中位に膨らみを持つ。 口縁部はS字状を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面鑑ナデ。	チャート・褐色粒 内一灰黄色 外一灰黄褐色	1/3。
58	台付甕	口径 (17.4) 底径 — 器高 残 5.6	胴部は張り、口縁部はS字状を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面鑑ナデ。	チャート 内一灰黄色 外一灰黄褐色	1/3。
59	台付甕	口径 — 底径 (9.1) 器高 残 6.2	台部は内彎する。	台部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。	チャート・黒色粒 内外一赤色	1/2。
60	台付甕	口径 — 底径 11.0 器高 残 6.8	台部は「ハ」字状に開く。	台部外面ハケの後ナデ・下位ヨコナデ、内面ナデの後下位ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内一黒色 外一にふい橙褐色	2/3。底部内面煤付着。
61	甕	口径 4.5 底径 4.5 器高 残 4.1	胴部は上方へ大きく開き、底部は上げ底。	胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部内外面ナデ。	片岩・チャート 内外一にふい黄褐色	1/5。内面摩耗。
62	壺	口径 11.6 底径 — 器高 残 9.0	胴部は膨らみ、口縁部は直線的に外傾する。	口縁部外面ミガキ、内面ヨコナデ。胴部上位外面鑑ナデ、内面ナデ。	チャート・黒色粒 内外一にふい橙褐色	2/3。
63	壺	口径 (14.8) 底径 — 器高 残 6.1	口縁部は外反し、口唇部は平坦面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	チャート・白色粒 内一明赤褐色 外一橙褐色	口縁部片。内外面摩耗。
64	壺	口径 16.2 底径 — 器高 残 12.3	口縁部は外反し、中位に段を持つ。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	チャート 内一黒褐色 外一橙褐色	2/3。内外面摩耗。
65	壺	口径 18.7 底径 — 器高 残 6.3	口縁部は直立し、上位で外反する。複合口縁。	口縁部外面ナデの後ハケ・上半篋状工具による斜文、内面上半ミガキ・下半ナデ。	片岩・チャート・黒色粒 内外一褐色	1/6。内外面摩耗。

表 31 F地点 2号河川跡上層出土土物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (12.6) 底径 — 器高 (3.6)	口縁部は体部との境にわずかな稜を持ち、内彎気味に開く。外面上端に浅い凹線が巡る。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外一橙褐色	1/4。一括。
2	坏	口径 (11.2) 底径 — 器高 (4.0)	口縁部は体部との境に稜を持ち、外反して立ち上がる。底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	角閃石・チャート 内外一橙褐色	1/2。内外面摩耗。一括。
3	高坏	口径 — 底径 — 器高 残 10.2	脚柱部は中位にわずかな膨らみを持ち、下方へ開く。	坏部内面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面鑑ナデ。	角閃石・白色粒・暗赤褐色粒 内外一橙褐色	2/3。外面摩耗。上層。
4	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 残 3.7	体部は膨らみを持ち、中位に円孔を穿つ。孔径 (1.5)。	内外面回転ナデ。胴部外面横位辻線の区画内に、櫛齒状工具による刺突文。	白色粒 内外一灰色	胴部片。上層。

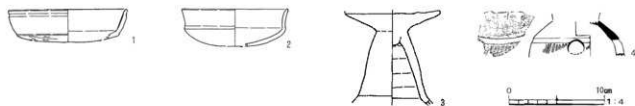


図 53 F地点2号河川跡上層出土遺物

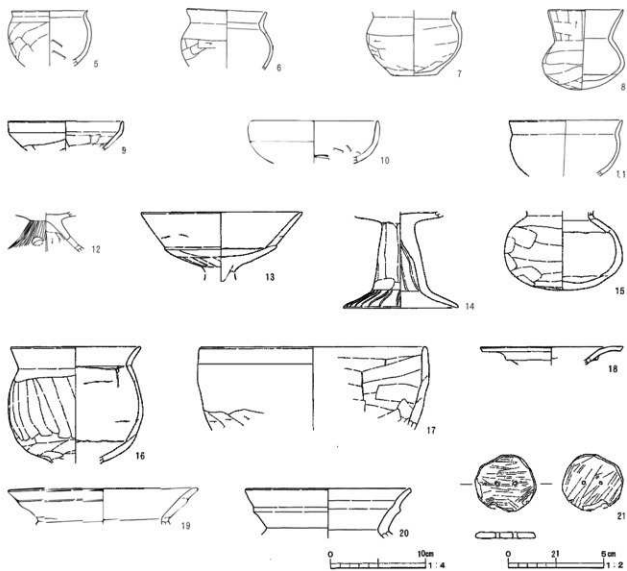


図 54 F地点2号河川跡下層出土遺物

表 32 F地点2号河川跡下層出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	埴	口径 (8.0) 底径 - 器高 残5.8	上位に膨らみを持つ体部から、口縁部は短く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面箇ナデ。	白色粒 内外一にぶい赤褐色	1/3。下層。
6	鉢	口径 (8.4) 底径 - 器高 残6.1	体部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上位ヨコナデ、内面ナデ。	石英・黒色粒・白色粒 内外一にぶい赤褐色	1/5。下層。

表 33 F 地点 2 号河川跡下層出土土物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
7	鉢	口径 — 口径 4.6 器高 残 6.9	上部1〜4位に膨らみを持つ。底部は平底で、わずかに丸みを帯びる。	体部外面ケズリの後上位ヨコナデ、内面箇ナデ。底部外面ナデ、内面箇ナデ。	石英・角閃石・白色1/3。下層。粒 内外一赤褐色	
8	小形丸底壺	口径 7.8 口径 — 器高 8.1	口縁部は上位が内彎気味に外傾する。胴部は張り出し、中位に最大径を持つ。底部は丸底。	口縁部外面ケズリの後粗いナデ、内面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	黒色粒・白色粒・赤赤形。下層。褐色粒 内外一灰黄褐色	
9	坏	口径 (12.2) 口径 — 器高 残 3.1	直線的に開く体部から、口縁部は直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面箇ナデ。	チャート 内外一ぶい褐色	1/4。下層。
10	坏	口径 (13.6) 口径 — 器高 残 4.5	膨らみを持つ体部から、口縁部は内彎気味に直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面箇ナデ。	角閃石・白色粒 内一明赤褐色 外一にぶい赤褐色	1/4。下層。
11	坏	口径 (11.8) 口径 — 器高 残 5.9	上位に膨らみを持つ体部から、口縁部は外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	石英・チャート・角閃石 内外一明赤褐色	1/3。内外両層。下層。
12	高坏	口径 — 口径 — 器高 残 4.2	脚柱部はゆるやかに外反して開き、4位に円孔を3ヶ所穿つ。口径1.2。	脚柱部外面ミガキ、内面ケズリの後上方ナデ。	角閃石・白色粒 内一にぶい黄褐色 外一にぶい褐色	2/3。下層。
13	高坏	口径 (17.0) 口径 — 器高 残 7.3	口縁部は坏部との境に稜を持ち、直線的に外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面箇ナデ。	白色粒 内外一にぶい赤褐色	2/3。下層。
14	高坏	口径 — 口径 12.2 器高 残 10.2	脚柱部は中位にわずかな膨らみを持ち、脚端部は内彎気味に広がる。	脚柱部外面箇ナデ、内面紋目。脚端部外面ヨコナデの後ミガキ、内面ヨコナデ。	白色粒 内外一にぶい褐色	3/4。下層。
15	壺	口径 — 口径 — 器高 残 8.4	胴部は中位が張り出す。底部は丸底。	胴部内外面箇ナデ。底部外面ケズリ、内面箇ナデ。	黒色粒・白色粒・赤褐色粒 内外一にぶい黄褐色	3/4。下層。
16	小形甕	口径 13.7 口径 — 器高 残 12.3	胴部は中〜下位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面箇ナデ。	白色粒 内一にぶい赤褐色 外一にぶい褐色	底部欠失。下層。
17	鉢	口径 (23.8) 口径 — 器高 残 8.8	外傾気味に開く体部から、口縁部は直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後1位ナデ、内面箇ナデ。	石英・チャート・黒色1/5。下層。内粒 内外一にぶい赤褐色	
18	壺	口径 (15.0) 口径 — 器高 残 1.9	口縁部は中位に段を有し、外反する。胴部は平坦面を持つ。二重口縁。	口縁部内外面ヨコナデ。	白色粒 内外一褐色	口縁部片。下層。
19	壺	口径 (20.1) 口径 — 器高 残 3.8	口縁部は上位にわずかな段を有し、外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。	チャート・赤褐色粒 内外一にぶい赤褐色	口縁部片。下層。
20	壺	口径 17.5 口径 — 器高 残 5.3	口縁部は中位に段を有し、外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。	角閃石・白色粒・赤2/3。下層。褐色粒 内外一にぶい褐色	
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)		備考	
21	石製模造品	有孔円板	長径:3.2、短径:2.9、孔径:0.15〜0.2、厚さ:0.3、残重:6.62。滑石。穿孔2ヶ所。上下面研磨。		一部欠損。下層。	
22	種子	—	長さ:2.2、幅:1.9、厚さ:1.5、重さ:3.18。写真のみ掲載。		下層。	
23	種子	—	長さ:3.9、幅:2.5、厚さ:2.4、重さ:8.40。桃か。写真のみ掲載。		下層。	

3 遺構外出土遺物 (図 55、表 34 / 写真図版 26)

遺構確認時に出土した遺物について掲載する。今回の調査では細紋土器は確認されなかった。弥生

土器は、吉ヶ谷式系の甕片（1）がある。古墳時代は前期～後期まで確認され、土師器、須恵器、土製品が出土している。土師器は器台、高坏、S字状口縁台付甕、二重口縁壺、瓶、甕、台付甕（2～13）が、須恵器は樽型甕、甕（14・15）が、土製品は土錐（16）が見られる。石器は、F地点で凹石（17）が1点出土している。

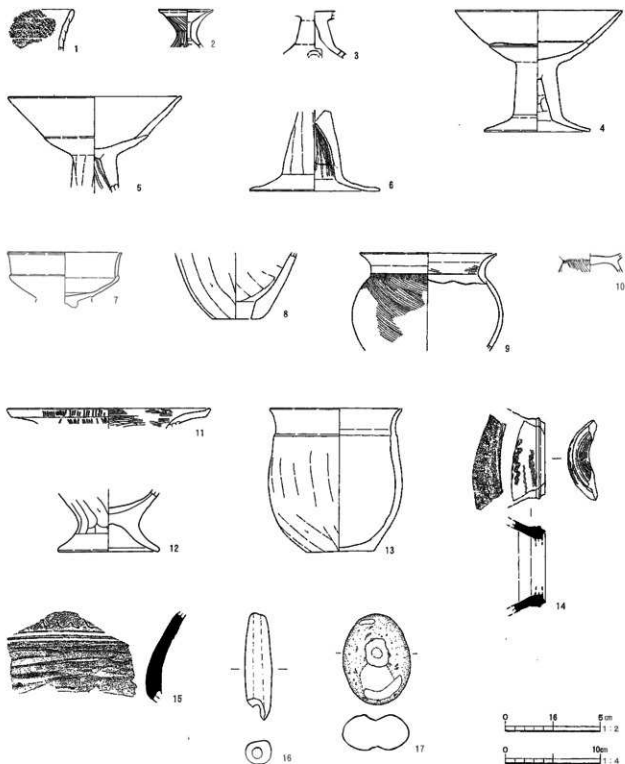


図55 遺構外出土遺物

表 34 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	弥生土器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		口縁部外面単筋縄文、内面篋ナデ。	チャート・褐色粒 内—にぶい黄褐色 外—にぶい黄褐色	口縁部片。E地点。
2	器台	口径 (5.7) 底径 — 器高 残 3.9	器受部は逆「ハ」字状に開く。口唇部は平坦面を持ち、上方へつまみ上げる。脚部に孔あり。	器受部外面上位ヨコナデ・中～下位ミガキ、内面ヨコナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。	チャート・角閃石 内外—にぶい赤褐色	2/3。E地点。
3	高坏	口径 — 底径 — 器高 残 4.9	脚柱部は開き、脚端部に円孔を穿つ。孔径 (0.6)。	脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	チャート・黒色粒・褐色粒 内外—橙	2/3。内外面摩耗。E地点。
4	高坏	口径 (17.6) 底径 (11.2) 器高 12.8	口縁部は坏部との境にわずかな稜を持ち、直線的に開く。脚柱部は下方へやや開き、脚端部は外反気味に広がる。	口縁部外面ヨコナデ、内面篋ナデ。坏部外面ナデ、内面篋ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	チャート・角閃石・茶褐色粒 内—にぶい褐色 外—褐色	2/3。E地点。
5	高坏	口径 18.4 底径 — 器高 残 10.2	口縁部は坏部との境にわずかな稜を持ち、直線的に開く。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面絞目。	片岩・チャート・角閃石 内外—赤褐色	2/3。E地点。
6	高坏	口径 — 底径 13.8 器高 残 8.4	脚柱部は中～下位に膨らみを持ち、裾部は外反気味に広がる。	脚柱部外面ナデ、内面絞目。脚端部内外面ヨコナデ。	白色粒・黒色粒・赤褐色粒 内外—にぶい赤褐色	2/3。E地点。
7	高坏	口径 (12.0) 底径 — 器高 残 5.9	口縁部は坏部との境に稜を持ち、外反気味に直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面篋ナデ。	白色粒・茶褐色粒 内外—明赤褐色	2/3。E地点。
8	小形甕	口径 — 底径 5.0 器高 残 7.1	胴部は直線的に開く。底部は厚く、単孔。孔径 3.0。	胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。	チャート・黒色粒 内—赤褐色 外—橙	2/3。外面摩耗。E地点。
9	台付甕	口径 (14.4) 底径 — 器高 残 10.3	口縁部は強く外反する。胴部は中位に最大径を持つ。	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篋ナデ。	チャート・褐色粒 内—にぶい赤褐色 外—赤褐色	1/3。E地点。
10	台付甕	口径 — 底径 — 器高 残 2.0	台部は「ハ」字状に開く。	台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。	チャート・褐色粒 内—にぶい橙 外—にぶい赤褐色	台部 1/4。内外面摩耗。F地点。
11	壺	口径 (21.6) 底径 — 器高 残 2.1	口縁部は外反する。口唇部は平坦面を持ち、上方につまみ上げる。二重口縁。	口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ。口唇部外面櫛歯状工具による列点状の刺突文。外—明褐色	チャート・赤褐色粒 内—にぶい橙 外—明褐色	口縁部片。F地点。
12	台付甕	口径 — 底径 (10.8) 器高 残 6.6	台部は「ハ」字状に開く。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部外面ヨコナデ、内面篋ナデ。下端ヨコナデ。	白色粒・黒色粒・茶褐色粒 内外—明赤褐色	1/3。内外面摩耗。F地点。
13	小形甕	口径 (14.0) 底径 7.2 器高 15.2	口縁部は胴部との境に弱い稜を持ち、外反する。胴部は中～下位にわずかな膨らみを持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後篋ナデ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。	チャート・黒色粒・茶褐色粒 内外—明赤褐色	1/2。内外面摩耗。E地点。
14	須恵器 樽型 甕	口径 — 底径 — 器高 —		内外面回転ナデ。外面櫛歯状工具による波状文。	白色粒 内外—灰色	小片。E地点。
15	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面櫛歯状工具による波状文・凹線2条廻る。内面回転ナデ。	チャート 内外—灰色	口縁部片。E地点。
No.	種類	器種	法量 (cm・g)			備考
16	土製品	土 鉢	残長: 5.7、幅: 1.4、厚さ: 0.5、残重: 10.04。 胎土: 白色粒。色調: 橙色。			端部欠損。 E地点。
17	石器	凹 石	長さ: 9.5、幅: 7.1、厚さ: 3.5、重さ: 160.82。角閃石安山岩。磨面あり。			一部欠損。 F地点。

V 自然科学分析

河川跡堆積物中の珪藻化石群集

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

珪藻は、10～500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

川越田遺跡の調査では、五領式期～鬼高式期（古墳前期～後期）の遺物を含む河川跡が検出された。ここでは、河川跡堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積物の堆積環境について検討した。

2. 試料の処理方法

試料は、E地点1号河川跡①が2層準、E地点2号河川跡②が4層準、E地点2号河川跡③が2層準、F地点2号河川跡④が4層準である（図37の分析試料①～③、図43の分析試料④、表35）。分析試料は、各河川跡の底部付近を中心に採取した。なお、E地区1号河川跡①の底部には粗粒砂が堆積している。

これらの試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

表 35 分析した遺構および地点と堆積物の特徴

試料No.	採取地点	層位	色調	堆積物
1	E地点1号河川跡①	6層	暗褐色 (2.5Y 3/3)	砂混じり粘土
2	E地点1号河川跡①	9層	暗褐色 (2.5Y 3/1)	砂質粘土
3	E地点2号河川跡②	6層下部	黄灰色 (2.5Y 4/1)	粘土
4	E地点2号河川跡②	7層	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	粘土質砂
5	F地点2号河川跡②	13層	暗灰黄色 (2.5Y 4/2)	砂質粘土
6	E地点2号河川跡②	27層下部	緑黒色 (5G 2/1)	粘土質砂
7	E地点2号河川跡③	4層	黒灰色 (N 3/)	粘土
8	E地点2号河川跡③	5層	黒色 (2.5Y 2/1)	粘土
9	F地点2号河川跡④	21層	黒褐色 (5Y2/2)	粘土
10	F地点2号河川跡④	24層上部	黒色 (2.5GY 2/1)	粘土
11	F地点2号河川跡④	24層中部	黒色 (2.5GY 2/)	粘土
12	F地点2号河川跡④	24層下部	黒色 (10Y 2/1)	粘土

(1) 湿潤重量約1g程度取り出し、秤量した後ピーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入し

プレパラートを作成した。

作成したプレパラートは顕微鏡下 1000 倍で観察し、珪藻化石 200 個体以上について同定・計数した。なお、珪藻化石が少ない試料は、プレパラート全面について精査した。

3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。以下に、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[上流性河川指標種群 (J)]: 上流部の溪谷部に集中して出現する種群である。これらには *Achnanthes* 属が多く含まれるが、鼓面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群 (K)]: 中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群 (L)]: 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)]: 水深が約 1.5m 以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢地指標種群 (N)]: 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優劣な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)]: 水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態では優劣な出現が見られる種群である。

[高層層原指標種群 (P)]: 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)]: 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

4. 珪藻化石の特徴とその堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、淡水種が 119 分類群 29 属 89 種 3 亜種検出された。これらの珪藻化石は、淡水種が 5 環境指標種群に分類された（表 36 および表 37）。以下に、各遺構の各地点堆積物中の珪藻化石群集の特徴について述べる（図 56）。

[E 地点 1 号河川跡①]

いずれも沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis*、中～下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula*、湖沼沼沢地指標種群の *Melosira italica*、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が出現する。

上位の6層は、中～下流性河川指標種群を伴うが下位層の再堆積の影響と思われることから、ジメジメとした陸域を伴う水深のある沼沢湿地環境である。一方、下位の9層は、流れのある、水深のある沼沢湿地環境と推定される。

[E地点2号河川跡②]

6層下部は、指標種群の出現は低いが、沼沢湿地付着生指標種群の *Stauroneis phoeniceneron* などが出現していることから、沼沢湿地環境と推定される。

7層と13層は、砂質堆積物であるため含まれる珪藻化石は少ないが、沼沢湿地付着生指標種群や湖沼沼沢湿地指標種群の *Melosira italica* が出現していることからやや水深のある沼沢湿地環境と推定される。

27層下部は、中～下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula*、*Meridion circulae* var. *constrictum* などが特徴的に出現することから、流れのある環境が推定される。

[E地点2号河川跡③]

いずれも沼沢湿地付着生指標種群の *Eunotia pectinalis* var. *minor* や *Pinnularia viridis* などが特徴的に出現することから、沼沢湿地環境が推定される。なお、中～下流性河川指標種群が出現していることから、多少流れのある環境と考えられる。

[F地点2号河川跡④]

21層は、沼沢湿地付着生指標種群の *Stauroneis phoeniceneron* や *Eunotia pectinalis* var. *minor* などが特徴的に多く出現することから、沼沢湿地環境が推定される。

24層上部は、中～下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula*、湖沼沼沢湿地指標種群の *Melosira italica*、沼沢湿地付着生指標種群が出現することから、水深のある沼沢湿地環境と推定される。

24層中部と下部は、指標種群の出現は低いが、沼沢湿地付着生指標種群の *Neidium iridis* などが出現していることから、沼沢湿地環境と推定される。

表 36 各地点堆積物とその堆積環境

試料No.	採取地点	層位	主たる環境	随伴する環境	堆積物
1	E地点1号河川跡①	6層	水深のある沼沢湿地	ジメジメとした陸地	砂混じり粘土
2	E地点1号河川跡①	9層	水深のある沼沢湿地	流水	砂質粘土
3	E地点2号河川跡②	6層下部	沼沢湿地	流水	粘土
4	E地点2号河川跡②	7層	水深のある沼沢湿地	流水	粘土質砂
5	E地点2号河川跡②	13層	水深のある沼沢湿地	流水	砂質粘土
6	E地点2号河川跡②	27層下部	流水	—	粘土質砂
7	E地点2号河川跡③	4層	沼沢湿地	流水	粘土
8	E地点2号河川跡③	5層	沼沢湿地	流水	粘土
9	F地点2号河川跡④	21層	沼沢湿地	—	粘土
10	F地点2号河川跡④	24層上部	水深のある沼沢湿地	流水	粘土
11	F地点2号河川跡④	24層中部	沼沢湿地	—	粘土
12	F地点2号河川跡④	24層下部	沼沢湿地	—	粘土

5. まとめ

1号および2号河川跡の堆積物中の珪藻化石群集を調べ、各河川跡の堆積環境について検討した。

なお、1号河川跡は北西から南東方向に向かって流下し、2号河川跡は南西から北東方向に向かって流下する。

E地区の1号河川跡は、堆積初期には流れのある、かつ水深のある沼沢湿地環境であったが、後にジメジメとした陸域を伴う水深のある沼沢湿地環境に変化している。

一方、2号河川跡では、上流域の②および③では、流れを伴う沼沢湿地環境であるが、下流部の④では一時的に流れが見られるものの沼沢湿地環境であった。

なお、珪藻化石組成から見ると、1号河川跡の6層および9層は、2号河川跡②の13層あるいは④の24層上部に対応する可能性がある。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88．

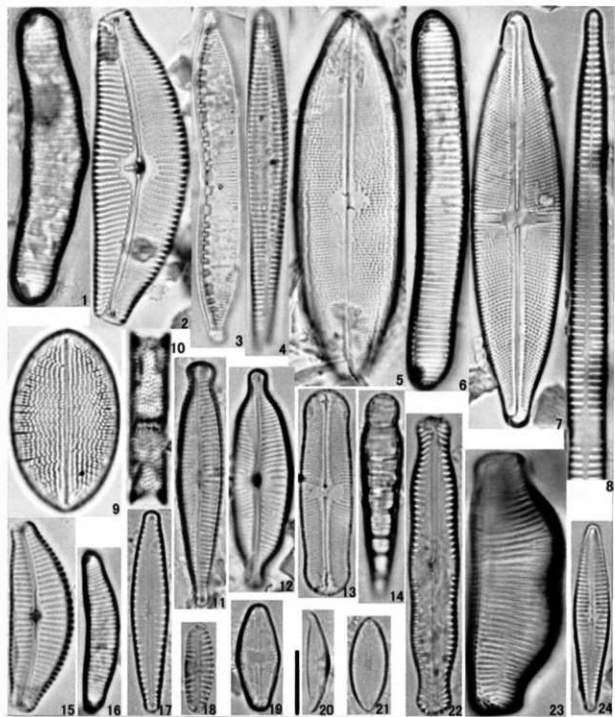
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設

表 37 珪藻化石産出表 (種群は、主に安藤 (1980) に従う)

分 類 群	種群	1号河川群					2号河川群							
		①		②			③		④					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
<i>Achnanthes inflata</i>	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>A. laeocolata</i>	K	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>A. minutissima</i>	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1
<i>A. spp.</i>	?	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Actinella brasiliensis</i>	O	-	2	-	1	-	2	-	-	-	-	5	-	-
<i>Amphora antiana</i>	Q	3	1	-	1	2	-	-	-	1	-	1	-	-
<i>A. ovalis</i>	W	15	9	12	2	1	5	3	6	13	7	7	9	-
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Bacillaria parvula</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i>	W	-	1	2	-	-	1	4	1	4	-	-	-	4
<i>C. laeta</i>	W	1	2	1	3	2	2	1	-	-	-	-	-	-
<i>C. schroederi</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. sillicula</i>	W	-	-	10	-	2	-	6	4	6	-	9	4	-
<i>Cocconeis placentula</i>	W	3	9	1	-	-	3	-	4	2	20	3	4	-
<i>Cyclotella comata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Cymatopleura solea</i>	W	9	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	2	-
<i>Cymbella aspera</i>	W	2	2	-	2	4	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>C. cuspidata</i>	W	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. ehrenbergii</i>	C	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. nitida</i>	W	3	3	3	4	2	2	8	-	-	8	-	1	-
<i>C. naviculiformis</i>	O	-	-	2	-	1	1	1	7	-	1	-	-	-
<i>C. sinuata</i>	K	-	-	-	1	1	6	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. tumida</i>	W	3	11	6	5	3	2	1	3	1	6	2	2	-
<i>C. turgidula</i>	K	7	20	7	2	-	1	2	1	1	13	-	3	-
<i>C. spp.</i>	?	1	-	-	-	5	2	2	1	1	6	-	-	-
<i>Diplooneis elliptica</i>	W	3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>D. ovalis</i>	W	-	-	1	-	-	-	3	3	-	-	2	3	-
<i>D. subovata</i>	W	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>D. yatakensis</i>	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>D. spp.</i>	?	2	1	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Epithemia adnata</i>	W	1	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>E. turgida</i>	W	1	3	-	2	1	1	-	-	3	-	1	-	-
<i>E. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Eumetia formica</i>	W	-	3	-	4	3	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>E. lunaris</i>	W	-	-	-	-	-	-	4	-	-	3	-	-	-
<i>E. pectinatis var. minor</i>	O	-	1	-	-	2	-	4	20	6	3	1	1	-
<i>E. pectinatis var. undulata</i>	O	1	2	2	-	-	1	3	2	-	2	-	-	-
<i>E. praeceps</i>	W	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>E. praeceps var. bidens</i>	O	1	4	-	1	4	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>E. spp.</i>	?	6	3	3	1	2	2	8	8	1	7	1	3	-
<i>Fragilaria brevistriata</i>	N	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i>	W	-	-	-	-	-	3	1	-	2	-	1	-	-
<i>F. spp.</i>	?	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	1	2	-
<i>G. sugur</i>	W	-	1	1	-	-	-	1	1	3	-	-	-	-
<i>G. constrictum</i>	W	-	-	2	1	-	-	1	-	2	1	3	1	-
<i>G. gracile</i>	O	1	-	1	-	-	-	6	1	8	2	-	4	-
<i>G. parvulum</i>	W	1	1	10	-	-	2	15	12	4	5	4	4	-
<i>G. sphaerophorum</i>	W	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
<i>G. spp.</i>	?	4	10	1	5	4	13	8	8	4	12	2	5	-
<i>Oryzopsis spp.</i>	W	-	2	11	6	-	4	5	2	8	2	6	6	7
<i>Pantazschia amphioxys</i>	M	37	28	5	10	10	11	17	7	16	25	6	7	-
<i>Melosira italica</i>	Q	9	18	-	2	11	-	2	-	-	15	-	-	-
<i>M. roseana</i>	K	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>M. varians</i>	W	-	-	-	-	-	1	2	-	1	-	-	-	-
<i>M. spp.</i>	?	3	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
<i>Meridion circule var. constrictum</i>	K	-	1	-	-	1	4	1	-	-	4	-	-	-
<i>Navicula americana</i>	W	-	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	2	-
<i>N. bacillum</i>	W	1	1	8	-	-	2	6	5	2	15	13	-	-
<i>N. confusata</i>	W	-	-	3	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-
<i>N. cuspidata</i>	W	-	-	-	1	1	-	5	-	-	1	-	-	-
<i>N. elgineensis</i>	O	1	-	-	-	-	2	4	3	-	2	4	-	-
<i>N. guppertiana</i>	W	-	3	-	1	1	1	1	-	-	1	1	-	-
<i>N. mutica</i>	Q	1	4	1	-	-	2	6	2	-	3	2	1	-
<i>N. pupula</i>	W	-	-	1	-	-	-	1	2	1	-	4	8	-

表 38 珪藻化石産出表 (種群は、主に安藤 (1980) に従う)

分 類 群	種群	1号河川跡						2号河川跡					
		①		②		③		④		⑤		⑥	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
<i>Navicula radiosa</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. viridula</i>	W	1	2	9	-	-	-	5	6	4	1	18	11
<i>N. sp-1</i>	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	?	3	1	4	-	1	-	2	2	4	2	-	6
<i>Naidium affine</i>	W	-	2	-	-	-	-	4	1	-	-	4	4
<i>N. alpinum</i>	Q	3	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. bisulcatum</i>	Q	2	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
<i>N. iris</i>	O	4	1	2	2	-	1	1	5	20	2	16	9
<i>N. spp.</i>	?	-	-	2	-	-	-	2	-	-	-	2	3
<i>Nitzschia amphibia</i>	W	-	-	-	-	-	-	3	5	-	-	2	2
<i>N. parvula</i>	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>N. triplionella</i>	W	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	4	8
<i>N. spp.</i>	?	-	2	4	-	-	-	3	4	6	5	3	4
<i>Pinnularia acropora</i>	O	1	2	2	-	1	1	2	2	-	1	2	2
<i>P. borealis</i>	Q	1	1	-	-	3	5	-	1	-	2	3	1
<i>P. brandi</i>	W	-	-	-	-	1	-	1	1	-	3	-	-
<i>P. cardinaliculus</i>	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. divergens</i>	W	-	1	2	-	-	-	1	1	1	2	1	1
<i>P. gibba</i>	O	-	-	2	-	-	-	4	-	1	4	1	-
<i>P. heaptera</i>	W	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-
<i>P. interrupta</i>	W	1	-	-	-	-	-	3	-	1	-	1	-
<i>P. minor</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. microtauron</i>	W	-	-	-	1	-	-	3	3	-	-	4	1
<i>P. nodosa</i>	O	-	2	-	-	-	-	2	4	-	-	-	-
<i>P. subcapitata</i>	Q	1	-	1	-	-	-	1	2	-	1	3	2
<i>P. viridis</i>	O	4	4	1	2	1	-	6	7	12	9	-	2
<i>P. spp.</i>	?	13	18	18	4	4	4	24	7	18	1	9	15
<i>Stephalodia gibba</i>	W	-	1	3	-	2	-	2	-	3	-	2	1
<i>S. gibberula</i>	W	2	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>S. quilonbergiana</i>	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-
<i>S. spp.</i>	?	1	-	1	1	-	-	-	-	2	3	2	5
<i>Stauroneis acuta</i>	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	O	3	-	9	1	-	-	1	10	2	28	3	4
<i>S. smithi</i>	W	-	-	2	-	-	-	1	-	6	1	2	4
<i>S. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-
<i>Surirella angusta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	2	-
<i>S. sinuta</i>	W	-	1	-	-	-	-	1	1	7	-	-	2
<i>S. ovata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>S. tenera</i>	W	-	-	1	-	-	-	-	-	3	1	1	-
<i>S. spp.</i>	?	2	1	4	-	1	-	4	1	3	1	2	2
<i>Synedra inaequalis</i>	X	1	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
<i>S. rufipes</i>	W	-	-	-	-	-	-	2	2	2	1	-	1
<i>S. rufa</i>	W	9	15	8	12	6	-	2	3	2	4	14	3
<i>Tabellaria fenestrata</i>	O	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ulkovoa</i>	?	8	5	10	4	3	2	7	6	1	10	7	8
中～下流性河川 (K)		8	21	7	3	2	12	4	3	1	20	1	3
湖沼浮遊生 (M)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
湖沼沿岸沼地 (N)		9	18	-	2	11	-	3	-	-	15	-	-
沼沢湿地付着生 (O)		19	22	21	9	15	7	40	59	82	26	40	25
陸 域 (Q)		48	35	10	11	15	17	24	12	18	21	16	11
広 布 (W)		49	77	97	49	27	23	84	84	77	78	104	108
淡水不定・不明種 (?)		46	46	60	22	21	17	65	40	47	52	33	57
珪 藻 総 数		179	219	195	87	91	89	220	198	225	212	200	204



図版 堆積物中の珪藻化石 (スケール: 10 μ m)

1. *Eunotia pectinalis* var. *undulata*(No.7) 2. *Cymbella tumida*(No.6) 3. *Hantzschia amphioxys*(No.2)
4. *Actinella brasiliensis*(No.2) 5. *Neidium iridis*(No.11) 6. *Eunotia formica*(No.4)
7. *Stauroneis phenicenteron*(No.9) 8. *Synedra ulna*(No.1) 9. *Cocconeis placentula*(No.10)
10. *Melosira italica*(No.1) 11. *Gomphonema sphaerophorum*(No.8) 12. *Cymbella naviculiformis*(No.9)
13. *Navicula bacillum*(No.11) 14. *Meridion circularae* var. *constrictum*(No.5) 15. *Cymbella turgidula*(No.10)
16. *Eunotia pectinalis* var. *minor*(No.10) 17. *Gomphonema parvulum*(No.7) 18. *Cymbella sinuata*(No.6)
19. *Navicula mutica*(No.7) 20. *Amphora montana*(No.9) 21. *Navicula confervacea*(No.7)
22. *Pinnularia nodosa*(No.8) 23. *Eunotia praerupta* var. *bidens*(No.5) 24. *Gomphonema gracile*(No.11)

1. はじめに

川越田遺跡において行われた発掘調査で河川跡が検出され、時期は出土遺物（五領式期～鬼高式期）から古墳時代前期～後期と考えられている。この河川跡より当時の環境を検討する目的で土壌試料が採取された。以下にはこの土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺における古墳時代前期～後期の古植生について検討した。

2. 試料と分析方法

試料はE地点の1号河川跡①（2試料：試料番号1, 2）、同地点の2号河川跡②（4試料：試料番号3～6）、同地点③（2試料：試料番号7, 8）およびF地点の2号河川跡④（4試料：試料番号9～12）の4地点より採取された12試料である（図37の分析試料①～③、図43の分析試料④）。各試料について簡単に記すと、おおむね粘土や砂質粘土、粘土質砂であるが、詳細については珪藻分析の節を参照して頂きたい。花粉分析はこれら12試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約4～7g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間煮沸する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間煮沸）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉41、草本花粉34、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計79である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表39に、それらの分布を図57に示した。この分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とした、また草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。さらにこれら表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。なお、試料4, 6, 10の3試料については樹木花粉の検出数が少なく、分布図として示すことが出来なかった。以下に各地点の特徴について示す。

1号河川跡①（試料1, 2）ではコナラ属コナラ亜属が最も多く、試料1では約39%の出現率を示している。次いで約10～15%のコナラ属アカガシ亜属が多く、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、クマシダ属-アサダ属が10%前後を示している。草本類ではイネ科が30%前後の出現率を示して最も多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属が続いている。その他では試料1においてツクサ属が、試料2ではツリフネソウ属が1%を越えて得られている。

2号河川跡②（試料3～6）ではやはり出現率30～40%を示すコナラ亜属が最も多く得られている。次いでアカガシ亜属が多く、試料3では20%を越えて検出されている。その他ではスギとクマシダ属-アサダ属が10%前後を、ヒノキ類やシイノキ属が5%前後を、またトチノキ属が約3%の出現率を示している。草本類ではやはりイネ科が最も多く観察されている。次いでカヤツリグサ科やヨモ

表 39 産出花粉化石一覽表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹木													
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	1	-	-	1	1	-	1	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	1	6	-	-	1	-	7	11	5	-	19	4
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	7	-	-	4	-	9	2	5	-	18	6
トウヒ属	<i>Picea</i>	1	2	-	-	1	-	3	-	4	-	1	-
マツ属(総管葉近属)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-
マツ属(総管葉近属)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	1	3	-	-	1	-	1	1	-	-	1	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	1	-	-	3	-	1	1	2	-	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	3	3	-	-	-	-	2	2	1	-	-	-
スギ	<i>Crypsomeria japonica</i> D. Don	31	20	14	2	12	2	26	39	61	8	20	17
イナイレ-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	12	29	5	-	7	-	37	29	27	2	38	8
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サウダシミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	5	7	1	-	2	-	3	3	1	-	-	1
クマシダ属-アサギ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	14	20	23	-	6	5	13	20	12	1	15	11
カバノキ属	<i>Betula</i>	3	3	4	-	2	-	1	2	1	-	2	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	5	3	-	-	3	-	1	2	-	2	-	-
フナ	<i>Fagus crenata</i> Blum.	1	6	4	-	-	-	4	1	4	1	5	1
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	1	1	1	-	2	2	2	3	-	3	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	79	42	91	5	34	10	55	50	44	12	24	19
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	19	31	51	3	21	2	16	41	25	3	34	19
クリ	<i>Castanea</i>	6	3	2	-	-	-	1	-	-	-	1	2
シノキ属	<i>Castanopsis</i>	8	2	11	-	2	-	2	1	2	1	1	-
ニレ属-ウヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	7	10	2	1	4	-	6	3	4	3	13	4
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	4	1	1	1	2	1	-	2	2	2	2
ワサヅクラ属	<i>Eugenia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カウカ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ズクリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ウルシ属	<i>Elaeagnus</i>	1	1	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ニシキヤ科	Calantracaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	-	-	2	-	-	1	-	1	-	-
トナリノキ属	<i>Aesculus</i>	3	1	-	3	-	3	-	-	-	-	1	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-
マタタビ属近縁種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
コウヤボク属	<i>Araliaceae</i>	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2
ミズナギ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ワニトコ属近縁種	cf. <i>Sambucus</i>	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ガヤズミ属	<i>Viburnum</i>	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
草本													
ガヤ草	<i>Typha</i>	2	-	1	-	-	1	5	3	2	1	1	4
ヒルムシロ属	<i>Polypogon</i>	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	55	-	-	-	1	29	7	42	-	18
スズナ属-ミズオオバコ属	<i>Blyxa - Ottelia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	15
イネ科	<i>Gramineae</i>	142	161	159	11	65	22	244	142	334	10	255	963
イカリガサ科	<i>Cyperaceae</i>	45	104	15	3	24	4	47	52	21	6	3	28
ツクシ科	<i>Comelina</i>	6	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	7
イボタノキ属	<i>Anemone</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Menochoria</i>	-	-	2	-	-	-	21	2	21	1	15	7
ユリ科	<i>Liliaceae</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヒゴソバナ属	<i>Lycoris</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
クワ科	<i>Noraceae</i>	9	9	10	1	5	-	83	22	15	-	9	28
ギンギク属	<i>Rumex</i>	4	1	1	-	-	-	2	-	-	-	1	-
ササユギ属-ウナギツカミ属	<i>Polypogon</i> sect. <i>Panicaria-Rhinocaulon</i>	5	3	4	1	6	1	11	12	21	6	3	23
アカサ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	16	1	16	2	3	1	11	17	28	1	6	5
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	5	2	5	-	1	2	3	-	1	-	-	-
カラムシ科	<i>Thalictrum</i>	2	4	-	6	-	1	-	2	-	-	-	1
トコバネ科近縁種	cf. <i>Aconitum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other <i>Ranunculaceae</i>	-	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	10	3	7	1	4	2	13	2	6	1	1	1
ユキノシタ科近縁種	cf. <i>Saxifragaceae</i>	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	4	10	1	-	-	-	1	2	1	-	1	1
マメ科	<i>Leguminosae</i>	6	6	2	-	1	4	2	-	1	-	1	4
トウダイグサ科	<i>Euphorbiaceae</i>	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ツリフネ科	<i>Impatiens</i>	3	7	1	3	-	-	1	4	-	-	1	-
フナギ属	<i>Myriophyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	13	6	2	-	3	-	-	1	2	-	-	-
ネナシカズラ属近縁種	cf. <i>Cuscuta</i>	-	-	-	-	-	38	-	1	1	-	10	1
ヘンリカズラ属	<i>Pandera</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
オモミシロ属	<i>Pulsatilla</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ゴキウツ属-アマチャヅル属	<i>Actinostemum - Gynostemma</i>	1	-	-	-	-	-	-	28	-	-	-	26
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	119	24	43	12	26	12	21	65	18	16	69	82
他のキク亜科	other <i>Tubuliflorae</i>	5	2	3	-	3	-	5	3	3	4	4	5
タンポポ科	<i>Liguliflorae</i>	4	1	5	2	-	-	6	2	10	3	4	6
シダ植物													
ゼンマイ科	<i>Osmundaceae</i>	4	1	-	2	1	-	-	1	1	2	1	-
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
蘇鉄類孢子	<i>Monolete spore</i>	15	3	6	18	12	6	10	3	5	18	3	4
三葉型孢子	<i>Trilete spore</i>	4	1	-	-	3	-	-	-	-	2	1	3
顕木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	203	208	222	12	113	26	308	213	210	28	206	105
顕木花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	493	344	333	45	143	91	514	368	513	45	507	470
シダ植物孢子	<i>Sporae</i>	24	5	6	20	16	6	10	4	7	22	9	7
花粉+孢子總数	<i>Total Pollen & Spores</i>	627	557	561	74	272	123	732	585	730	95	722	582
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	33	22	11	8	9	3	19	5	8	10	21	9

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す

樹木花粉

草本花粉・シダ植物胞子

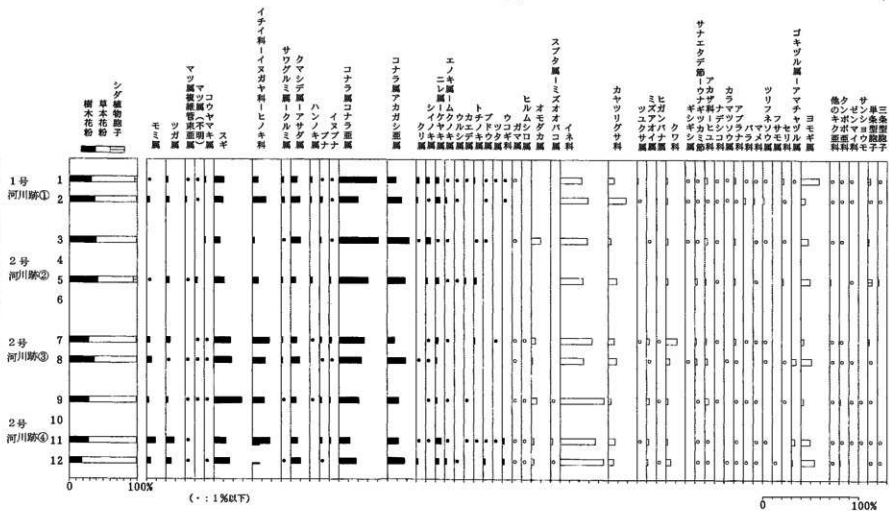


図 57 河川跡の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉總数、草本花粉・胞子は花粉・胞子總数を基として百分率で算出した)

ギ属が多く検出されているが、出現率は10%に達していない。そうした中、試料3では水生植物のオモダカ属(抽水植物)が約10%を示しており、花粉生産量の小さいオモダカ属としては高い出現率を示している。

2号河川跡③(試料7, 8)においてもコナラ亜属が最も多く検出されているが、出現率は20~30%と、①, ②と比べるとやや低くなっている。反対にスギやヒノキ類は15~20%に出現率を上げている。その他ではクマシデ属-アサダ属が5~10%を示し、モミ属が5%前後得られている。草本類ではやはりイネ科が最も多く得られている。その他では草本類に入れたクワ科が試料7で、ヨモギ属が試料8でそれぞれ10%を超える出現率を示している。またゴキツル属-アマチャヅル属が試料8でやや多く得られており、オモダカ属は両試料で、また同じ抽水植物のミズアオイ属が試料8で1%を越えて観察されている。

2号河川跡④(試料9~12)ではスギ、ヒノキ類、コナラ亜属、アカガシ亜属の優占で特徴づけられ、スギは試料9で30%近い出現率を示している。その他ではモミ属、ツガ属、クマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属が5%前後得られている。草本類では本地点においてもイネ科が最も多く、試料9, 12では45%を越えている。次いで10%前後のヨモギ属が多く、カヤツリグサ科が5%前後検出されている。またオモダカ属やミズアオイ属が分布図で示した3試料において1%を超える出現率を示している。

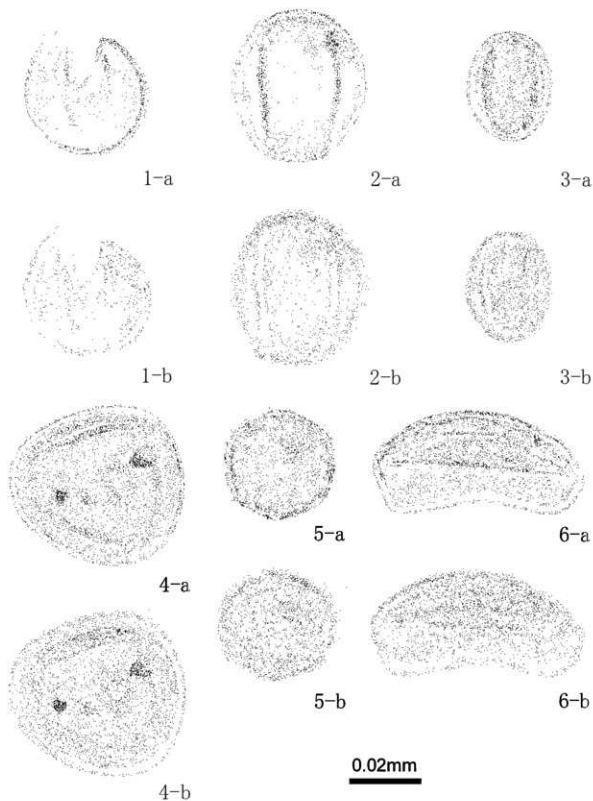
4. 遺跡周辺の古植生

先にも記したが分析試料の時期は出土遺物から古墳時代前期~後期と考えられており、この頃の遺跡周辺丘陵部ではコナラ亜属を主体にクマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属、カエデ属、トチノキ属などの落葉広葉樹林が成立していたとみられる。またアカガシ亜属を中心にシノキ属などを交えた常緑広葉樹林が周辺丘陵の稜線部に林分を広げていたと推測される。さらに丘陵斜面部を中心にスギやヒノキ類の針葉樹林も林分を広げていたとみられる。また、これら森林に交じるように針葉樹のモミ属やツガ属も生育していたことが考えられる。

一方低地部ではイネ科の多産と水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属、スプタ属-ミズオオバコ属が検出されていることから水田稲作が行われていたことが推察される。また試料採取地点が河川跡であることから、この河川の沼沢湿地環境(珪藻分析の節参照)付近にガマ属、ヒルムシロ属、スプタ属-ミズオオバコ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属といった水生植物(抽水植物)が生育していたとみられる。さらに水生シダ植物のサンショウモなども生育していたであろう。またこの河川跡の土手部にはイネ科やカヤツリグサ科、クワ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などが生育していたと推測されよう。

5. おわりに

低地部においてイネ科の多産と水田雑草を含む分類群の検出から、水田稲作の可能性について記したが、これについてはプラント・オパール分析などによる確認作業が必要であろう。



図版 川越田遺跡の花粉化石

- 1 : スギ PLC SS 4433 試料 3
- 2 : コナラ属コナラ亜属 PLC SS 4432 試料 3
- 3 : コナラ属アカガシ亜属 PLC SS 4431 試料 3
- 4 : イネ科 PLC SS 4436 試料 7
- 5 : オモダカ属 PLC SS 4435 試料 7
- 6 : ミズアオイ属 PLC SS 4434 試料 7

VI まとめ

今回の調査では、古墳時代の埋没河川跡と、その両岸に展開する古墳時代前期から後期の集落跡が検出された。ここでは、2条の埋没河川跡について若干の補説を行い、まとめとしたい。

1号河川跡の時期と環境

1号河川跡は北西から南東方向に向かって直線的に走行し、2号河川跡の上流部に合流する。2号河川跡とほぼ直交して合流することから、自然河川ではなく、人為的に開鑿されたものと推定される。埋没状態を観察すると、層位は鉄分凝集層より大きく上・下層に分かれる。下層は砂混じり粘土層で、底面には砂利層が堆積する。出土する遺物は五領式期も見られるが、和泉式期が主体となる。特に砂利層の直上面からは完形の土器が出土する。自然科学分析からは、堆積初期には流れがあり、かつ水深のある沼沢湿地環境であったが、後に「ジメジメ」とした陸地を伴う水深のある沼沢湿地環境に変化しているとの結果が得られた。

上層は粘質土層で、出土遺物は鬼高式期が主体となる。土器は破片で器面が摩耗しているものが多いが、上位層からはある程度の形を保った土器が出土する点が注意される。鉄分凝集層が形成されていることから、一定の水流が存在していたと推測される。

換言すると、1号河川跡は、五領式期に比定されるSD-02を切ることや下層出土遺物から、和泉式期に開鑿されたと考えられる。開鑿により水が流れ込むが、和泉式期の間には埋没が始まる。その後水流によって鉄分凝集層の平坦な川底が形成され、鬼高式期まで一定の水流が存在していたものと推測される。

2号河川跡の時期と環境

2号河川跡はE地点からF地点にかけて検出され、南西から北東方向に流下し、B地点（恋河内、1993）で検出された河川跡へと続く。調査区内において蛇行する様相が見られ、自然河川と考えられる。埋没状態を観察すると、層位は1号河川跡と同様に大きく上・下層に分かれる。下層は粘土層で、底面には砂利層が堆積する。遺物は五領式期～和泉式期の土器が出土している。五領式期の土器が器面の摩耗した破片が多いのに対し、和泉式期の土器は完形もしくは比較的形を保っているものが多い。粘土層は1号河川跡の合流する上流部が黒褐色粘土、下流部が緑黒色粘土と若干の違いが認められる。自然科学分析からは、上流部は流水を伴う沼沢湿地環境、下流部は一時的に流水が見られる沼沢湿地環境という結果が示された。

上層からは鬼高式期の土器が主体となって出土しており、大半が器面の摩耗した破片である。上流部は砂を含む粘質土で、下流部は厚い鉄分凝集層の上に砂利層が堆積している。このような同一河川内における堆積土の差異は、河川内を水流が蛇行して埋没と浸食が繰り返された結果と考えられる。

2号河川跡を大筋で捉えると、五領式期には水流が存在し、和泉式期になると水流はあるものの、地下水位の高い沼地状の土壤が形成されるようになると推測される。その後、鬼高式期まで一定の水流が存在していたものと考えられる。なお、河川跡の立ち上がり付近には土坑が掘り込まれており、中からは五領式期を主体とする土器がまとまって出土している。

河川跡の性格

両河川跡を比較すると、1号河川跡が開鑿されたと推定される和泉式期には、2号河川跡の埋没が

始まり、その水流は五領式期に比べて減少していたものと推測される。このような状況や、両河川跡が鬼高式期まで機能し続けていたと推定されることから、1号河川跡の性格は2号河川跡に用水として水を引き入れるための水路であったと考えられる。和泉式期に2号河川跡で見られる上流部と下流部の差異は、この水路による導水に起因していた可能性もある。

また、1号河川跡を介して2号河川跡へ水を引くには、1号河川跡の北西側に別の河川跡が存在していなければならない。本遺跡の西南西約1.1 kmに位置する堀向・藤塚遺跡(鈴木・徳山他、1995)で検出された埋没河川跡は、現女堀川の古墳時代における旧流路と考えられ、少なくとも和泉式期には低地帯が存在し、鬼高式期には一定の水流があったものと推定されている。この埋没河川跡は蛇行しながら東方向へ流下し、本遺跡の南西約200 mに位置する今井川越田遺跡(瀧瀬、1997)へと続く。さらに今井川越田遺跡から北東方向へ角度を変え、本遺跡の位置する高関付近まで続くことが、馬場整備前の地表面の痕跡から確認されている。おそらく、これが1号河川跡の北西側に存在していた河川跡であったと推定することができるだろう。

まとめ

本遺跡で見られるような古墳時代の自然河川と人為的な水路との関わりは、藤塚遺跡での鬼高期の水路跡と考えられる溝跡や、高縄田遺跡(恋河内、1995)での和泉式期後半以前の用水路と考えられる溝状遺構等、本地域の各所で認められている。自然河川に水路等の人為的な改変を加えて、幹線用水として利用するという方式は、本地域における古墳時代の灌漑形態のひとつとして捉えられている(鈴木、2000)。今回の成果が、この地域における古墳時代の土木工事や灌漑の形態を具体的に明らかにする一助となれば幸いである。

[引用及び主要参考文献]

- 本庄市 1976 『本庄市史 資料編』
磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
恋河内昭彦 1993 『川越田遺跡Ⅱ』児玉町遺跡調査会
恋河内昭彦 1995 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』
埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
恋河内昭彦 1999 『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』埼玉県児玉町教育委員会
恋河内昭彦 2005 『後張遺跡Ⅲ』埼玉県児玉町遺跡調査会
鈴木徳雄 2000 『児玉条里遺跡—八幡山北田地区—』埼玉県児玉町遺跡調査会
鈴木徳雄 2003 『児玉条里遺跡—吉田林堂ノ西地区—』埼玉県児玉町遺跡調査会
鈴木徳雄他 1991 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
鈴木徳雄・徳山寿樹 1995 『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』
埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
瀧瀬芳之 1997 『今井川越田遺跡Ⅲ』財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
徳山寿樹 1996 『藤塚遺跡—B2地点の調査—』埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
徳山寿樹 1998 『金佐奈遺跡Ⅰ—B地点の調査—』埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
徳山寿樹・大熊季広 1999 『金佐奈遺跡Ⅱ—B地点の調査—』埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群—丁田・川越田・梅沢』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
伴瀬宗一 1996 『今井川越田遺跡Ⅱ』財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
増田一裕 1988 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市教育委員会

写 真 图 版



遺跡の位置と周辺の地形（国土地理院、平成12年10月撮影）

写真図版 2



遺跡全景（上が南西）



E地点全景（上が南東）



S1-01 ~ 06 全景（北西から）



SI-01 全景 (南から)



SI-01 カマド全景 (南東から)



SI-01 遺物出土状況 (東から)

写真図版 4



S1-02・06 全景（北西から）



S1-02 遺物出土状況（北から）



S1-02 P3 柱痕確認状況
（北から）



SI-03 遺物出土状況（北西から）



SI-04・05 全景（北西から）



SI-07 全景（北から）

写真図版 8



1・2号河川跡全景
(南西から)



1号河川跡全景 (南東から)



1号河川跡土層断面 (南東から)



1号河川跡土層断面（北から）



1号河川跡
遺物出土状況（東から）



1号河川跡
遺物出土状況 近景（東から）



1号河川跡
遺物出土状況 近景（東から）



1号河川跡
遺物出土状況 近景（西から）



1号河川跡
遺物出土状況 近景（南西から）



1号河川跡
遺物出土状況 近景(北から)



E地点2号河川跡全景
(南東から)



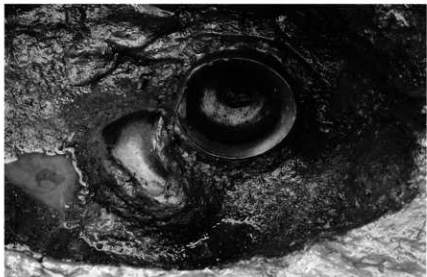
E地点2号河川跡
遺物出土状況(南東から)



E地点2号河川跡内土坑
遺物出土状況（南東から）



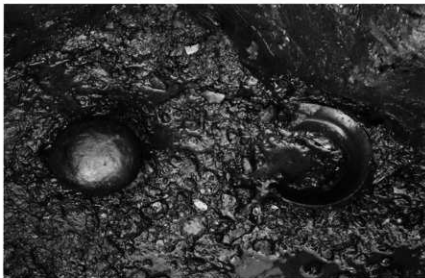
F地点2号河川跡
土層断面（西から）



F地点2号河川跡
遺物出土状況 近景（北西から）



F地点2号河川跡
遺物出土状況 近景（北西から）



F地点2号河川跡
遺物出土状況 近景（北西から）



F地点全景（上が南西）



S1-08 全景 (南西から)



G地点全景 (南から)



SD-07 全景 (南から)



S1-09・10 全景 (南から)



SI-09・10
遺物出土状況（南から）



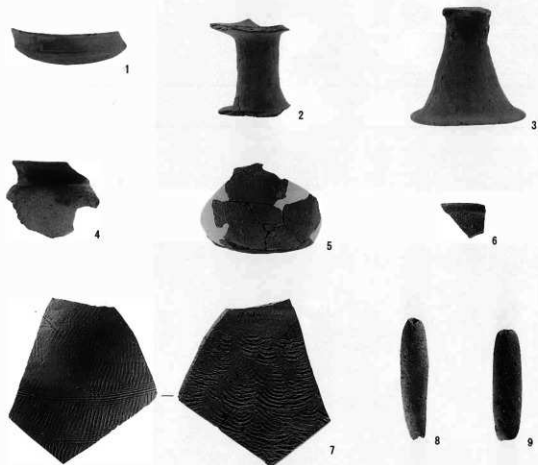
SI-09
遺物出土状況 近景（南から）



SI-09
遺物出土状況 近景（南東から）



SI-01 出土遺物



SI-02 出土遺物



1



SI-03 出土遺物



1



1

2

SI-04 出土遺物



1



2

SI-07 出土遺物



1



2

SI-08 出土遺物



1

2



3

SI-10 出土遺物



1



2



3



4



5

SI-09 出土遺物



1号河川跡出土遺物(2)



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40

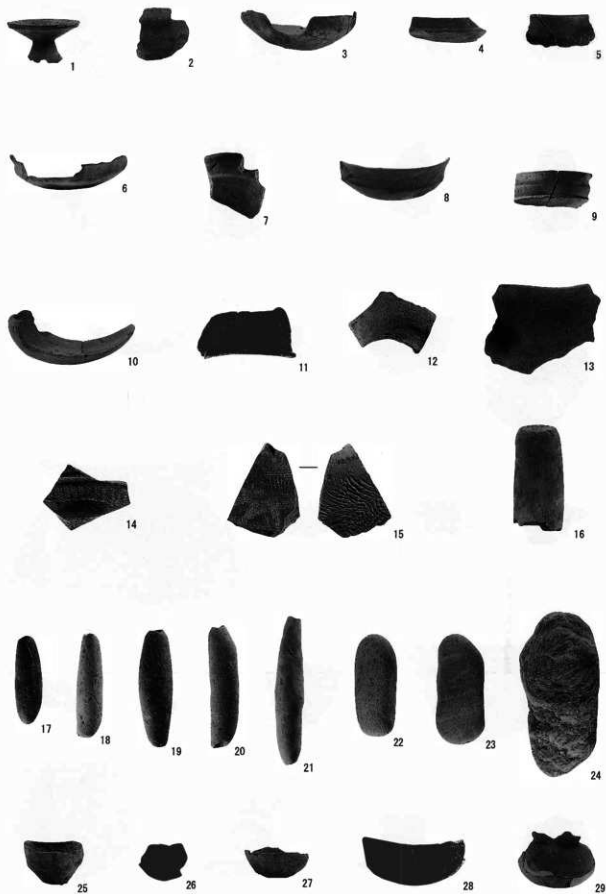


41

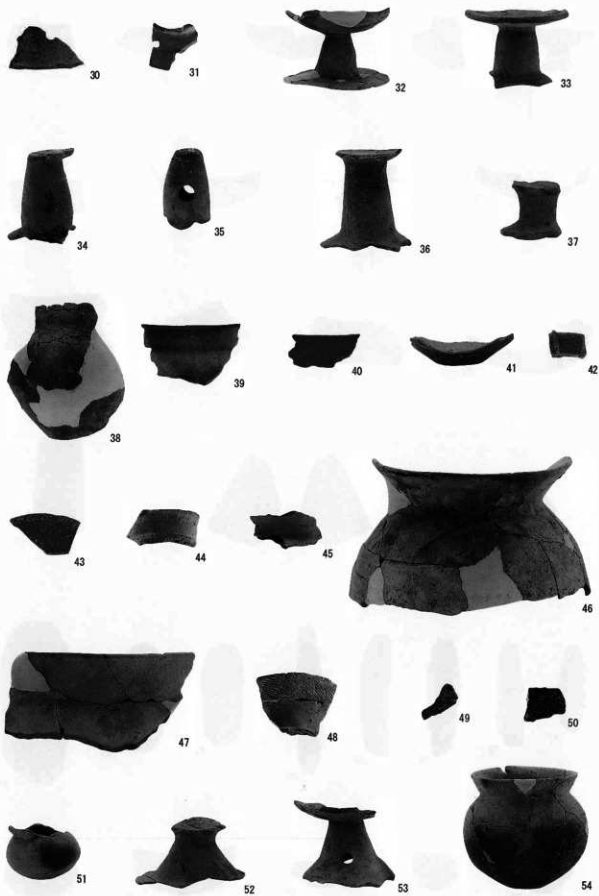


42

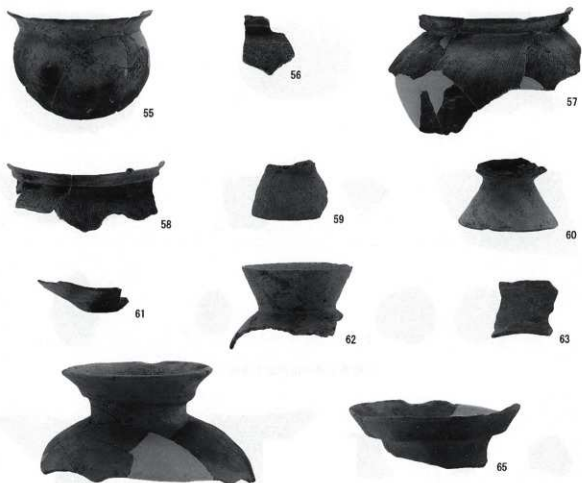
1号河川跡出土遺物(4)



E地点2号河川跡出土遺物(1)



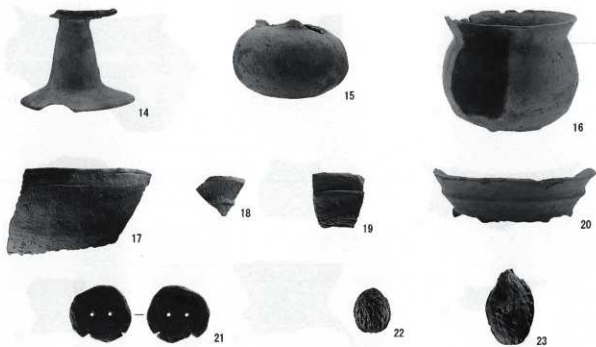
E地点2号河川跡出土遺物(2)



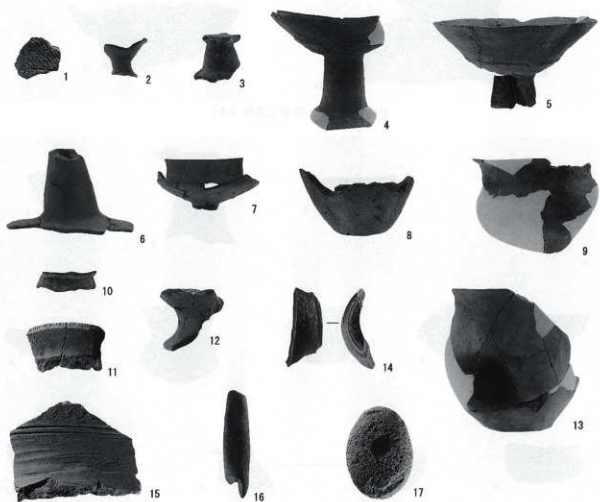
E地点2号河川跡出土遺物(3)



F地点2号河川跡出土遺物(1)



F地点2号河川跡出土遺物(2)



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かわごえだいせき
書名	川越田遺跡Ⅲ
副書名	場外車券場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	有山徑世
編集機関	本庄市教育委員会
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 TEL 0495-25-1185
発行年月日	西暦2008(平成20)年3月25日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川越田遺跡	埼玉県本庄市 児玉町高岡字 北田下ノ巻丁 141番1ほか	54	275	36° 12' 55"	139° 9' 31"	20060703 ～ 20061031	1380㎡	場外車券場建設に伴う 緊急発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川越田遺跡	集落跡	古墳時代 古 代	住居跡 10軒 溝跡 3条 土坑 3基 ピット 26基 河川跡 2条 溝跡 4条	弥生土器 土師器 須恵器 土製品(土鏝) 石製品(白玉、紡錘車) 鉄製品(釘)	古墳時代の埋没河川跡と、 その両岸に展開する古墳時 代前期から後期の大規模な 集落遺跡。

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第9集

川越田遺跡Ⅲ

場外車券場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月20日 印刷

平成20年3月25日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社